昭明太子評伝

福井佳夫

目次

一　王筠の哀策文
二　寛容な人がら
三　気くばり名人
四　曹丕への敬慕
五　とぼしい個性
六　君子の文学
七　哀悼書翰の卓越
八　中庸の文学観
九　風教を助くる有り

十　沈思翰藻
十一　『文選』の編纂
十二　『文選』完成前夜
十三　とつぜんの死

一　王筠の哀策文

亡き皇太子（蕭統）の遺体をのせた柩車は、庇をすこしかたむかせ、馬が身をかがめるようにして、前へすすみだした。羽かざりのついた旗が前駆し、双龍をえがいた大旗は、北方の安寧陵のほうをむいている。ときは、中大通三年（五三一）五月二十一日、いよいよ葬列は埋葬の地へむかうのだ。

太子蕭統は、同年四月六日、息をひきとった。まだ三十一歳のわかさである。その死をしらされたとき、六十八歳の父皇帝（蕭衍。以下では武帝と称する）は、国から光明がきえたのをかなしみ、世継ぎの逝去をいたんだ。太子の遺体が安置された東宮にでかけ、哭礼をおこなって哀しみをつくした。そして詔をくだして、遺体に衮服と冕冠とをまとわせ、昭明というおくり名をたまわったのである。

太子の葬儀にあたって、武帝は司徒左長史の王筠に命じて、太子のために哀策文をつくらせた。その王筠の手になる「昭明太子哀策文」は、さいわいなことに現在までつたわっている。その哀策文の訳文を提示して、蕭統の人となりをざっとみておこう。

［英明な皇太子］

日輪（父帝）の再来をおもわせるひと、それが皇太子さまだった。［皇帝の］嫡子さまと称せられ、［天子さまの］お世継ぎとよばれた。天に比すべきほど気だかく、陽光のような輝きを発せられた。国家の祭祀に奉侍して幸いをさずけられ、祭器をまもって盛名をたもちつづけられたのである。

太子さまは、聖明にして期運に応ずべく、日夜この建康の都におられた。外見は厳粛であったが、内面はやわらいでおられる。その見識たるや深部まで洞察し、その度量たるや大海もつつみこむほど。また仁徳は

可ならざるなく、功業もひとりでにたってこられる。おこころは寛大にして、性質は温雅。ご両親やご兄弟ともなかよくされ、謹厳かつ敬意をもって接しておられた。おおくの徳化をおこなわれ、情けぶかくまた英明であられた。かくして三善（父、君、長者につかえる）をよくしたので、天下の人びとは太子さまを慶賀したのであった。

［亡き母への喪］

この太子さま、軒緯（けんい）の星が光をとざし、丁貴嬪がお亡くなりになるや、喪中ずっと悲しみの情につつまれ、憂いのなかで哀悼されていた。亡き母をしたって涕泣するばかりで、食べものも喉をとおらない。喪明けの禫祭（たんさい）がすんで一月がすぎても、まだ哀しみの情がつきなかったのである。

［監国撫軍の任］

太子さまは、十五歳で監国撫軍の任につかれ、また郊禋（こういん）の祭も継承された。つつしんで父母のご機嫌をうかがい、食膳にも配慮をつくされた。黄金や宝玉でかざられた冠冕をかぶり、四頭の黒馬と飾り輪の馬車にのられた。そして梁室をもりたて国運をさかんにし、祭祀を主催し民衆をやすんじなさったのである。

また［父帝をお助けして］慎重に政務を処理し、万機をすべられた。つつしんで裁判にあたり、商業活動もよく保護された。心中にゆたかな情愛をもち、喜怒の情を顔にださず、親切に施しをなされ、したしく恩情をかけられたのである。

［学芸への関心］

太子さまは、初学のころから学問にもご熱心で、経書を手にとって句読をうたれた。また釈奠（せきてん）の礼をおこなって先聖をあがめ、腰をひくめて師傅（しふ）に丁重に接せられた。優秀だったので師傅をわずらわすことなく、

訓導も必要がないほどである。みずから博文約礼につとめ、機をみては学問にはげまれた。そして仏学を探求し、深奥の機微もさぐられた。図緯（とい）の学にも思いをこらし、易の学問も研鑽された。さらに礼の学にも沈潜し、各種の典籍もたしなまれた。また華麗な文章をたのしみ、その味わいを堪能されたのである。

さらにご関心は諸子の書におよび、群書の類までひろがっておられた。あまねく書籍を収集され、古籍の類までおよんだ。美麗な書巻は書斎に山積みになり、儒や墨などもきちんと分類された。そして周武王のごとく黄河をみては教訓をご認識になり、魯国を遠望しては儒学さかんなさまを称揚されたのである。

また太子さまは、思いを詠じて詩をつくられたが、それは殿さま芸の類ではなかった。詩句をつづっては温順、思いを叙してはあでやか。そして字をつづるや修正する必要はなく、筆がとまることもなかった。心中につぎつぎと想念がわきでて、きよらかな詩句がつみあがっていったのである。

［文雅の楽しみ］

太子さまは天下の英才をとりたて、俊秀を自分の周辺にあつめられた。さらに、その学識たるや博大をきわめ、辞藻もゆたかであられた。談論においても当時の雄であり、文壇においても称賛された。あの四友でも太子の徳望をたたえ、七子だって太子の俊才ぶりに気がひけるほどだった。

太子さまは博望苑に賢人をまねき、華池で賓客をもてなした。彼らとともに舟にのり、馬車でも隣席にすわられたのである。詩文をつくっては麗辞をつらね、酒杯がいきかっては芳香がただよった。彼らへの好意は置酒よりもあつく、賞賜は宝玉よりも貴重なものだった。

［天下は仁に帰す］

かくして恩情は風のように遠地までふきよせ、ご盛業は日々あらたにすすまれた。太子さまにあっては、

仁をほどこすことは、鼎をあげるほど困難ではなく、徳をおよぼすことも、むつかしいものではなかった。恩沢は庶民におよび、幸いは百神にもおよんだ。四方の人びとは太子さまの道義をしたい、天下の人びとはその仁徳ぶりに帰服したのである。

［太子の死］

ところが、ふいに雲気があしき前兆をつげ、邪悪な気が凶象をしめした。星々から光がかくされ、山々から土壌がくずれたのだ。太子さまは［この世をさって］天界の客となり、徳望は永遠にうしなわれた。役人たちは庇護者をうしない、だれにむかって指導をあおげばよいのか。ああ、かなしいことだ。

天子さま（武帝）は哀悼の情をしめし、お心は悲しみの情でいっぱいだ。ご子息たちは哀号され、ご兄弟たちも慟哭されるばかり。太子さまを追慕するご友人たち、悲しみにくれる民草たち。国がほろんだかのごとく憂いにつつまれ、大黒柱がおれたかのようにおそれたのである。ああ、かなしいことだ。

初夏四月となり、麦の熟する時期ではあるが、衛兵たちは警護するかたをうしない、かんばしい草木は生気がなくなった。書斎は主（あるじ）なくして帳（とばり）がむなしくたれ、談論の場にすわる者もいない。祭食がむなしくならび、孤灯もかげりがちとなった。ああ、かなしいことだ。

［葬列の進行］

葬儀によき日をえらばんと、筮竹（ぜいちく）で卦をだし亀甲でうらなった。やがて墓道がほられ、陵墓ができあがった。いま侍衛が整列し、葬具も光輝をはなっている。かつては漳水や滏水のちかくを遊覧し、客人たちは声もなくつきしたがったものだが、いまは郊外の陵墓にむけて、葬列がしずかにすすんでいる。ああ、かなしいことだ。

宮殿からとおざかり遠地までやってき、墓地にさしかかって方向をかえた。だが墓地への道をたどらんとするも、どうして前進できようか。都城のほうをながめては、一歩をふみだしがたい。それでも葬列はうねうねつづく坂道をのぼり、はるかな平原をすすんでゆく。馬はたちどまって哀しげにいななき、車夫も挽歌をうたって涙をながす。ああ、かなしいことだ。

［墓地への埋葬］

［埋葬においては］人びとの歎き声と笛の響きがまじり、太陽も憂い顔に変じたかのようだった。すずしき夏木立の蔭（かげ）があっても、ものさびしい寒林かのようである。［埋葬がおわり］人びとは都城にかえろうとするも、太子さまのご生存をうたがった。そしてそのお姿をさがしてみたが、みつかることはない。天地というものは私情がなく、太子さまのお姿は永遠にきえたのだ。ああ、かなしいことだ。

太子さまはくらい冥宮にゆかれ、静謐な墳墓でお休みになられる。だが、声誉は盛大な葬儀のなかでつたわり、徳業は昭明という諡（おくりな）であきらかとなった。その忠貞ぶりは日月のごとくかがやき、英名は天地にひろまっておられる。

小臣の私（王筠）は、かく太子さまを叙してきたが、事実そのままで恥じることはなにもかいてはおらぬ。ああかなしいことだ。

「式載明両、「既称上嗣、「儀天比峻、「奉祀延福、
「実惟少陽。「且曰元良。「儷景騰光。「守器伝芳。
睿哲膺期、旦暮斯在。「外弘荘肅、「識洞機深、「立徳不器、
「内含和愷。「量苞瀛海。「至功弗宰。

寛綽居心、循時孝友、咸有種徳、恵和斉聖。三善逓宣、
温恭成性、率由厳敬。万国同慶。

軒緯掩精、纏哀在疚、孺泣無時、蔬饘不溢。
陰羲弛極。殷憂銜恤。禫遵踰月、哀号未畢。

実惟監撫、亦嗣郊禋。問安肅肅、金華玉璪、隆家幹国、
視膳恂恂。玄駟班輪。主祭安民。

光奉成務、万機是理。矜慎庶獄、誠存隠惻、殷勤博施、
勤恤関市。容無慍喜。綢繆恩紀。

爰初敬業、離経断句。奠爵崇師、寧資導習、博約是司、
卑躬待傅。匪労審諭。時敏斯務。

弁究空微、馳神図緯、沈吟典礼、饜飫膏腴、
思探幾蹟。研精爻画。優遊方冊。含咀肴核。

括囊流略、遍該細素、勝帙充積、瞻河闡訓、
包挙芸文。殫極丘墳。儒墨区分。望魯揚芬。

吟詠性霊、豈惟薄伎。属詞婉約、字無點竄、壮思泉流、
縁情綺靡。筆不停紙。清章雲委。

総覧時才、学窮優洽、或擅談叢、四友推徳、
網羅英茂。辞帰繁富。或称文囿。七子慚秀。

望苑招賢、
華池愛客。
託乗同舟、
連輿接席。
搦文掞藻、
飛觴汎醟。
恩隆置醴、
賞逾賜璧。
徽風遐被、
盛業日新。
仁器非重、
德輶易遵。
沢流兆庶、
福降百神。
四方慕義、
天下帰仁。
雲物告徴、
祲沴褒象。
星霾恒耀、
山頽朽壤。
霊儀上賓、
徳音長往。
具僚無蔭、
諮承安仰。
嗚呼哀哉。
皇情悼愍、
切心纏痛。
胤嗣長号、
跗萼増慟。
慕結親遊、
悲動氓衆。
憂若殄邦、
懼同折棟。
嗚呼哀哉。
首夏司開、
麦秋紀節。
容衛徒警、
菁華委絶。
書幌空張、
談筵罷設。
虚饋饛餱、
孤燈翳翳。
嗚呼哀哉。
簡辰請日、
筮合亀貞。
幽埏夙啓、
玄宮献成。
武校斉列、
文物増明。
昔遊漳滏、
今帰郊郭。
賓従無声。嗚呼哀哉。
徒御相驚。
背絳闕以遠徂、
轜青門而徐転。
指馳道而詎前、
望国都而不践。
陵脩阪之威夷、
遡平原之悠緬。
驥蹀足以酸嘶、嗚呼哀哉。
挽悽鏘而流泫。
混哀音於簫籟、
変愁容於天日。
雖夏木之森陰、
返寒林之蕭瑟。
既将反而復疑、
如有求而遂失。
謂天地其無心、遽永潜於容質。嗚呼哀哉。
即玄宮之冥漠、
安神寝之清閟。
伝声華於懋典、
観徳業於徽謚。
懸忠貞於日月、
播鴻名於天地。

惟小臣之紀言、実含毫而無愧。嗚呼哀哉。

以上が、王筠「昭明太子哀策文」のすべてである。蕭統の人となりと生涯、そしてその死とが、古語や典故をまじえて、格調たかく叙せられている。

この哀策文、おおきくみれば、前半で人となりと生涯をたたえ、後半（「雲物告徵」以下）でその死と葬儀とを叙するという構成をとっている。その構成の意図がわかるように、内容によって訳文を分割し（換韻の位置とは、かならずしも一致していない）、各段に小見だしをつけておいた。これによってこの作は、称賛と哀悼とが折半して叙されていて、いかにも哀策文らしい行文になっているのが了解できることとおもう。

さらに、あとに原文も附しておいたので、この作の美的行文ぶりも確認できるだろう。そのさい、対偶は横二行にして提示しておいた。これによって、駢体のおおさ（そして散体のすくなさ）が、視覚的にも実感できるはずだ。

一篇中の駢散をかぞえてみると、対偶を構成する句は百四十六句である。全句数が百六十九句なので、対偶率は86％となる。この86％という数字は、六朝の美文のなかでも突出したものだ。徐陵「玉台新詠序」96％にはおよばないが、陸機「文賦」66％や蕭統「文選序」62％、蕭綱「与湘東王書」63％などを、はるかにしのぐものである。その意味で、この作はそうとうレベルのたかい美文だといってよい。太子の急逝による混乱と心痛のさなか、わずか二カ月たらずのあいだで、王筠はこの文章をつづったのである。もって、王筠のなみなみならぬ才腕がうかがえよう。

つづいて句形。四字句の韻文が基本だが、文末の「背絳闕以遠徂」以下では、「○○○／助○○」型の六字句にきりかわっている。この型の六字句は、辞賦に多用される句形であり、感情を吐露するのにふさわしいスタイ

ルだ。王筠は、文末にそうした六字句をおいて、いわば賦ジャンルの乱のようにして、哀悼の情を高潮させようとしたのだろう。また、後半に出現する「嗚呼哀哉」も、その執拗な反覆によって、悲しみの情を増幅させている。

この哀策文をつづった王筠（四八一～五四九）は、このとき五十一歳。当時としては、かなりの年配だ。東宮にながいことお仕えしてきた、亡き太子の側近中の側近である。彼は二十七歳のとき（天監六年、五〇七）、太子舎人として東宮にはいった。そして自分の息子のような皇太子、ときに七歳の蕭統に近侍したのだった。それから現在にいたるまで二十四年、途中で地方にでたり、病気で養生したりしたこともあったが、そうしたとき以外は、ほぼ蕭統とともにすごしてきた。その意味で、武帝が彼に哀策文の執筆を命じたのは、妥当な指名だったといえよう。

この王筠、政務の才はそれほどでもなかったが、琅邪（ろうや）の王氏の血筋をうけつぐ名門の出である。その遠祖には、晋の王導がいる。北方に盤踞した匈奴の難をさけて、江南に東晋を樹立したあの王導である。また祖父の王僧虔、父の王楫も名声たかい人物だ。そうした血をうけ、王筠もなかなかの知識人であった。

詩文の方面では、当代でも一流の腕前であり、わずか十六歳のときにつくった「芍薬賦」（いまは佚）は、名篇として人びとから称賛された。またわかいころ、当時の文壇の巨匠だった沈約からも、その詩才をみとめられていたという。

太子の蕭統も、文学がたいへんすきだった。それゆえ王筠は、東宮でも、詩文の師匠として遇されていたのだろう。ただその王筠、おのが文才を、太子の哀策文のためにふるうことになるとは、思いもしなかったにちがいない。

余談ながら、太子の葬儀を主催し、哀策文の執筆を命じた武帝も、そしてじっさいに執筆した王筠も、ともに蕭統ほどの丁重な葬儀はしてもらえなかった。この哀策文をかいてから十八年後、武帝も王筠も、侯景の乱のさなか、惨死してしまったからだ。宮城のなかで幽囚の身となった武帝は、侯景に食事をへらされて衰弱し、「蜜をくれ」といいながら、そのままこときれた。享年八十六。また王筠のほうも、混乱のなか、避難先において盗賊に襲撃され、恐慌のあまり井戸におちて死んだ。享年六十九。さらに王筠の家人十三人も、このときともに殺害され、その屍は、やはり井中のなかに投棄されたという。

そうしたなか、この王筠「昭明太子哀策文」だけは、混乱のなかでも湮滅することなく、現在までつたわったのだった。それは、王筠の哀策文がすぐれた作だったからとか、運がよかったからとかだけの理由ではあるまい。おそらく、早世した蕭統をしたう気もちが、世の人びとに存していて、つぎつぎと書写されていったので、結果的に残存することができたのだろう。

この哀策文、世間に公表されるや、「復(また)た嗟賞せられたり」という（『南史』王筠伝）。かかれた当初から、そうとう話題になっていたのだろう。さらに後世の批評家にも、

文飾と内容がほどよく調和し、表現と事実とがよりそっている。あたかも骨格と筋肉とが、ぴたりとつりあっているかのようだ。

文質適中、辞与事副、骨肉停勻。

と評されるなど（『駢体文鈔』巻五譚献の評）、概して好評をもってむかえられている。この清の譚献の評言からみると、おそらく美的な行文と、亡き太子を哀悼する内容とが、ほどよく調和しているとみなされたのだろう。

ただ、そうだったとしても、この「昭明太子哀策文」の内容が事実であり、そのまま信じてよいというわけで

はない。そもそも、哀策文は亡きひとをたたえる文であり、事実より褒辞をつらねるほうにかたむきやすいことは、常識だとせねばならない。ましてや、その執筆者が太子の側近の者だったとすれば、とうぜん身びいきふう発言があってしかるべきだろう。

たとえば、この哀策文では蕭統の死を、「ふいに雲気があしき前兆をつげ、邪悪な気が凶象をしめした」（雲物告徴、祲沴褒象）と、抽象的にかいているだけだ。しかし『南史』昭明太子伝によれば、蕭統の死の直接の原因は、東宮内の後池で蓮採りに興じていたとき、事故にあったためだという。より具体的には、宮女とともに舟にのっていたところ、その宮女がたわむれて舟をゆすったため、蕭統は池中におちてしまった。なんとかひきあげられたが、そのさい太股を負傷し、どうやらその傷が致命傷になったらしい。

もしこれが事実だとすれば、哀策文が「四方の人びとは太子さまの道義をしたい、天下の人びとはその仁徳ぶりに帰服した」（四方慕義、天下帰仁）とたたえる昭明太子にしては、いささか不名誉なことだとせねばならない。だがそうしたことは、この哀策文にはかかれていないのである。

ほかにも、蕭統の晩年におこった、生母の墓地購入にかかわる「蠟鵝（ろうが）」埋設の発覚、そしてそれによる武帝との不仲など、蕭統が死ぬ直前には、不可解なできごとがいくつか生じている。だが、この王筠の哀策文には、その種のことも、とうぜんのことながら叙されていない。

以下では、そうした、おもてにしにくい事がらにもふれながら、『文選』の編者として著名な蕭統について、その事迹をくわしくかたってゆくことにしよう。

二　寛容な人がら

蕭統、あざなは徳施は、斉末、中興元年（五〇一）九月に雍州の中心地、襄陽でうまれた。

このとき、父の蕭衍（しょうえん）は、乾坤一擲の大勝負にいどんでいた。その前年（永元二年、五〇〇）、兄の蕭懿（しょうい）を殺害された彼は、ついにおのが根拠地の雍州で、反旗をひるがえしたのだ。その相手は斉の天子、東昏侯（本名は蕭宝巻。践祚したが廃されたので、帝号をあたえられなかった）。いくら暴虐だったとはいえ、ときの天子である。一介の地方（雍州）刺史にすぎぬ男の反逆、勝敗の帰趨は、予断をゆるさぬところであった。

だが、機敏で決断力にとむ蕭衍は、このとき、じつに行動がはやかった。すぐ、ちかくの江陵にいた荊州長史の蕭穎胄（しょうえいちゅう）を説得し、協力をえることに成功した。そして穎胄とともに、彼の主君だった荊州刺史の蕭宝融（東昏侯の同母弟。このとき十四歳）をたてて、和帝として擁立したのである。そして、はやくも中興元年十月には、義師をひきいて建康までおしよせた。

すると東昏侯は、かたく籠城して援軍をまつかとおもいきや、あっけなくこの世のひとでなくなった。暴虐で徳望がなかった彼は、さっさと臣下にみかぎられ、宮中で殺害されてしまったのである。享年十九。

さらにこの時期、蕭衍はついていた。斉の将軍だった徐元瑜が投降し、協力者の蕭穎胄が江陵で急死した（同年十二月）という連絡がはいったのだ。とくに後者は、ありがたいニュースだった。なお天下の帰趨さだまらぬこの時期、強力なライバルになりそうな相手が、自分に協力だけして、さっさときえてくれたのである。これで義師中に、蕭衍を掣肘（せいちゅう）できる人物はいなくなった。蕭衍周辺の人びとは、この二事を、蕭統の誕生とあわせて三慶と称したという。これと前後して東昏侯がころされ、建康が陥落したので、識者たちは、これは天命があつまっ

たのだとおもいこんだのだった。

かくして建康に入城した蕭衍は、幕中の范雲や沈約らとともに、周到に斉梁交替の準備をととのえた。そしてそのうえで、翌中興二年（五〇二）の四月、和帝から禅譲をうけて帝位についたのである。そして年号を天監とあらため、梁朝を開始したのだった。

蕭統はこうした時期、よりくわしくいえば、蕭衍が義師をおこして建康にせまったころに、父の根拠地であった襄陽でうまれたのだった。蕭統は、父の蕭衍にとっては、はじめての息子である。ときに衍、三十八歳。

それまで男子にめぐまれなかった蕭衍は、弟蕭宏の子だった蕭正徳を養子にもらっていた。ところが蕭統がうまれるや、衍は天監元年（五〇二）十一月に統を皇太子にしたのだった。そのため正徳は、おいだされるように、西豊県侯に封じられてしまった。これを怨みにおもった正徳は、それ以後ずっと非行をくりかえすようになったという。彼なりに鬱屈があったのだろう。

ところがその鬱屈は、時間がたっても、きえることがなかった。なんと、それから四十六年後、彼は敵への内応という行為で、鬱屈をはらしたのだ。すなわち太清二年（五四八）、侯景が乱をおこしたさい、正徳はひそかに侯景軍と連絡をとり、舟を用意して渡江させたのである。これは、蕭衍にとって、そして梁にとっても、痛恨の裏切り行為であった。これによって、都の建康は侯景の軍によって包囲されてしまい、けっきょく梁衰亡の契機になったのだった。

時間をもとにもどそう。

父の蕭衍が建康を陥落させたあと、赤ん坊の蕭統は、母の丁貴嬪（本名は令光）につれられて、父の根拠地だった雍州の襄陽から、はるばる都の建康へやってきた。母はこのとき、芳紀十八歳。以後、母子とも建康の宮中に、

居住することになる。丁貴嬪はのちに、弟の蕭綱（第三子）と蕭続（第五子）をうんで、蕭衍をよろこばせた。夫の蕭衍とともに仏教に熱心で、華美をこのまぬ女性であったという。蕭統は、父とともに、この母のこともたいへんしたっていた。そのため、彼女が四十二歳でこの世をさると悲嘆にくれ、周辺の人びとが心配するぐらい、やせおとろえたのだった（後述）。

さてこの蕭統、うまれつき聡明で、三歳で『孝経』と『論語』とをまなんだ。五歳になると五経をよみ、すべて諷誦できた。九歳のときには、壽安殿で『孝経』を講義したが、大義によく通じていたという。そして講義がおわると、国学で挙行された釈奠の祭に臨席したのである。

のち、蕭統は仏教にも熱心になったが、それは両親の影響をうけたもので、やや皮相なものだったろうとおもわれる。彼は仏典をよんだり、法会講経をひらいたりはしたものの、出家したり、［父帝のように］捨身したりしたわけではない。つまり蕭統にとって、仏教は教養としてまなんだにすぎず、実践面においては、やはり儒教に依拠していたようだ。

じっさい、成人後はおおく太子として、監国撫軍の任務にはげみ、武帝をたすけて政務にいそしんでいる。やはり基本的には此岸における経世済民を指針として、日々をすごしていたのだろう。

この蕭統の伝記を叙した『梁書』巻八や『南史』巻五十三の本伝には、蕭統の事迹に関して、その俊才や寛容ぶりをしめす逸話が、たくさんちりばめられている。ここでは『南史』のうちから、彼の人がらや為政者としての能力がよくわかる事がらを、適宜要約しながらぬきだしてみよう。

①十二歳のとき、裁判に関心をもち、自分でも罪人をさばいた。仁愛ぶかかったので、重罪であっても杖五十という寛刑にすることがおおかった。武帝はこうした蕭統をわらって、寛刑にしたいときには、蕭統に判

決をまかせたのである。

②ただ建康県でおこった誘拐の捏造事件では、令を発していった。「以前はもし刑にあてはめれば、家族まで連座させてしまうところだった。だが今回の案件では、通常の刑をくだすまいとしても、罪をかるくすることができようか。十年の刑とすべきだ」と。

③蕭統は容姿端麗で、立ちいふるまいも優雅だった。読書しては数行をいっきによみ、一読すれば暗記できた。遊宴や送別会において、詩をつくって十数韻におよぶ大作もあった。また困難な韻であっても、さっとつくって手直しすることがなかった。

④父帝にならって、蕭統も三宝をうやまって、おおくの仏典を読誦した。普通元年（五二〇）四月に甘露が慧義殿のうえにくだったが、人びとは、これは蕭統の至徳に天が感応したものだとおもった。

⑤当時は人びとのあいだに、奢侈がひろがっていた。蕭統は自分の行いで人びとを感化しようとし、すべてに質素をこころがけた。そのため、弊衣を身にまとい、肉は一膳だけにしたのである。

⑥元服してからはおおくの政務を担当した。奏上された事案に誤りや偽りがあると、すぐみぬいたが、特定の人物を非難したりはしなかった。公正に裁判をおこない、完全無罪とすることもおおく、天下のひとはみな、その仁恕ぶりをたたえた。

⑦性格は寛大で包容力があり、喜怒を顔色にあらわさなかった。才能や学問のある人物をまねいては、称賛してやまなかった。いつも古典を討論し、ときには学者たちと古今のできごとを論じた。

⑧普通年間（五二〇～五二七）、大軍をおくって北魏を攻撃したため、建康では米の値段が騰貴した。そこで蕭統は、自分の衣服や食事を質素にするよう命じた。長雨や積雪があるたびに、腹心の部下を派遣して、

陋巷をあるかせた。そして貧窮した家や路頭にまよう者をみつけたら、こっそり十石ずつ米をあたえた。

⑨また衣装担当の役所が所有する絹を放出して、毎年おおくの肌着をつくった。そして三千着を冬季、こごえる民衆にあたえたが、それをしられぬようにした。もし民衆が死んで埋葬もできないときは、棺桶も用意してやった。また、民衆が賦役でくるしんでいると耳にしては、顔色をかえた。戸籍と実数が一致しないと、労役がおもくならないかと心配していた。

⑩呉興郡ではしばしば水害がおこって収穫が不足するので、ある廷臣が、おおきな水路で、水を浙江のほうにながすべきだと主張した。そこで中大通二年（五三〇）春、武帝は詔をくだして、前の交州刺史の王弈を派遣した。そして呉、呉興、信義の三郡の男子に、これにあたらせた。すると蕭統は、この挙の功すくなきことをうったえて、これを中止するよう上疏した。

⑪蕭統は孝順謹厳なることは天性であり、宮中に伺候するたびに、五更よりまえに城門があくのをまっていた。東宮にいても、内室でくつろいでいるときでさえ、起坐のたびに、西南にむき、台城のほうに顔をむけていた。もし前日に宮中に一泊して父帝にお目にかかるときは、きちんとすわったまま、朝をまったのである。

⑫うまれつき仁愛ぶかかった。あるとき宮中の警備の役人が、荊杖（けいじょう）をもっているのをみた。たずねると、道路の人払いをするのにつかうのだという。蕭統は民衆がいたい思いをすると心配し、手板をかわりにもたせた。また食事のなかに、しばしば蠅や小虫がいたが、蕭統はこれをそっと皿のはしにとりのぞいた。料理人が罰せられぬよう、他人にわからぬようにしたのである。

こうした蕭統の逸話は、いずれも、彼の寛容かつ篤実な性格や、為政者としての有能ぶりを叙したものだ。

たとえば、寛容な性格をしめすものとして、①や⑫の話柄があげられよう。そうした温情ぶりは、民衆にもおよんでいた。⑧と⑨は、非常時において、民衆の救済をこころざしたことをしめしているし、また⑩では、実務的な政策でも、済民を重視していたことをおしえてくれている。いっぽう⑤や⑪は、彼が質素な生活を苦にせず、行住座臥において、つねに篤実な態度をとっていたことを叙したものだろう。

蕭統の為政方面での能力をみてみよう。すると⑥によれば、彼は元服したあと、父帝をたすけて政務に尽力し、また臣下の誤りにも的確に気づくことができたようである。また②のように、わかくして、冷静な立場で裁判もおこなっていた。蕭統というと、ややもすれば詩文や学問だけのひと、というイメージが先行しがちだが、このように為政者としての資質や実務的能力も、じゅうぶん有していたのである。

だが、蕭統の場合は、やはり学問や詩文への傾倒を、みのがすわけにはいかないだろう。じっさい、③は学問や詩文へのたかい能力をかたっているし、④は仏教へも関心があったことをしめしている。

ただそれらは、あくまで蕭統個人の資質にすぎぬ。彼の場合、もっと重要なのは、自分と同種の資質をもった文臣を周辺にあつめ、あつく保護してやった、ということだ。⑦の「性格は寛大で包容力があり」や、「才能や学問のある人物をまねいて、称賛してやまなかった」というのが、それに該当しよう。このこのましい性格は、のちにふれるが、蕭統が側近の者を東宮にまねいて、『文選』を編纂させたときに、ひじょうに役だったものとおもわれる。それゆえ寛大で包容力があり、他人をたたえてやまぬ性格こそ、蕭統のたぐいまれな美点として、記憶されておいてよかろう。

あとで紹介するように、この『南史』では、太子に具合のわるいこと（たとえば蠟鵝事件）も、率直に叙している。とすれば、右の①～⑫の記述は、［王筠「昭明太子哀策文」とはちがって］称賛一辺倒の姿勢でなく、是々

非々の立場から叙したものだと判断される。したがって、『南史』の記事は判官びいきの結果ではなく、当時、こうした事がらが、じっさいに世につたわっていたとかんがえねばならない。初唐の史官（李大師・延寿父子）は、それらを事実だと認定し、かく叙したのである。そうだとすれば、蕭統はおそらく、じっさいに寛容かつ有能なひとだったとかんがえてよかろう。

三　気くばり名人

蕭統の寛容な人がらを、もうすこしくわしくみてみよう。その寛容さは、まず身ぢかな弟や臣下たちに、発揮されたようだ。

まず弟たちへの対しかたをみていこう。たとえば、蕭統が三弟の晋安王蕭綱（のちの簡文帝。五〇三～五五一）におくった「答晋安王書」をみると、つぎのような一節がある。

○五月二十八日づけの書翰と同封の詩一首をうけとった。何度もよみかえしていたら、おまえと膝をつきあわせているような、たのしい気分になったよ。おまえはもともと天賦の才があるうえ、詩がすきなんだな。自分の長所をわすれず、さらに日々進歩している。首尾ともにすっきりしていて、佳作だとおもう。何度もよみかえし、なかなかストップできないほどだったよ。

得五月二十八日疏并詩一首。省覧周環、慰同促膝。汝本有天才、加以愛好、無忘所能、日見其善。

首尾裁浄、可為佳作、吟玩反覆、欲罷不能。

○むかし司馬相如が「大人賦」を奏上し、陳琳が檄の草案を呈示したが、それをよんだ武帝（劉徹）と曹操

は時代こそちがうものの、ともに見巧者（みごうしゃ）と称された。武帝は「まるで雲上にいるかのよう」と嘆声を発し、曹操は「頭痛がなおった」と称賛したという。私は以前から、これらの話はちょっとおおげさで、信用しがたいとおもっていた。ところがおまえの書翰と詩をよむや、私も心配ごとをすっかりわすれてしまったんだ。おかげでむかしの［傑作はよむ者の心をいやすという］話も、でたらめでないとわかったよ。

「相如奏賦、曹劉異代、並号知音。「発歎淩雲、「嘗謂過差、
「孔璋呈檄、「興言愈病、「未以信然。

一見来章、而樹諼忘痗、方證昔談、非為妄作。

○清風がふきよせる明月のしたにいると、おまえたちのことがおもわれてならぬ。我われ兄弟はみな、自分の藩国をおさめているので、じゅうぶん親近することもできぬ。かく思いをつづってくれば、夢のなかでもあいたい気もちがつのってくるよ。寒さにあたらぬように気をつけて、私に心配させぬように。いいたいことは、以上だ。返事をまっているよ。統敬白。

但清風朗月、思我友于。「各事藩維、興言届此、夢寐増労。「善護風寒、指復立此、促遅還書。某疏。
「未克棠棣、「以慰懸想、

兪紹初『昭明太子集校注』によれば、この書翰文は、蕭統十五歳のとき（天監十四年）の執筆だという。とすると、受けとり手の蕭綱は十三歳ということになる。現代の学年にあてはめれば、中学三年生の蕭統（皇太子として建康の東宮にいる）が、中学一年生の弟（江州刺史となって赴任したばかり）にあてた手紙ということになろう。こんな少年どうしのやりとりが、現在までのこっているというのは、やはりこのふたりが特別の存在（皇族で、しかも世間からともに俊才とたたえられていた）だったからだろう。

この書翰をかくまえ、蕭統は弟の蕭綱から手紙と詩一首とをうけとっていた（詩のみ現存）。だから兄書翰も、まず弟の前便にふれている。そして弟の詩に対し、「首尾ともにすっきりしていて、佳作だとおもう。何度もよみかえし、なかなかストップできないほどだったよ」と感想をのべ、そして司馬相如「大人賦」や陳琳の檄文に関する典故をふまえながら、それとおなじぐらいの秀作だよ、とほめたたえている。

さらに末尾では、「清風がふきよせる明月のしたにいると、おまえたち弟のことがおもわれてならぬ。……かく思いをつづってくれば、夢のなかでもあいたい気もちがつのってくるよ」と、したしくよびかけている。こうした書翰文は弟への仁恕、すなわち思いやりのふかさをしめすものである。蕭統は、きっと弟たちにも親切で、いい兄貴だったのだろう。

なお、最後で「我われ兄弟はみな、自分の藩国をおさめているので、じゅうぶん親近することもできぬ」とかたっていることにも注意しよう。蕭衍には、蕭統もふくめ八男がうまれた。蕭統の誕生は彼三十八歳、梁朝を樹立する一年まえ。そして弟たちは、みな王朝成立後の生まれだ。

太子となった蕭統は、もちろん宮城の東宮の中にずっとすまう。だがそれ以外の息子たちは、成長してある程度の年齢になったら、みな建康から地方へ出鎮していった。たとえばこのとき蕭綱は、刺史として江州に赴任したばかりだった。このように、蕭統以外の皇子たちは、みな諸侯王として地方に鎮し、何年かすると他の地へうつってゆくのである。そういうふうにして、藩屏として梁の帝室をもりたててゆくわけだ。だから蕭統はこの書翰文で、じゅうぶん親近することもできぬとのべているのだろう。

もうひとつ、こんどは七番目の異腹の弟、蕭繹（しょうえき）（湘東王。のちの梁元帝。五〇八～五五五）へおくった書翰文「答湘東王求文集及詩苑英華書」をみてみよう。

蕭統は二十二歳（普通三年、五二二）のとき、側近の劉孝綽（りゅうこうしゃく）に自分の文集（本伝に「文集二十巻」とある）を編集させたが、さらに『詩苑英華』なる選集（『梁書』本伝に「五言詩の善（よ）き者を、文章英華二十巻と為す」とあるのが、それか）も、それ以前に完成させていたようだ。このとき十五歳だった蕭繹は、兄に手紙（佚）をだして、その両書をよみたいとお願いしたらしい。そうした依頼に対し、蕭統はこの返書「答湘東王求文集及詩苑英華書」をつづって、了解した旨や日ごろの所感をかきおくったのだった。適宜ぬきだしてみよう。

○お手紙拝見。『詩苑英華』と私の文集がほしいんだね、わかったよ。

文箱をあけておまえの手紙をとりだしてみると、よみだしてとまらなかった。おまえの手紙［や同封の詩文］は、主題は虚構をまじえ、内容は見当ちがいの比喩をつかっているが、それでも清新さはとびぬけていて、じつに佳作だとおもう。

得疏、知須詩苑英華及諸文製。発函伸紙、閲覧無輟。雖
事渉烏有、而清新卓爾、殊為佳作。
義異擬倫、

○おまえの詩文をみると、ぴたり文質彬彬（ぶんしつひんぴん）の風をそなえているじゃないか。今回のおまえの手紙の文などは、ことにすばらしい。古風な趣をそなえ、古籍をまなんでいるから、おかげで成果があがって、すごくよいできになっているよ。

観汝諸文、殊与意会。至於此書、弥見其美。
遠兼邃古、学以聚益、居焉可賞。
傍暨典墳。

○また以前、閑暇をえたおり、すぐれた五言詩をあつめてみた（詩苑英華）。近々数十年の名篇でさえ、まだじゅうぶん網羅できておらず、まだ不満はあるんだが、世間にでまわってしまった。完備したものとはい

えないが、まあなんとか読誦にはたえるかもしれない。今回の文集（昭明太子集）にいれた私の作は、できはよくないが、唱和した［賢才たちの］詩にはいいものがおおいはずだ。おまえがほしがるので、ぜんぶおくることにするよ。統敬白。

又往年因暇、搜採英華。上下数十年間、未易詳悉。猶有遺恨、而其書已伝。

「雖未為精覈、集乃不工、而並作多麗。汝既須之、皆遣送也。某啓。

亦粗足諷覧。」

これも、自分の文集をほしがる弟にむけた、ねんごろな書翰文である。ここでも蕭統は、弟がおくってきた手紙［や同封の詩文］をほめちぎっている。「清新さはとびぬけていて、じつに佳作だとおもう」「今回のおまえの手紙の文などは、ことにすばらしい。古風な趣をそなえ、古籍をまなんでいるから、おかげで成果があがって、すごくよいできになっているよ」。こうした兄の賛辞を目にしたとき、十五歳の蕭繹はたいへんうれしくおもったことだろう。

ここにあげた二書翰が典型だが、蕭統は他人（肉親や側近）の才能や詩文をほめて、いい気もちにさせるのが、たいへんうまい。漫然と褒めことばをならべるのでなく、ひとの美点を具体的に指摘してたたえており、りっぱな文学、あるいは人物評論となっている。蕭統は弟にむけてだけでなく、だれに対しても同種の対応がとれたようであり、あたかも気くばり名人といったような観がある（後述）。

以上、弟たちへの書翰二篇を紹介したが、弟にむけた思いやりは、これだけではない。文学好きな弟だった三弟蕭綱や七弟蕭繹とは、しばしば［書翰のなかに同封して］詩のやりとりもしていたようだ。現存するのは、蕭綱との「示雲麾弟詩」、蕭繹との「詠弾箏人詩」ぐらいだが、おそらくこの種のやりとりは、他にもおおかった

に相違ない。

また、種々の非行をおかして、父帝をおこらせた六弟の蕭綸（しょうりん）（五〇七～五五一）にも、兄の蕭統は恩恵をほどこしている。

あるとき蕭綸は、司馬の崔会意からうったえられた。棺おけのなかに会意を無理にはいらせ、そして霊柩用の馬車にのせて挽歌をうたわせ、道をわかせたのである。さらに老婆も馬車にのせて、わざわざ哭泣させたという。葬礼を重視する中国では、あってはならぬ悪行だ。

この崔会意の訴えをきいたとき、父の武帝は怒り心頭に発して、息子の身がらを拘束し、獄中で死を命じようとしたほどだった。すると蕭統は涙をながしながら、弟をゆるしてやってほしいと、父にたのんだのである。おかげで武帝は、蕭綸に死を命じることをおもいとどまったのだった。おそらく、これに類したことが、何度かあったろうとおもわれる。

つづいて、臣下にむけた蕭統の寛容ぶりをみてみよう。蕭統は、「二　寛容な人がら」の⑥や⑫でみたように、臣下が各種の誤りをおかしても、寛大に接していたようである。ここでは、そうした一般の部下に対するものでなく、文学の士たちへの対応をみてみよう。

父の武帝は、自身が知識人だったこともあって、息子たちのために、おおくの文学の士を家庭教師や学友として身辺においた。とくに太子たる蕭統の教育には、蕭衍も力をこめたのだろう、とびきりの知識人を東宮にまねいたのだった。さきに紹介した『孝経』や『論語』などは、孝行で著名な庾黔婁（ゆけんろう）に手ほどきをしてもらったのだが、これ以外の家庭教師もあげてみよう。

儒学の方面では、庾黔婁以外に［年齢順にあげると］、明山賓（めいさんひん）（四四三～五二七）、到洽（とうこう）（四七七～五二七）、

殷鈞（四八四～五三二）などがあげられ、仏教の方面では、釈法雲らの僧侶を玄圃園や慧義殿にまねいて、しばしば講経や講論の会をもよおした。また、武帝が高僧の慧約から菩薩戒をうけたときには、蕭統もその弟子となっている。

また、蕭統は詩文がだいすきだったので、この方面でも、有能な人材が配置された。当初は、文壇の大御所だった沈約が、顧問格としてひかえていた。以後、陸倕（四七〇～五二六）、殷芸（四七一～五二九）、張率（四七五～五二七）、陸襄（四八〇～五四九）、劉孝綽（四八一～五三九、「昭明太子集序」の作者）、王筠（「昭明太子哀策文」の作者）、張緬（四九〇～五三一）、王規（四九二～五三六）、王錫（四九九～五三四）、張纘（四九九～五四九）、謝挙（？～五四八）などが、おりおり東宮にまねかれた。彼らは太子少傅、太子舎人、太子詹事、東宮学士など、東宮内のさまざまな職位について、蕭統の文学修業を指導したり、ともにまなんだりしたのだった。

さらに、『文心雕龍』をものしていた劉勰（四六六～五三二？）も、一時期、通事舎人として東宮につかえ、蕭統からふかくしたわれたという。文学理論や仏教に精通した彼は、自分の息子のような蕭統と、どのような文学談義をかわしたのだろうか。

こうした人びとは、概して彼ら（家庭教師）が年長だった関係上、蕭統のほうがみずからをひくめて、礼遇したり、老師とあおいだりしたはずである。それでも、ながく師事しておれば、師弟の関係をこえた睦まじさをしめすこともあった。そうした関係を推測させる逸話として、つぎのようなものがある。

昭明太子は文学の士を大切にし、いつも王筠、劉孝綽、陸倕、到洽、殷鈞らと玄圃園で遊宴していた。あるとき太子は王筠の袖をとり、劉孝綽の肩をなでながら、「左手で浮丘の袖をとり、右手で洪崖の肩をたたく という詩句のようですね」といった。この二人が大切にされたのは、このようであった。

ここでの昭明太子の発言は、郭璞「遊仙詩」の「左には浮丘の袖を挹(と)り、右には洪崖の肩を拍(う)つ」の詩句をふまえたもの（「浮丘」「洪崖」とは、ともに神仙の名）。このいかにも親密そうな言動によって、蕭統と家庭教師たち、なかでも王筠と劉孝綽との関係が、むつまじいものだったことが推測できよう。

この王・劉の二人は、同い年の俊秀。沈約らよりは、わかい世代に属するが、そうしたなかでは、筆頭格というべき文学的才能と、そして実力とを有していた。

まず王筠は、［先述したように］琅邪の王氏を祖にもつ（蕭統より二十歳の年長）。この王氏は、彼の代まで七代にわたって爵位をつぎ、個々に別集を編してきたという名門中の名門である。この王筠も、さきにみたように、武帝から蕭統の哀策文執筆を命ぜられるほど、詩文に卓越した腕前を有していた。だが彼は、そうした名族の出でありながら、他人にいばることなく、物しずかでおとなしい人がらであったようだ。

おなじく、劉孝綽のほうも、一族に才子がおおい。当時、兄弟やいとこたち七十人がみな詩文をよくし、近古いまだこれあらず、という盛況をほこっていた。この孝綽自身も、王融から神童とよばれたほどの俊才である。さらに父の劉絵の仲間だった沈約や任昉、范雲らからも、その才腕ぶりをたたえられた。彼は王筠よりはやく、天監元年から東宮につかえ（五〇二、太子二歳）、以後も断続的に、蕭統のもとにはべっている。ただ、その性格はたいへん傲慢かつ不遜であり、しばしば他人と摩擦や衝突をおこすトラブルメーカーでもあった。

以上、東宮につかえた家庭教師たちを、簡単に紹介してきた。彼らはいずれも、当代でもトップクラスの俊英たちである。それぞれが、つよい自負を有し、またプライドもたかかった。それだけに、みんななかよく、というわけにはゆかず、たがいに「文人相軽(あいかろ)んず」る傾向もないではなかったようだ。くわえて、蕭統の寵愛の高下によって、官界や東宮での昇進に影響がおよんでくることもあったろうから、相互の競争意識も、なかなかはげ

しいものがあったろうとおもわれる。

そうしたなか、文人相軽のトラブルをおこすのは、やはり劉孝綽であった。彼は、年少時から詩才をしめして、チヤホヤされてきたせいか、成人後は、たいへん鼻っぱしらがつよい人間になってしまった。そのため、ややもすれば他人と衝突しがちで、あちこちで悶着をおこさずにはおかなかったのである。

孝綽のそうした性格が、あるとき深刻な問題をひきおこした。彼は当初、到洽とともに東宮につかえ、仲がよかった。ところが、詩文で自分が優越するとしるや、詩宴のたびに到洽の作を嘲笑するようになったのだった。到洽は、それを怨みにおもっていた。その怨みが、普通六年（五二五）に爆発したのである。

この年、孝綽は廷尉卿という高官についた。そのとき彼は、姫妾を廷尉の役所によんで同居し、母のほうは私邸のほうにすまわせていた。ついで到洽が御史中丞となるや、彼は部下に調査させて、「劉孝綽は、姫妾だけ廷尉の役所にともない、母は私邸のほうにすておいている」と告発したのである。これによって、孝綽は窮地においやられた。孝綽を気にいっていた武帝は、孝綽の悪評をやわらげようと、「姫妾」（妹）の語を「いもうと」（妹）の語にあらためさせたりした。だがそれでも、騒動はおさまることなく、けっきょく孝綽は廷尉を免職になったのだった。

この孝綽免職事件は、当時では大事件だったようである。後年、顔之推もわざわざこの事件を、北地で回想しているほどだ（『顔氏家訓』風操篇）。この事件が特異だったのは、孝綽が到洽に反撃をこころみるなどして、あちこちに波及したことである。そしていっときは、蕭統もまきこまれそうになったのだった（後述）。

ただ、そうした反撃が功を奏したのか、失脚した孝綽、はやくも翌々年には復活することができた。すなわち、普通八年（五二七）に蕭繹（荊州にいた）にひろわれて、西中郎湘東王諮議として官界に復帰することができた

のである。そのさい孝綽は、蕭統に「謝東宮啓」という感謝の書翰文をおくっている。すると、詳細は不明であるが、おそらく蕭統が、裏で彼の官界復帰に尽力したのだとおもわれる。

ところで、この孝綽の官界復帰で注目したいのは、彼が東宮に再出仕したのは、到洽がもう死んだあとだったということだ（到洽の死と劉孝綽の官界復帰は、ともに大通元年〈五二七〉。そして劉孝綽の東宮復帰は、おそらく大通二年〈五二八〉あたり）。しかも蕭統は、この到洽が死んだとき、三弟の蕭綱にむけて「与晋安王綱令」をおくって、丁重に哀悼の情をのべているのである。その令のなかに、つぎのような一節がある。

北兗州太守の明山賓どのと長史の到洽どのが、あいついで逝去された。私は悲嘆にくれるばかりで、痛惜の念がおさまらぬ。……到洽どのは、風格じつに闊達で、詩文もみるべきものがあった。官人として職務にあたっては、まったく公平無私をつらぬいた。これらのおかたは、天下の俊才にして、国子学の宝だった。でも死んだいま、彼らを哀惜したとて、もうどうなるというのだろうか。

明北兗到長史遂相系凋落。傷怛悲惋、不能已已。……

到子「風神開爽、当官莅事、介然無私。皆「海内之俊乂、此之嗟惜、更復何論。
　　「文義可観、　　「東序之秘宝。

蕭統はここで亡き到洽のことを、「官人として職務にあたっては、まったく公平無私をつらぬいた」と称賛しているのに注意しよう。この発言は、故人にむけた儀礼的な発言でなく、けっこうおもい意味をもっていたはずだ。というのは、この称賛は、到洽の孝綽告発を是認（ぜにん）したものと、解せられなくもないからである。いや時期的にかんがえて、すくなくとも当時の人びとは、そうおもったことだろう。

蕭統はかつて、孝綽に自分の文集の編纂を委嘱し、その序文までかいてもらうほど、彼を信頼していた。その

孝綽を告発し、失脚せしめたのが、この到洽だったのである。とすれば、到洽が死んだあと、その遺族たちは、おちつかぬ気分であったことだろう。「孝綽を弾劾した張本人が、死んでしまった。うわさによると、孝綽がまもなく建康にかえってくるらしい。そうすると、我われはどうなるのか」と。

そうしたなか、蕭統は三弟への令のなかで、到洽をかく称賛したのである。これは、つまり「亡き到洽どの、貴殿の孝綽告発は、けっしてわるくなかったぞ」と暗にかたっているのだろう。このことばは、これ以後、到洽遺族たちの安寧を、保障してくれるはずだ。後日、この優渥（ゆうあく）なことばをつたえきいたとき、到洽の遺族たちは内心ホッとしたのではあるまいか。

こうした蕭統の一連の処置、まことにみごとというほかない。孝綽に官界復帰という実をあたえ、到洽の遺族に、告発是認という名をあたえたのである。きちんと双方の顔をたてており、間然としたところのない配慮だといってよい。かく紛糾をおだやかにときほぐし、人心を収攬（しゅうらん）してゆけるのが、蕭統のたぐいまれな長所だったのだろう。気くばり名人とよぶゆえんである。

蕭統の東宮のなかでは、ここまで深刻な事態にはならぬまでも、これに類するような文人相軽の衝突は、しばしばおこっていたことだろう。蕭統は、そうした衝突や紛糾をたくみに処理しつつ、東宮の平穏な雰囲気をたもち、みなで古典を討論したり、詩文を唱和したりしていったわけだ。そのさいにはおそらく、彼の「寛大で包容力があり、喜怒を顔色にあらわさなかった」という性格や、右のごとき細心の気くばりが、うまく功を奏したのだろう。

彼は、東宮内にさまざまな事件がおこっても、心中の困惑、辟易、腹だちなどを、すべておのが腹のなかにおさめ、けっして喜怒を顔色にあらわさなかった。そして、このやっかいな老師たち（みな自分より年長である）

をなだめたり、すかしたりしながら、『文選』を編纂するところまでもっていったのである。その調整能力のすばらしさと、内心の辛苦ぶりたるや、まことにおもうべきだろう。

四　曹丕への敬慕

蕭統の人がらをかんがえてきたが、彼を理解するうえで、もうひとつ重要な志向がある。それは、彼が魏の[太子時代の]曹丕（そうひ）につよい敬慕の情をもち、みずからその後継たらんと欲していたということだ。

そのきっかけは、たぶん周辺の人びとが、彼と弟の蕭綱とを、魏の曹兄弟（丕・植）に擬したことにあったろう。というのも、「英主（曹操と蕭衍）からうまれた好文の兄弟」という点で、曹兄弟と蕭兄弟とはよく似ていたからだ。かく蕭統と蕭綱を曹兄弟になぞらえるのは、けっこうはやくからあったようで、たとえば、つぎのようなエピソードが記録されている。

太宗（蕭綱）は幼少のころから俊敏で、その賢明さは他にまさっていた。六歳でもう詩文をつくったので、高祖（武帝）はその早熟ぶりにおどろき、自作だとは信じなかった。そこで、ためしに面前でつくらせたところ、すばらしい出来ばえだった。高祖は感嘆して、「この子は、わが蕭家の東阿（曹植）であるなあ」といった。

これは弟の蕭綱が六歳のときの話である（『梁書』簡文帝紀）。おそらく、幼時の蕭綱は兄の統以上に早熟で、おさなくして卓抜した文学の才を発揮したのだろう。そこで武帝は、蕭綱を「わが蕭家の東阿（曹植）であるなあ」と歎じたわけだ。当時、曹植は最大の詩人と目されていたので、武帝は息子の蕭綱にむかって、最高級の褒

めことばを発したのである。

ただこの話、うがって解すれば、武帝はふだんから、兄の蕭統を曹丕に擬していたことも、また示唆しているのではあるまいか（このとき蕭統は八歳）。そうした前提があればこそ、武帝は蕭綱を曹植になぞらえたのだろう。すると、この時期からもう、武帝やその周辺の人びとは、蕭統蕭綱の兄弟を、魏の曹丕曹丕兄弟になぞらえていたのではないかとおもわれる。

つづいて成長後、蕭統を曹丕になぞらえた資料をあげてみよう。ここでは顕著なものを二つ、ひとつは蕭統自身によるもの、もうひとつは他人によるものを、それぞれ紹介することにする。

まず前者をあげると、蕭統が二十二歳のとき、七弟の蕭繹におくった書翰文「答湘東王求文集及詩苑英華書」（前出）がそれである。この書翰文のなかで、蕭統はつぎのようにかたっている。

私の賢才好みは、時とともにひどくなるいっぽうだ。［死馬をかいとって］駿馬を入手した［あの燕の昭王の］故事にあやかり、まちがっても［あの葉公のように］真の賢才をこわがることがないようにしたいもの。［そうした賢才との交流たるや］子晋（王子喬）にはおよばぬが、事がらは子晋が洛浜であそんだ話に似ているし、子桓（曹丕）には気がひけるが、興趣は子桓らが漳水でたのしんだ故事（南皮のあそび）とおなじだよ。

舟を玄圃園にうかべて、応瑒や阮瑀のごとき賢才をあつめ、車を博望苑にすすませて、龍淵のごとき士をまねきよせる。そして、仁義を論じ、きれいな山水を［詩文創作の］源泉とするのだ。美酒は樽にみち、馳走は台にあふれるなか、やがて日がしずんで明月があがり、夕方になってきよらかな夜をむかえる。すると私は賢才たちに詩文をつくるよう命じ、こうして［文集ができるほどの］たくさんの詩文ができたんだよ。

又愛賢之情、与時而篤。┌冀同市駿、┌不如子晋、而事似洛濱之遊、
　　└庶匪畏龍。└多愧子桓、而興同漳川之賞。
┌漾舟玄圃、必集応阮之儔、┌挍覈仁義、┌旨酒盈罍、┌曜霊既隱、継之以朗月、並命連篇、在茲弥博。
└徐輪博望、亦招龍淵之侶。└源本山川、└嘉肴溢俎。└高春既夕、申之以清夜。

これは、自分の賢才好みをかたった部分である。ここの傍点を付した部分で、「子桓（曹丕）には気がひけるが、興趣は子桓らが漳水（しょうすい）でたのしんだ故事（南皮のあそび）とおなじだよ」とのべているのに注目しよう。ここにいう「漳川」とは、南皮（なんぴ）の近郊をながれる河川の名であり、婉曲に南皮の地をさしている。この地で、わかき魏の曹丕は、賢才たちと「南皮之游」を堪能したのだった。

この「南皮之游」は、曹丕が建安七子たちとたのしんだ、文雅なつどいのことをいう。そのつどいは、彼の「与朝歌令呉質書」（『文選』巻四二）のなかで、

過日の南皮での宴遊をおもいだすと、いつもわすれがたく存じます。六経の内容を吟味し、諸子百家の議論をあじわい、さらに弾碁をやったり、六博に興じたりしました。また、談論して気分が愉快になり、哀切な箏の響きに耳をかたむけ、さらに北場で馬をかけらせ、南館で食事をしたものです。そして甘瓜を清泉にうかべ、朱李を冷水にしずめました。やがて夕陽がしずんで、明月がのぼるや、いっしょに馬車にのって、後園をめぐりました。馬車はゆっくりうごいて、従者も声をあげませんし、清風が夜にふきよせ、悲笳の音がかすかにきこえたものでした。

と回想されている。この部分をよんだだけでも、曹丕らのたのしき宴遊ぶりが想像できそうだ。

蕭統はこの曹丕書翰をよんで、「南皮之游」をたいへんこのましくおもったのだろう。そして、自分もあの曹

丕を模して、賢才たちと、文雅なつどいをたのしみたいとねがったに相違ない。蕭統が右の書翰文で、「舟を玄圃園にうかべて、応瑒や阮瑀のごとき賢才をあつめ」云々と、風雅なあそびを叙したり、建安文人の名をひいたりしているのも、この曹丕の「南皮之游」を意識していたからだろう。

もうひとつ、他人が蕭統を曹丕に擬したものをあげよう。それは劉孝綽が、蕭統の文集を編纂したときにかいた「昭明太子集序」である。この集序中で孝綽は、蕭統が各様の文体の美を兼備しているとたたえたあと、つぎのようにつづっている。

典雅にして粗野でなく、深遠にして放縦でなく、華麗にして淫靡におちず、簡潔にして舌たらずでない。こうした善美をそなえた文学が、この文集のなかにあつまっております。かりに王朗に「与許文休書」をかかせ、卞蘭に「賛述太子賦并上賦表」を献じさせたとしても、太子さまの著述をほめたたえ、文学を称賛しきれないでしょう。まして愚臣ごときが、どうして真価を髣髴させることができましょうか。

能使典而不野、遠而不放、麗而不淫、独擅衆美、斯文在斯。
約而不俭、

假使「王朗報箋、猶不足以「揄揚著述、況在庸才、曾何仿彿。
卞蘭献頌、「称賛才章。

ここは、劉孝綽が蕭統の文学を称揚している箇所である。「典雅にして粗野でなく」云々はあとでふれるが（「八　中庸の文学観」）、ここでは、「かりに王朗（おうろう）に〈与許文休書〉をかかせ、卞蘭（べんらん）に〈賛述太子賦并上賦表〉を献じさせたとしても」（王朗報箋、卞蘭献頌）の部分に注目したい。

ここでなぜ孝綽は、王朗「与許文休書」と卞蘭「賛述太子賦并上賦表」とをとりあげたのか。それは、この二

篇（現存する）がともに、曹丕をめぐみぶかく、才識すぐれた人物としてたたえているからだろう。したがって、この部分は、［曹丕をほめた］あの王朗に「報箋」をかかせ、［曹丕をたたえた］あの卞蘭に「献頌」を献じさせたとしても、蕭統の著述や詩文のすばらしさは、とても称賛しきれないだろう。それほど蕭統の才腕は卓抜しているのだ――といいたいわけだ。このようにこの部分、表面には曹丕はでてこないものの、じっさいは字句の底に、曹丕の姿が揺曳しているのである。

以上、当時における、蕭統を曹丕になぞらえる風潮を指摘してきた。とくに注目したいのは、周辺の人びとだけでなく、蕭統自身が、みずからを曹丕に擬していることである。彼にとっては、曹丕こそが自分の理想とする皇太子であり、あるべき人間像だったのだ。彼はつねに曹丕を意識し、「こんなとき、もし曹丕どのだったら、どうしただろうか、どういっただろうか」とかんがえつつ、日々をすごしていたのだろう。だからこそ詩文のなかに、曹丕関係の典故がしばしばひかれているのである。

ただ、ここで注意しておきたいのは、蕭統が理想とする曹丕像の属性が、かなりかたよったものだということだ。というのは、右の例でもわかるように、蕭統は、つねに曹丕を「文雅をたのしむ貴公子」として、えがいているからである。

とうぜんのことながら、青年時代の曹丕はそうしたことしか、おこなっていないわけではない。彼は、文雅をたのしむ貴公子以外にも、たとえば政治家や武将、あるいは学者、政論家などの側面も有している。だが蕭統は、そうした側面には関心がなかったようで、ほとんど言及することがない。彼にあっては、曹丕という人物は、「文雅をたのしむ貴公子」のみであり、それ以外のイメージはなかったかのごときなのである（後年、この延長上に、「賢才の死をいたむ貴公子」のイメージも追加されたのだが、それについては後述）。

こうした偏頗な曹丕像こそ、蕭統の性格や志向を示唆するものだろう。

蕭統は、「二　寛容な人がら」でみたように、いろんな方面に関心があり、また実践もしている。たとえば、裁判を担当しては寛刑にした、三宝をうやまい、仏典を誦読した、［武帝にかわって］万機を総覧した、済民に努力した、孝行をつくした――などの事がらが、本伝のなかに好意的に叙されていた。しかしそれらとて、「文雅をたのしむ」ことにくらべれば、やはり二義的なものだったのだろう。蕭統にとっては、賢才と文雅をたのしむこと、いいかえれば、曹丕（＝自分）と建安七子（＝東宮学士）がおりなす世界こそが、もっともたのしめ、このましいものだったのである。

そうした意味で、もし彼が長命をえて践祚していたら、どんな天子になっていたか、なかなか興味ぶかいものがある。気にいりの側近と詩文や宴遊にのみ熱中して、［陳後主のように］亡国をまねいただろうか。それとも、詩文や宴遊とはいっさい縁をきって、経世済民の道に没頭しただろうか。あるいは、賢明な蕭統のことだから、「詩文は趣味、経世は仕事」とわりきって、両々に精励し、たぐいまれな明君になったであろうか。

五　とぼしい個性

蕭統の人がらについて、寛容な性格だったこと、他人への気くばりが周到だったこと、そして曹丕を敬慕していたことなどを指摘してきた。では、そうした蕭統がつづった詩文は、いかなる価値をもち、いかに評されるべきだろうか。この章からは、蕭統の詩文について、かんがえてゆこう。

結論的にいえば、蕭統の詩文は、あまり高レベルのものとはいえぬようだ。蕭統といえば、じゅうらい『文選』

の編纂者として名があがるだけで、その詩文はあまり云々されることがなかった。そうした過去の評価は、妥当なものというべきで、変更をもとめる必要はないようにおもう。

蕭統には、「数えかたによって、多少ことなるが」詩が三十二篇（逯欽立『梁詩』による）、文章が四十四篇（厳可均『全梁文』による）、現存している。これらの諸作をながめたかぎりでは、私はあらためて、過去の評価のただしさを感じざるをえなかった。蕭統の詩や文章、けっして拙劣ではないものの、当時の同種の作とくらべたとき、とくに卓抜しているとはおもえなかったのである。

王筠は右の「昭明太子哀策文」において、「太子さまは、思いを詠じて詩をつくられたが、それは殿さま芸の類ではなかった」（吟詠性霊、豈惟薄伎）とかたっていた。たしかに「殿さま芸」（薄伎）ではなかったかもしれない。だが、かといって名篇ぞろいかといえば、けっしてそうではない。私見によれば、蕭統の詩文には、なにかしら不足したものがあって、よむ者につよい感動や充足感をあたえないのである。

では、なにが不足しているのか。こうした文学性に関した話題については、なかなかこうとは断じにくいのだが、いいていえば、蕭統の詩文は常識的、いや良識的すぎる傾向があって、彼独自の個性がとぼしい、といってよかろうか。

このことを、蕭統の「示徐州弟詩」を例にとって、説明してみよう。普通二年（五二一）春、武帝は第三子の蕭綱を徐州刺史に任命した。そこで、このとき十九歳だった蕭綱は、建康を出立して任地にむかうことになった。このとき兄の蕭統（このとき二十一歳）は、徐州に赴任してゆく弟のために、送別の詩をつくった。それが、この長篇の「示徐州弟詩」である。この詩、八句十二章からなる四言詩の連作であり、蕭統としては力作だったといってよかろう。

ところがこの弟におくった詩、たいへん冗長で、いらいらさせられてしまうのだ。なかなか肝腎の主題、つまり送別の話題にはいっていかないからである。まず冒頭の第一章と、それにつづく第二章をあげれば、つぎのようなものである。

第一章

経書をひらき　載披経籍
古籍をじっくりよんでみた　言括典墳
この世のはじめに根元の気が充満し　鬱哉元気
天空の模様はうつくしかった　煥矣天文
やがて天と地とができあがり　二儀肇建
清濁の気が分離してきた　清濁初分
かくして万物が発生し　粤生品物
そして人間もうまれてきた――とあった　乃有人倫

第二章

この人間とはなにものかといえば　人倫惟何
五常の徳をもともとの性としている　五常為性
だが泥中にあれば黒ずむので　因以泥黒
麻でもって直立させねばならぬ　猶麻違正
このようにひとは仁にそむけばあやまつが　違仁則勃

道をひろめれば精強になれる　　弘道斯盛
それゆえ兄弟がなかよくすることも　　友于兄弟
またご政道をおさめたことになるのだ　　是亦為政

蕭統はなぜか、弟への送別の詩を、経書をひらき、古籍をよんだ、と開始する。そして太古、この世のはじめの記述から説きおこし、元気、天文、二儀、清濁の気とつづけ、そして人間がこの世にあらわれた、とのべてゆく（以上、第一章）。そしてこの人間たるものは、「五常」（父の義、母の慈、兄の友、弟の恭、子の孝）の徳を有していて云々とかたり、兄弟がなかよくすべきことに言及する（以上、第二章）。この第二章の末尾で、ようやく兄弟、つまり自分（蕭統）と弟（蕭綱）とのことが、チラッと示唆されるのである。だが、兄弟が離別する話題は、まだまださきだ。ずいぶん気のながい出だしだといわねばならない。

以下、第三章になって、ようやく、

伊れ予と爾と　気を共にし軀を分く
昔の髫髮を顧み　惟の綺襦を追う
紫掖に綢繆とし　興寢毎に倶にせり
朝に青瑣に遊び　夕に彤廬を歩く

と、子どものころの蕭綱との思い出をかたってゆく。そして以下の章で、幼少のころから、おまえ（蕭綱）は父帝の政の手助けのため、都をはなれて地方にでてゆき、諸侯王となった。かくして、兄弟のあえる機会がとぼしくて、私はさみしい思いをした。それだけに、おまえがたまに帰京して再会がかなったりすると、我われは宴遊をともにして、たのしくすごしたものだった――とつづけてゆくのである。

以下も、ずっとこんな話題が叙されてゆくだけで、肝腎の蕭綱の建康出立の話題には、なお言及しようとしない。そして第十章になって、ようやく、このたびの徐州への赴任にふれて、

綸言遄かに降り　伊れ爾は行くこと有り
行くこと有りて安くに適かんとす　義は乃ち城を維るなり
載ち朱轂に脂ぬり　亦た翠旌を抗ぐ
怒うること朝飢の如く　独り予が情を鍾む

とのべている。この第十章にいたって、はじめて読者は、「この詩は弟との別れのためにつくったのか」と気づくのである。

これにつづく第十一章と第十二章とをあげてみよう。

第十一章

とおくおまえを見おくりにきて　遠於将之
ここ父帝さまの禁苑までやってきた　爰適上苑
浮雲が空にあつまっていて　靄靄雲浮
うすぐらい夕暮れどきだ　曖曖景晩
私は再会するあてがないのがつらく　予歎末期
おまえは旅だつのがかなしいだろう　爾悲将遠
この夕べおまえと袂をわかつと　日夕解袂
笳笛をならしつつ東宮にかえってきた　鳴笳言反

第十二章

東宮にかえったものの　　言反甲館
涙が顔をぬらしてとまらない　　雨面莫收
私はそびえたつ西岳のよう　　予若西岳
おまえは東流する江水のよう　　爾譬東流
この別れをおもえば　　興言思此
心は不安でゆれるかのよう　　心焉如浮
顔こそみれなくなるが　　玉顔雖阻
おまえはわが蕭室の徳をうけついでくれるはず　　金相嗣丘

第十一章でようやく、自分は徐州へ旅だつ蕭綱を見送りにきた、と叙している。といっても、兄弟の別れの場面は「この夕べおまえと袂をわかつ」という一句だけ。すぐに蕭統は、「笳笛（かてき）をならしつつ東宮にかえってきた」のだった。前おきはやけにながかったが、じっさいの別れの場面は、たいへん簡略におわってしまった。

そして最後の第十二章は、東宮にかえってからの自分（蕭統）の感傷を叙したもの。末句で「おまえはわが蕭室の徳をうけついでくれるはず」と期待のことばをのべて、ようやく九十六句におよんだ、長大な送別詩をむすぶのである。

この詩、いかがだろうか。じつに悠長な印象をうけないであろうか。

なにしろ、送別の詩なのに、なぜかこの世のはじまりから、開始されるのである。そして人間の誕生をへて、五常の徳の重要さの話にすすんでゆき、ようやく友于たる兄弟の話題になってくる。ところがそのあとも、かつ

て蕭綱といっしょにあそんだ、たのしかった――という内容が、ながながと叙されてゆくばかり。かくして、蕭綱との別れの話にすすんでゆくのは、ようやく第十章になってからなのだ。

たかだか、兄と弟とのいっときの別れ（けっして永別などではない）にすぎないのに、なんとまあ、大仰、かつ気のながいことであろうか。これだけ悠長（むしろ冗長というべき）な展開だと、惜別の情も間のびしてしまいかねない。

くわえてこの詩は、全体的に、惜別の情が表面的なものに終始していて、あまり実感がこもっていない。もちろん、詩中に「涙が顔をぬらしてとまらない」（雨面莫收）や、「この別れをおもえば　心は不安でゆれるかのよう」（興言思此、心焉如浮）などの句はあるのだが（第十二章）、その叙しかたは、いかにも形式的で、なまの情感にとぼしいのである。それというのも、この詩が、経書からの語彙を多用しすぎているからだろう。

たとえば、右にしめした第一・二章の字句をみてみよう。ここでは、「典墳」は『左氏伝』昭公十二年に、「煥矣」は『論語』泰伯に、「天文」と「二（両）儀」は『易』繫辞上に、「品物」は『易』乾に、「五常」は『尚書』泰誓に、「因以泥黒。猶麻違正」は『荀子』勧学に、「違仁」は『論語』里仁に、「弘道」は『論語』衛霊公に、「友于兄弟、是亦為政」は『論語』為政に、それぞれ典拠を有している。その他、「載披経籍」（載ち経籍を披く）句の「載ち」、「言括典墳」（言に典墳に括ぬ）句の「言に」などの助辞も、経書ふうのふるめかしい用法にしたがったものだ。

ただ、右の第一・二章は天地黎明期のようすを叙したものなので、古書からの語彙を利用するのは、やむをえないといえなくもない。ところが、末尾の第十～十二章は、弟との離別をかたったものである。こうした場面では、古書中の語彙でなく、蕭統自身のことばで別れを叙してほしいし、そうしてもよいところだ。

ところが蕭統は、ここでも経書の語彙を多用しているのである。すなわち、「綸言」は『礼記』緇衣に、「維城」は『詩』大雅板に、「脂朱轂」は『詩』小雅何人斯に、「怒如朝飢」は『詩』周南汝墳に、「遠於将之」「雨面莫收」は『詩』邶風燕燕に、「興言」は『詩』小雅小明に、「心焉如浮」は『詩』小雅菁菁者莪に、「玉顔」「金相」は『詩』大雅棫に、そして「嗣丘」は『詩』大雅思斉に、それぞれ依拠しているのだ。

とくに最後の第十二章などは、弟を見おくったあとの寂しさを叙した部分なので、もっと蕭統の切実な思いをのべてもらいたいところだ。ところが、ここでもなまの声はとぼしく、右のように典故によった表現だったり、「おまえはわが蕭室の徳をうけついでくれるはず」という、公式めいた励ましだったりするのである。

四言詩は、伝統的に『詩』の影響をうけやすく、ある程度は古風になるのは、やむをえないところだろう。だがそうだとしても、この詩は離別の情まで、典故によりかかって叙そうとしているので、蕭統の個性というものが、あまり感じられなくなってしまった。経書の語句を切りはりしただけの、紋切り型の詩にすぎぬように感じられるのである。

蕭統はこのとき、二十一歳。もうとっくに元服もすましており、一人前の詩人だといってよい。それなのに、こんな個性がとぼしい詩しかつづれないというのは、すこし残念な気がしないでもない。

この時代、送別の詩はこんなものばかりかというと、そうではない。ここでは比較のために、六朝送別詩の名篇、謝朓の「新亭渚別范零陵雲詩」をあげてみよう。

君のゆく洞庭は　黄帝が咸地（かんち）の楽を奏したところ　　洞庭張楽地
おなじく瀟湘（しょうしょう）は　堯帝の二女があそんだところ　　瀟湘帝子遊
雲は蒼梧（そうご）の野へと　ながれゆき　　雲去蒼梧野

川の水は長江と漢水の流れに　もどっていく　水還江漢流
私は馬をとめて　零陵（れいりょう）へゆく君をながめ　停驂我悵望
君も棹（さお）をとめて　舟上でゆきがたいようす　輟棹子夷猶
君の名声は　広平太守のごとくになるだろう　広平聴方籍
私のほうは　死後に文をほしがられただけの相如のごとしだ　茂陵将見求
私ときたら　志も仕事もものにならぬままで　心事倶已矣
ただこの江辺の地で　憂いをいだくのみだよ　江上徒離憂

この詩は、南方の零陵（いまの湖南省の永州）へ赴任してゆく范雲を、謝朓が送別した詩である。蕭統の「示徐州弟詩」の九十六句にくらべると、わずか十句のみの短詩にすぎない。それでも、『文選』に採録されるだけあって、なかなかの名篇である。

謝朓がこの詩をつくった「新亭」は、長江のほとりにあった。そのため詩中でも、『楚辞』ふうの雰囲気がただよっている。ただこの詩、「洞庭」「瀟湘」などの固有名詞はつかっていても、『楚辞』からの露骨な語彙襲用はない。さらに蕭統の詩のように、「この別れをおもえば　心は不安でゆれるかのよう」などの、心情を叙することばをつかっていない。そうであっても、別れをかなしむ情趣が濃厚にただよっており、このあたり、謝朓の卓抜な才能を感じさせる。

この謝朓の詩に対して、後代の孫月峯は、

浅くして浄（きよ）く、意態は余り有り。音調は風（諷）すべし。

と評し、邵子湘も、

短章なれども、却って闊大なるを起こし得たり。正に別緒の黯然たるを覚ゆ。

と称賛している（ともに『文選集評』所引）。たしかにこの詩は、短篇で淡々としながら、ゆたかな惜別の情趣を感じさせるといってよい。いたずらに冗長で、［典故にたよりすぎた］無個性な別れしか叙さぬ蕭統とは、かなりの資質のちがいを感じさせよう。

六　君子の文学

もう一篇、こんどは文章作品をみてみよう。

ここでは、蕭統の「七契」という作品をとりあげたい。これは「七」ジャンルに属する作である。

この「七」は、東方朔「七諫」に由来するという説もあるが、前漢の枚乗「七発」からはじまるとされることがおおい。その「七発」は、『文選』にも採録される名篇だ。「七発」に附された李善注によると、「七事を説きて以て太子を起たせ発す」、つまり七つの事がら（六否一是）をかたって、太子を元気づけた作だという。劉勰『文心雕龍』雑文篇は、これをもうすこし具体的に、「この七発は、はじめは邪道をかたるも、最後は正言をのべて、富豪の子弟をいましめたものだ」と説明している。

枚乗「七発」の概要はつぎのとおり。

楚の太子が病気になったので、呉客が見舞いにでかけた。呉客は、病気の原因は太子のぜいたくな生活にあるので、鍼や灸でなく、ただしき言説（要言妙道）で病気をなおそうとかんがえた。そこで呉客は太子に、さまざまな言説を弁じてゆく。まずは琴の妙音、ついで美味。さらに名馬、宴遊、美姫、波濤について。そんな六種の

娯楽（六否）を弁じつつ、こんなにたのしいですぞ。ひとつお起きになって、たのしまれませんか、といざなう。太子はすこしずつ元気になるが、まだ完全には好転しない。そこで七度目、呉客が賢者のただしき言説（一是）をかたろうというや、太子はサッとたちあがった。そして「ぜひききたい」といい、病気は快癒してしまった——。つまりこの「七発」は、最後にでてくる「賢者のただしき言説」こそ、太子のぜいたく病をなおすことができたというわけで、それなりに諷諭的な内容を有しているのである。

だがじっさいのところは、「七発」の主眼は、ただしき言説（一是は弁ぜられぬままおわる）などでなく、たのしい娯楽をかたることにあった。つまり、ただしき言説などは、諷諭の体裁をととのえるだけのもので、「七発」は、実態としては、各様の娯楽をかきつらねた（劉勰のいう「邪道をかたる」）享楽的な文学なのである。読者のほうも、呉客がかたるたのしそうな娯楽を、たのしみにしていたのだろう。

では、それは、どんな楽しさなのか。呉客がかたる娯楽のなかから、歌舞や宴遊の楽しさを叙した一節をあげてみよう。

さまざまな芳香がただよい、五音の調和した風音とともにひろがります。草木は風でゆれうごき、葉は表に裏にとなびきます。一座の人びとは自在に酒を飲んで、たのしんでいます。このとき景春が酒をすすめ、杜連が楽音をかなでます。ご馳走がとりどりならび、酒の肴（さかな）が種々そろっています。華麗な色彩が目をたのしませ、またきれいな歌声が耳をよろこばせます。

ここで激楚の曲をかなでたり、鄭衛の音を奏したりします。そして先施、徴舒、陽文、段干、呉蛙、閭娵、傅予のごとき美女たちは、すそをみだし、飾りをたらし、目はあだっぽく、心はまねくかのよう。そして流水で身をきよめ、杜若の香をただよわし、清らかさにつつまれ、蘭油を髪にぬって、美服でもって近侍して

きます。これもまた、天下の最善最高のぜいたくで、たいへんな楽しみごとでございます。太子よ、たちあがって、これらの美女たちと遊楽いたしませんか。

衆芳芬鬱、乱於五風。従容猗靡、消息陽陰。列坐縦酒、蕩楽娯心。
景春佐酒、滋味雑陳、練色娯目、
杜連理音。肴糅錯該。流声悦耳。
於是乃発激楚之結風、使先施徴舒陽文段干呉娃閭娵傅予之徒、雑裾垂髾、目窕心与、
揚鄭衛之皓楽。
揄流波、蒙清塵、嫵服而御。此亦天下之靡麗皓侈、広博之楽也、太子能彊起游乎。
雑杜若、被蘭沢、

この場面、たしかにたのしそうだ。芳香、春景色、飲酒、ごちそう、音楽、美女、こうした娯楽がお待ちしていますよ。いかがですか、たのしまれませんか――と、太子をいざなってゆくのである。そしてこれをよむ者も、こうした楽しみを脳裏におもいうかべ、「すごいなあ、たのしいだろうなあ」と想像をたくましくするのだろう。かかる夢のような楽しみ、快楽。そうした喜びごとをあたえるのが、「七」ジャンルの眼目であった。右の「七発」がまさにそうした作だったし、それ以後の「七」の諸作も、こうした娯楽をかたる方向に力をそそいでいったのだった。

「七」ジャンルのもうひとつの名作、曹植「七啓」（『文選』で「七発」についで採録される）からも、同種の一節をあげてみよう。この作では、山林にかくれひそむ隠者に対し、説得役が「世間にでてみましょう。世間にはこんな快楽がありますよ」とかたりかける、という設定になっている。これ以後の「七」作品では、枚乗「七

発」の〈病人VS治療者〉ではなく、この〈隠者VS説得役〉の設定をとって、山林にひそむ隠者を世間につれだし、朝廷に出仕させようとするものがおおい。

では、やはり歌舞や宴遊の楽しさを叙した一節を、こんどは書きくだしでしめそう。

爾して乃ち
┌文軒に御り、琴瑟交ごも揮い、左は篪にして右は笙なり。
└洞庭に臨む。
┌鍾鼓倶に振るい、
└簫管斉しく鳴る。

然る後姣人は乃ち
┌文穀の華袿を被り、
└軽綺の飄遙たるを振る。
┌金搖の熠耀たるを戴き、
└翠羽の双翹を揚ぐ。
┌流芳を揮い、
└飛文を耀かす。

盤鼓を歴し、煥として繽紛たり。

┌長裾は風に隨い、蹻捷たるは飛ぶが若く、虚を蹈んで遠く蹠む。
└悲歌は雲に入る。

凌躍し越驤し、蜿蟬として揮霍せり。
┌翔爾として鴻のごとく翥り、
└濈然として鳧のごとく沒す。

軽体を縦にして以て迅く赴き、景は形を追うも逮ばず。飛声は塵を激し、依違して響きを厲ます。
才の捷きは神の若く、形は象を為し難し。是に於いて歓を為して未だ渫きずして、白日は西に頽けり。
楽を散じ飾りを変え、微さか中閨に歩む。
┌玄眉凋ち、
└鉛華落ち、
┌乱髪を收めて蘭沢を払い、
└嬪服を形りて幽若を揚ぐ。
┌紅顔は笑うに宜く、
└睇眄は光を流す。

時に［美姫は］吾子とともに、手を携えて同に行く。

「飛除を踐み、」「華燭は爛き、」「朱唇を動かし、」「羅袂を揚げ、」　九秋の夕、歓を為して未だ央きず。
「閑房に即く。」「幄幕は張る。」「清商を発す。」「華裳を振るう。」

此れは声色の妙なり、子（隠者）は能く我（説得役）に従いて之に游ばんや。

ここでも、音楽、美女、舞踊などの楽しみが叙されている。書きくだしのほうが、この場面の艶麗さが［字づらから］もっとつたわるかもしれない。「長裾は風に隨い、悲歌は雲に入る。蹻捷たるは飛ぶが若く、虚を蹈んで遠く蹠む」は、美姫が舞踊するさま、「飛声は塵を激し、依違して響きを厲ます」は、歌唱のすばらしいさまを、それぞれ叙したものだ。さらに「紅顔は笑うに宜く、睇眄は光を流す。時に［美姫は］吾子とともに、手を携えて同に行く。飛除を踐み、閑房に即く」にいたっては、あたかも美姫が隠者を誘惑しかかるかのようである。

「七」の文章は、こうした楽しみごとを列挙してゆき、それによって、読者を甘美な快楽の世界にみちびいてゆくものである。娯楽のすくなかった当時にあっては、この「七」は、めくるめくような楽しみをあたえてくれる、夢のようなジャンルだったにちがいない。

かくみてくると、さきに紹介した『文心雕龍』の「最後は正言をのべて、富豪の子弟をいましめたものだ」という説明は、いささか理想論にかたむきすぎているといわざるをえない。じつは劉勰も、「七」のそうした性格には、気づいていたようだ。彼は、右のような「正言」の効能をかたりながら、つぎのようにものべているからである。

七ジャンルの文をよむと、概して、宮殿のさまを大仰にかたり、狩猟のようすを称賛する方向にかたむいている。すばらしい服飾やご馳走をかきつらね、魅力的な音楽や美女を、これでもかとならべたてる。その甘美な誘惑は骨までゆるがし、艶っぽいささやきは魂をとろけさすほどだ。それゆえ、七の文は贅沢さで誘い

をかけ、最後は正道にかえっておわるというが、じっさいは、諷諫は一で、誘惑は百であり、けっきょく正道にかえれなくなってしまう。それは、揚雄のいう「みだらな鄭衛の音をさかんに奏しておいて、最後にちょっとだけ雅楽を奏する」ようなものなのである。

――と。このように、文学を倫理的にかたりがちな劉勰でさえ、七の文の「諷諫は一で、誘惑は百」という享楽的性格を、みとめざるをえなかったのである。

七ジャンルの説明がながくなった。では以上をふまえて、蕭統「七契」の文をみてゆこう。

蕭統は、そうした七に属する「七契」という作をつくっている。かかる享楽的な文をかくなど、まじめな蕭統には似あわぬことだ。なぜこんな文をつづったのか。兪紹初同書によると、この作は、曹植「七啓」に模して、隠者を朝廷に出仕させようとしたもの。天監十四年（五一五、蕭統十五歳）、武帝は「求賢詔」を発して、野にひそむ賢者たちに、梁廷へ出仕するようよびかけた。蕭統はこの父帝の呼びかけと連携して、この「七契」をつくった――ということらしい（八四頁）。なるほど、敬愛する父帝への協力ということなら、こんな作の執筆もありえるというものだ。

では、その蕭統の「七契」をみてみよう。なかなかの長篇なので、ここでは右にひいた「七発」「七啓」と比較しやすいよう、やはり歌舞や宴遊の楽しみを叙した一節をしめしてみよう。

たかい桐の木たるや、その葉はまっさおです。根はよき地にはやし、幹は華山や嵩山にそびえたっています。鳳は曾山の側の桐木にすみ、龍は平陵の東の桐木にひそんでいます。わきでる高雲をはらいのけ、猛烈な突風の音をひびかせながら、万仞のたかさにそびえたち、天空にもいたろうかとするほどです。

その桐の木を、巧匠の匠石に命じて斧で伐採し、班輸をつかって琴をつくらせます。かくして完成した桐

琴たるや、構造は天人にふさわしく、形は緑綺の琴よりうつくしい。金石とともにそうそうと音をたて、絲竹とともに柔和にひびきます。

その琴を北方の佳人に奏させ、高楼の杞氏にひかせ、さらに巴隴の美姫や邯鄲の妙妓たちに歌をうたわせれば、獣たちはうっとりとして疾駆するのをやめ、飛鳥もその場からうごかなくなります。……さらに、二度奏すれば玄鶴があつまり、九度奏すれば鳳凰が空をまうのです。一音でも耳にすると魚がおどりだし、奏しおえても余韻が梁のあたりにただっています。どうしてただ孟嘗君が感動し、劉靖が心をいためるだけでありましょうか。

中山の歌姫が［その琴の音（ね）とともに］うたう清楚な曲は、屈折しながらなごやかな響きを有しています。瞳をむけ流し目をおくり、口から白歯をのぞかせながら歌をうたいます。「陽阿がうたわれ激楚の曲が奏されるなか、洛水をみやれば君子の好逑（こうきゅう）があらわれた。されば私も櫂（かい）をこぎ龍舟で水にうかぼうか」と。

実有喬桐、抽葉青葱。
┌結根善地、┌栖鳳曾山之側、┌払鬖髿之高雲、
└擢幹華嵩。└蔵龍平陵之東。└鼓梢殺之雄風。

苕亭万仞、実造天中。乃使
┌匠石運斤、┌製起玄修、┌与金石而鏗鏘、
└班輸琢錘。└形踰緑綺。└共絲竹而曼靡。

┌托北方之佳人、閒以┌巴隴才僮、┌騁獣為之輟馳、……
└命高楼之杞氏。└邯鄲妙妓。└飛禽為之不徙。

┌再鼓而玄鶴集、┌初音魚踴、何止┌田文慨慷、
└九成而儀鳳翔。└余妙繞梁。└劉靖心傷而已哉。

中山清曲、若折而和。
┌揚美目以流眄、
└啓玉歯而安歌。

歌曰、「陽阿奏兮激楚流、望洛水兮有好仇、縦軽棹兮泛龍舟」。

いかがだろうか。蕭統、やはり「七発」や「七啓」とおなじように、歌舞や宴席の楽しみを叙しているのだが、二篇にくらべると、ずいぶん質素なものであることが、すぐわかることだろう。

この場面、「たかい桐の木たるや、その葉はまっさおです」云々と、なぜか琴の材料たる桐の木から、叙述がはじまっている。桐の木云々は、じつは枚乗「七発」の「龍門の桐は、高さ百尺にして枝無し」云々に依拠したもので、龍門の山にはえている桐木が、琴をつくる好材料になるのである。蕭統はそれをふまえて、美女に奏される琴の、しかもその材料たる桐の木の話から、記述をはじめているわけだ。

そうだとしても、この部分、かなり悠長な書きかたである。さきの「示徐州弟詩」でも、弟蕭綱への送別でありながら、この世のはじまりから開始して、なかなか兄弟別離の主題にすすまなかったのをおもいだす。どうも蕭統には、単刀直入に主題にふれず、根源にさかのぼって由縁を説明したがる癖がありそうだ。

「その琴を北方の佳人に奏させ、高楼の杞氏にひかせ」の部分から、その琴が奏される場面にはいる。ここでは、その琴の音のすばらしさがかたられるのだが、古書（『韓非子』十過、『尚書』益稷、『列子』湯問、『説苑』善説、阮籍「楽論」など）の典拠をふまえつつ、鳥獣や玄鶴、鳳凰、魚がうっとりききほれ、孟嘗君や劉靖？が感動する云々と叙するだけ。典拠をしらねば理解できぬ、やや衒学的な記述であり、それほど気らくによめるものではない。

ようやく「中山の歌姫が」云々から美女が登場し、流し目や白歯などの艶っぽい描写がはじまる。そしてその

中山の歌姫が、「陽阿がうたわれ」云々と歌をうたってゆく。

ここで注目したいのは、歌の第二句「洛水をみやれば」の部分である。「洛水」とくれば、ふつうの読者ならすぐ、曹植「洛神賦」に登場する洛水の女神（宓妃）を想起するはずだ。だから、きっと洛水の女神にもまがう、臈たけた美女が登場するにちがいない、と期待することだろう。ところが「洛水を望めば好仇（逑）有り」、なんと道心堅固な「君子の好逑」（『詩』関雎）があらわれるのである。

これでは、娯楽も楽しみもあったものではない。さすがは、まじめな蕭統である。美女や歌舞を叙するさいにも、儒教の教えをわすれないのだ（これ以後も、艶麗な美女はあらわれない）。その行儀のよさには、おそれいってしまうが、しかし「七発」「七啓」のような艶麗な叙述を予期していた読者は、さぞかしがっかりしてしまうことだろう。

「七」なのに、どうしてこんなかたい行文になったのか。この蕭統の「七契」は、蕭統わずか十五歳のときの作である。わかいときは、えてして理想的になりやすいもの、しかも父帝の政への協力という事情もあった。だから、こんなかたい描写になったのも、しかたがない、と解することができるかもしれない。

しかし、じつは弟の蕭綱に、これと同種の作がある。それは「七励」という作だ。これをよむと、蕭統「七契」がかたい描写になったのは、もっとべつのところに原因があったことがわかってこよう。

まずは、蕭綱「七励」をよんでみよう。やはり、歌姫や舞妓たちがうたったりおどったりする部分を、書きくだしで引用してみれば、つぎのようなものだ。

［彼女たちは］「玉歯もて笑容あり、　疾趨し巧歩すれば、霧袖は芬披たり。
　　紅妝ありて綽約たり。」

「蛾眉の窈窕たるを舒べ、「金翠の婉嬋たるを載せ、「梧春の苑に芬芳として、
「弱骨の逶迤たるを委す。「瑤瑙の陸離たるを珥む。「長州の中に灼爍たり。
時に於いて斜光西に委ち、薄霧は紅を舒ばす。「隋珠は影に照り、「観る者は堤に方い、
「羅衣は風に従う。「観る者は淇に盈ちたり。

[その歌声は]「二燕をして翼を綴めしめ、「明君之が為に泣を歛め、
「八鶴をして悲しみを増せしめ、「西施之が為に眉を解く。

是に於いて蘭閨の寂晩に、曲韻相和す。軽風の落景に対し、明月を望みて以て清歌す。
歌いて曰く、「酣酣半ばにして楽既に陳ぬ、長歌して促節す綺羅の人。
「鏡を払い影を弄びて情は未だ極まらず、
「簪を迴らし転た笑みて思いは自ら親しまんとす」と。

此れ亦た声音の妙を尽くすなり。子能く我に従いて之を聴かんや。

この部分、ひじょうにつやっぽい描写である。曹植「七啓」を模したあとが顕著ではあるものの、兄の「七契」より、はるかに魅惑的、かつコケティッシュな美姫が登場している。

まず、冒頭の「玉歯もて笑容あり、紅妝ありて綽約たり」はその美貌ぶりをかたり、「疾趨し」云々からは舞い姿を叙してゆく。「時に於いて斜光西に委ち、薄霧は紅を舒ばす。隋珠は影に照り、羅衣は風に従う」は夕暮れのなかで、美姫があでかやにおどる姿をえがいたもの。そして「堤に方い」や「淇に盈ちたり」は、それに見物している観客のようすなのだろう。

さらに、美姫が「軽風の落景に対し、明月を望みて以て清歌」する姿は印象的で、じつに秀逸な描写だといっ

てよい。また彼女がうたう「簪を廻らし転た笑みて思いは自ら親しまんとす」の歌詞は、嫣然とわらいかけるようすを彷彿させる。これらをみると、女性美や艶情の叙しかたにおいては、あきらかに兄は弟に一籌を輸するところがあった、といわねばならない。

俞紹初氏によれば、この蕭綱「七励」も、兄の「七契」とおなじ事情、おなじ時期（天監十四年）につくられたものだという（この年の五月、蕭綱は江州に出鎮したので、おそらくその前だろう）。とすれば、このとき蕭綱はわずか十三歳、現在ふうにいえば、中学一年生だったことになる。

もっとも、当時はたいへん早婚だったようで、蕭綱は十歳のときには、もう結婚している。それゆえ、蕭綱がこの「七励」をかいたときは、もう歌姫や舞妓のことについても、多少はしっていたのだろう。

そうだとしても、既婚か未婚かは、それほどおおきな問題ではない。重要なのは、たかだか中一の少年にすぎぬ蕭綱が、もうこんな艶麗な文をかくことができた、ということだ。蕭綱の、女性美への興味、関心、そして宮体ふう文学への、はやい目覚めには、おどろくほかない。兄の蕭統が「洛水をみやれば君子の好逑があらわれた」などと、まじめというか、うぶというか、道徳的なことをかいていたときに、弟の蕭綱はもう「簪を廻らし転た笑みて思いは自ら親しまんとす」などという、あだっぽい描写をつづることができたのである。栴檀は双葉よりかんばし。さすがに、のちに宮体詩を主導したひとだけあるというべきだろう。

かくみてくると、蕭統の「七契」があれほど、かたい描写に終始していたのは、たんに「若年時で、理想主義的だったから」で、すませておくわけにはいかない。さらに、「兄の蕭統はおくてだった」とか（もっとも、蕭統の結婚は、弟よりはやい八歳のときだ）、「弟の蕭綱は早熟だった」とかの説明だけで、すませておくわけにもゆくまい。そうしたことより、やはり、兄と弟の文学的な関心や資質のちがいのほうに、真の原因をもとめるべ

きだろう。

では、その文学的な関心や資質のちがいとはなにか。

それは、兄が陶淵明「閑情賦」を、諷諫がないから「白璧の微瑕」だとしてしりぞけ（後述）、弟が艶詩を愛好し、ついに『玉台新詠』の編纂を命じた――というちがいだろう。端的にいえば、兄は諷諫を重視していたのだが、弟のほうは艶情がすきだったのである。こうした文学的な関心や資質のちがいがあればこそ、兄は娯楽的な「七」の文でも、道心堅固な「君子の好逑」をえがき、弟は十三歳であっても、コケティッシュな美姫を叙することができたのだろう。

以上、蕭統の詩文のなかから、「示徐州弟詩」と「七契」をとりあげて検討してきた。右は、ほんの一部をみただけにすぎない。だが、私がざっと他の詩文をみわたした範囲でも、やはり同種の傾向がみられるようだ。概していえば、蕭統の詩文には、常識的、いや良識的すぎる傾向があって、いわばお行儀のよい、品行方正ふうな作がおおいのである。

蕭統は、はやくから太子となった。そのため、ほしいものはすぐ手にはいるという環境でそだった。がつがつしなくてもよかったのである。くわえてその性格も、寛大で包容力があるという、おだやかなところがあった。そうした彼が、詩文の筆をとったとき、「どうしてもこれをかきたい」「ぜひあれをうったえたい」というような、つよいエモーションは生じてこなかったのだろう。そのため、ややもすれば、お行儀のよい、品行方正ふうな作風になりやすかったのだとおもわれる。

これを要するに、蕭統の詩文は、常識的であり、良識的であって、つきぬけた個性やオリジナリティには、とぼしかった。だが、これを好意的に解すれば、品行方正で、温雅な文学といえなくもない――とまとめられよ

うか。かく常識的であり、良識的であり、また温雅でもあるところ、一言でいえば、君子然とした文風が、蕭統の詩文の長所であり、また短所でもあったといってよかろう。

七　哀悼書翰の卓越

だが、こうした君子然とした文風が、かえって効果をあげる分野があった。それが、ひとの死をいたむ哀悼書翰である。哀悼の情をささげるのに、つきぬけた個性やオリジナリティなどは、必要ではない。おのが悲しみの情を篤実に、そして温雅に叙してゆけば、それでよいのである。

もともと、蕭統は「寛和にして衆を容れる」性格であり、他人によく気をくばり、賢才にはとくに敬意をはらっていた。そうした彼にとって、幼時から教えをうけた東宮の老師たちは、［劉孝綽のような、問題ある人物もいないではなかったが］敬慕の的だったにちがいない。

そうだったとすれば、その老師たちが死んだとき、蕭統がすぐれた哀悼の文章をつづったのは、とうぜんのことであった。じっさい、年長者がおおかっただけに、蕭統の二十代後半、老師たちはよく死んだ。彼は老師たちが死ぬと、そのたびに、ねんごろな哀悼の書翰をつづった。気くばりと善意のひとだった蕭統は、尊敬と哀惜をこめた書翰文をつづるのに、まことにふさわしかった。その意味で、蕭統文学のなかで最高の作と称すべきは、この老師哀悼の書翰以外にはありえないとせねばならない。

六朝には、ひとの死をいたむ哀傷の詩文が、たくさんかかれている。なかでも潘岳の詩や哀誄は、せつないまでの哀感の流露で、とくにひいでたものだ。そうしたなか、蕭統の哀悼書翰は、哀感を流露させるだけでおわら

ず、故人を称賛することばをわすれていない。むやみにつらい、かなしいを連呼するのではなく、かならず、りっぱだった、すばらしかったの語をそえるのである。これは、いかにも蕭統らしく、おのが哀悼の情だけでなく、遺族の心情にも気をくばっているのだろう（当時は書翰は、しばしば回しよみされ、やがて遺族も内容をしることになる）。そうした、哀感と称賛が調和した叙しかたを、私は君子然たる叙法とよびたい。そしてそれが、蕭統の哀悼書翰の特徴なのである。実例をしめそう。

蕭統は二十七歳のとき、明山賓と到洽が死んだという報に接した。いずれも、東宮でしたしく教えをうけた、年配の老師たちである。この悲報をきくや、蕭統はすぐ弟の晋安王蕭綱にむけて、報告かたがた悲しみを叙した書翰文をおくった。それが「与晋安王綱令」である。この書翰で、蕭統は、明山賓（八十五歳で逝去）と到洽（五十一歳）だけでなく、最近あいついで死んだ陸倕（五十七歳）や張率（五十三歳）にも言及し、四人の老師たちの死をいたんだのだった。

①北兗州太守の明山賓どのと長史の到洽どのが、あいついで逝去された。私は悲嘆にくれるばかりで、痛惜の念がおさまらぬ。昨年は太常の陸倕どのが物故されたが、このたび明と到のおふたりまで逝かれたのだ。

②陸倕どのは忠貞の道を実践し、氷や玉のような廉潔さを有していた。詩文は風雅頌の正道を体し、学問は諸子を兼修していた。その高潔にして卓越した精神は、真率そのものだった。また明山賓どのは儒学や古典をきわめ、淳良にして誠実、修養をかさね正道を実践する姿勢は、生涯かわることがなかった。もし孔子さまとお会いしても、きっとその堂に案内されたことだろう。いっぽう到洽どのは、風格じつに闊達で、詩文もみるべきものがあった。官人として職務にあたっては、まったく公平無私をつらぬいた。この三人のおかたは、天下の俊才にして、国子学の宝だった。でも彼らの死を哀惜したとて、いまさらどうにもならぬ。

③私は彼らとともに、あちこち行楽して交遊し、ながく歳月をともにしてきた。彼らが膝をまじえるように親身に忠告してくれたことは、かぞえきれないほどだ。私がここまで後悔せずにやってこられたのは、これら諸士の忠告のおかげだった。

④私が彼らと議論したのは、ついこのあいだのようだし、そのことばもまだ耳にのこっている。それなのに、あいついで逝去し、みな幽鬼となってしまった。こんなことを想起するたびに、いつになったら［おまえと会面して］この悲しみをうったえられるのかとおもう。彼らは天下の宝だったので、かく哀惜するのもとうぜんのことだろう。

⑤ちかごろ新安太守の張率どのも、またこの世をさった。あのかたは詩文がうるわしかった。おしいことをしたものだ。張どのはおまえ（蕭綱）の幕僚となって、［おまえとともに］ながく任地をあちこち移動した。とくに気の毒でならぬ。

⑥このように、ちかごろ私のゆかりの方々がつぎつぎと逝ってしまい、つらくていたたまれない。たまたま手紙をだす便があったので、このことに言及してみたしだいである。

①明北兗到長史遂相系凋落。傷怛悲惋、不能已已。去歳陸太常殂歿、今茲二賢長謝。

②陸生「資忠履貞、「文該四始、高情勝気、貞然直上。明公儒学稽古、淳厚篤誠、立身行道、始終如一。
「冰清玉潔、「学遍九流、
儻値夫子、必升孔堂。到子「風神開爽、当官莅事、介然無私。皆「海内之俊乂、此之嗟惜、更復何論。
「文義可観、「東序之秘宝。

③但遊処周旋、並淹歳序、造膝忠規、豈可勝説。幸免祇悔、実二三子之力也。

④「談対如昨、零落相仍、皆成異物。毎一念至、何時可言。天下之宝、理当惻愴。音言在耳。」

⑤近張新安又致故。其人文筆弘雅、亦足嗟惜。隨弟府朝、東西日久、尤当傷懐也。

⑥比人物零落、特可傷惋。属有今信、乃復及之。

ここで老師たちの死をかたるにさいし、蕭統は、はじめにその人となりや自分との交遊を叙し、ついで逝去にふれて哀悼のことばをのべている（到治を哀悼した箇所は前出）。

たとえば、陸倕に対しては、②「忠貞の道を実践し、氷や玉のような廉潔さを有していた」云々とのべ、人がらの善美をたたえている。量的には、こうした称賛のことばが、いちばんおおい。遺族がこうした部分をよんだら、さぞうれしく感じたことだろう。ついで交遊の思い出を、③「私は彼らとともに、あちこち行楽して交遊し」云々とのべる。そして最後に、④「私が彼らと議論したのは、ついこのあいだのようだし、そのことばもまだ耳にのこっている」云々とかたって、老師たちの逝去をいたむのである。

この「与晋安王綱令」では、蕭統は、悲しみをじっとおさえ、大仰な哀悼のことばをつかっていないのに注意しよう。哀悼のことばは、せいぜい「私は悲嘆にくれるばかりで、痛惜の念がおさまらぬ」（傷怛悲惋、不能已已）や、「ちかごろ、ゆかりの方々がつぎつぎと逝ってしまい、つらくていたたまれない」（比人物零落、特可傷惋）ぐらいにすぎない。

こうした叙述、第一章でみた王筠「昭明太子哀策文」の、過大な嘆きぶりと比較すれば、よく感情を抑制したものといえよう。経史からの大仰な典故は使用せず、過度に哀号したりもせず、節度をもって老師の死を報じ、なげき、いたんでいる。おかげで哀感と称賛とが調和した、温雅な哀悼書翰になっているのだ。君子の悲しみか

たは、かくあるべきかな、とおもわせるではないか。

もうひとつ、この書翰文でも、やはり曹丕の影響がつよいということを、指摘しておこう。たとえば、④「あいついで逝去し、みな幽鬼となってしまった。こんなことを想起するたびに、いつになったら［おまえと会面して］この悲しみをうったえられるのかとおもう」（原文「零落相仍、皆成異物。毎一念至、何時可言」）の部分は、あきらかに曹丕「与朝歌令呉質書」の「元瑜は長逝し、化して異物と為れり。一念の至る毎に、何れの時か言うべけんや」を模したものだ。

また、老師との交遊をおもいだす場面でも、曹丕書翰からのことばを利用している。すなわち、③「私は彼らとともに、あちこち行楽して交遊し、ながく歳月をともにしてきた」（原文「但遊処周旋、並淹歳序」）の部分は、はおそらく、曹丕「与呉質書」の「昔日に遊びし処、行けば則ち輿を連ね、止むれば則ち席を接す」を意識しているのだろう。

ここで蕭統が利用した曹丕書翰は、哀悼と友情とが交錯した周知の名篇である。この篇に対し、

無限の感慨と悲しみとにみちている。一篇の雰囲気として、おのずから情緒纏綿たる哀悼の情がひろがってきて、これをよんだ者は、友情のすばらしさを実感するにちがいない。

無限感慨、無限蒼涼。文情自爾悱惻纏綿、読之令人増交誼之重。

という評があるが（王文濡『秦漢三国文評註読本』中の評言）、まさにそのとおりの情趣をもっている。蕭統は、この曹丕書翰に依拠しながら、「自分の老師たちへの尊敬とそして悲しみの情とは、あの曹丕どのの書翰文とおなじなんだよ」と示唆しているのだろう。

私見によれば、ここでの語彙利用は、たんに典故をつかったという技巧的なものではなく、以前から私淑して

きた曹丕のことばが、つい脳裏からあふれでてきてしまった、ということなのだろう。前述したように、蕭統は曹丕を尊敬して、みずからその言動を模そうとしてきた。老師たちをいたむ書翰をつづるときも、そうした曹丕への敬慕が、無意識に発露してきたのではあるまいか。

もう一篇、老師の死をいたんだ秀逸な書翰をよんでみよう。それが「与張纘書」である。この篇こそ、哀感と称賛にあふれた、君子への哀悼書翰だといってよかろう。

中大通三年（五三一）、蕭統三十一歳のとき、側近の張緬（享年四十二歳）が死んだ。そこで蕭統は、その弟の張纘にこの書翰をおくって、兄の死をいたんだのだった。じつは蕭統は、この年の三月に舟から水中に落下するという事故にあい、翌四月に急逝している。したがってこの書翰は、結果的に、彼が死去する直前の作ということになった。

貴殿の兄上（張緬）は、学問は幅ひろく、政務にも明敏でした。古人の倚相（いそう）は古書にくわしく、郗穀（ちこく）は詩書に精通していたそうですが、古今をとおしても、張緬どの以上のかたはおられますまい。私の東宮にお仕えいただいて二紀（二十四年）ちかくになり、理屈のうえでは側近なのですが、心情としては親友のようなおかたでした。文会や講学、あるいは朝夕の遊宴の場では、ともに称賛したり志をかたったりしたものです。

それなのに張緬どのは逝去され、あっというまにお会いできなくなりました。まだ四十歳になったばかりで、これから才幹を発揮されるはずでした。それなのに、その麗質はこの世からきえてしまい、私はなげきかなしむばかりです。兄弟のごとき昵懇（じっこん）な仲をふりかえるにつけ、とつぜんのご逝去に、私の無念さはいいようがありません。ここまでつづってきて嗚咽がはげしくなり、もはやきちんとした文はつづれなくなりました。

賢兄┌学業該通、雖┌倚相之読墳典、惟今望古、蔑以斯過。自列宮朝、二紀将及、
　　└莅事明敏。　└郡穀之敦詩書、
└義惟僚属、┌文筵講席、何曾不┌同茲勝賞、
　└情実親友。└朝遊夕宴、　└共此言寄。
如何長謝、奄然不追。且年甫強仕、方申才力、摧苗落穎、弥可傷惋。念天倫素睦、一旦相失、如何可言。
言及増哽、攬筆無次。

この書翰でも、前半で張緬の明敏ぶりを称賛し、後半でおのが哀感を吐露している。哀感と称賛とが調和した、典型的な君子ふう叙法だといってよかろう。

ただ、この書翰でとくに注目したいのは、張緬とのかつての交遊ぶりをかたった部分である。蕭統は、「私の東宮にお仕えいただいて二紀（二十四年）ちかくになり、理屈のうえでは側近なのですが、心情としては親友のようなおかたでした」とのべ、また「兄弟のごとき昵懇な仲をふりかえるにつけ、とつぜんのご逝去に、私の無念さはいいようがありません」とかたっている。

いうまでもないことながら、蕭統はときの皇太子である。その皇太子が、亡き側近に「心情としては親友のよう」とのべ、「兄弟のごとき昵懇な仲」といっているのだ。これは尋常ではない。やはり蕭統ならではの、温情あふれた発言だとせねばならない。

こうした発言も、曹丕を意識したものだろう。曹丕も「与呉質書」などにおいて、やはり身分の差をこえた連帯感をかたっていた。たとえば「与朝歌令呉質書」では、呉質にむかって「道はちかしといえども、公務のため、貴兄には自由にあえません。そなたへの思慕の情は、たえがたいものがあります」（塗路雖局、官守有限。願言

之懐、良不可任）と、まるで恋人にかたるような語句をつづっている。また「与呉質書」でも、「貴殿はこのごろ、いかがたのしんでおられますか。なにか詩文はつくられましたか。そなたのいる東方の地をのぞみつつ、この書翰をつづったしだいです」（頃何以自娯、頗復有所述造不。東望於邑、裁書叙心）と、たいへん親しげなことばをつづっていた。

だが、この「与張纘書」における蕭統のことばは、こうした曹丕の発言よりも、もっと君臣の垣根をとっぱらっている。なにしろ、ときの太子が、死んだとはいえ側近だった者に、「親友のような」「兄弟のごとき」とのべているのだ。ここまでは、曹丕もかたっていなかった。

しかも、こうした「親友」「兄弟」発言、書翰文全体の内容からみれば、とくにうきあがっているわけではない。前後の行文をみれば、こうした語句は喩えでも強調でもなく、ごく自然な発言として、ながれでてきたような感がある。

すると、この書翰をかくとき、蕭統は、張緬の死を、ほんとうにおのが親友、おのが兄弟の死だとおもっていたのかもしれない。だからこそ、末尾で「ここまでつづってきて嗚咽がはげしくなり、もはやきちんとした文はつづれなくなりました」という状況になったのだろう。悲しみのあまり、蕭統は、執筆をつづけられなくなったのである（ここの言いかた、諸葛亮「出師表」末尾を連想させる）。かかる悲しみと敬慕の情にあふれた行文こそ、蕭統のもっとも蕭統らしいものといってよかろう。

八　中庸の文学観

さて、蕭統の詩文について、常識的で個性にとぼしいが、好意的に解すれば、温雅で君子然とした文風だといえること、そして哀悼書翰が卓越していること――などを指摘してきた。では、そうした詩文をつくった蕭統の文学観は、どうしたものだったのだろうか。以下では、右の詩文への考察をふまえて、蕭統の文学観をかんがえてみよう。

蕭統の文学観がどんなものであったにせよ、ほんらい、たいした問題ではなかったはずだ。だが、彼が『文選』の編者であり、その文学観が『文選』の編纂基準ともかかわってくるということで、以前から論議の的となってきたのだった。

そうした蕭統の文学観がよくわかる資料として、「答湘東王求文集及詩苑英華書」「陶淵明集序」「文選序」、そして劉孝綽の「昭明太子集序」などがある。ただこまったことに、これらの資料をよんでみると、バラバラで不統一な内容の発言が目につき、矛盾や齟齬があるようにみえてくるのである。

だが、文学に関する発言で、一生のあいだ、おなじひとが、おなじ主張を、おなじようにかたりつづけた、ということのほうが、むしろめずらしいのではないか。生身の人間である以上、そのときそのときで、ことなる主張、ことなる言いまわしをすることは、じゅうぶんありえることだ。

したがって、さまざまな折りに発せられた不統一な発言に対し、「矛盾している」とふしぎがったり、「どうなってるんだろう」となやんだりしても、あまり生産的ではない。むしろ、「基底にある文学観はそうかわらないが、経年による変化やそのときの事情によって、すこし表現やニュアンスがかわったのだろう」ぐらいに、おおらか

に理解したほうがよかろう。

以下では、こうした考えかたにたちつつ、文学に対する蕭統の諸発言を吟味し、整理して、彼の基底にある文学観はどんなものだったのかを推測してゆきたい。

私は、蕭統の基底にあった文学観は、書翰文「答湘東王求文集及詩苑英華書」（前出。以下は「答書」）でかたったものが、それではないかとおもう。集序などの公式的なジャンルでは、ややもすれば、たてまえふうな主張をかたりやすい。それに対し、自分の弟あて書翰だったら、かみしもをぬいだ本音がでやすいだろう。

ではこの書翰文で、蕭統はどんな考えをのべているのか。それは、

いったい、文学は典雅であればぶしつけになりやすく、美麗であれば浮薄になりやすいものだ。美麗でありながら浮薄でなく、典雅でありながらぶしつけでなければ、文質彬彬として君子の気風をそなえたものになる。私はそんな詩文をつくりたいんだが、残念ながらうまくかけない。

夫文「典則累野、能「麗而不浮、文質彬彬、有君子之致。吾嘗欲為之、但恨未逮耳。
　　「麗亦傷浮。　「典而不野、

というものだ。ここでの主張、要するに「文学というものは、文飾と内容とが、ほどよく調和したものがいいなあ」という考えかただといってよかろう。右の文中の「文質彬彬」ということば、これがキーワードであり、「文飾と内容とが、ほどよく調和したもの」というのは、この語を意訳したものである。

この「文質彬彬」なる語は、蕭統があみだしたものではない。ずっと以前からあることばであり、もともとは『論語』雍也中の一節、

質　文に勝れば則ち野なり、文　質に勝れば則ち史なり。文質彬彬にして、然る後に君子なり。

に由来するものだ。この孔子のことばは、内実（質）が外観（文）にまされば、ぶしつけ（野）になってしまうが、外観（文）が内実（質）より過度だと、気どりすぎてしまう（史）。外観（文）と内実（質）とが、ほどよく調和してこそ、君子らしくなれるだろう、ぐらいの意である。このように文質彬彬の語は、もとは人物批評、具体的には「君子の条件」をいうことばだった。

蕭統は、この『論語』由来の語を、文学の批評用語に転用したのである。おそらく蕭統「答書」では、「文」を文飾（典故や対偶など）、「質」を内容、そして「彬彬」を調和する、の意でつかっているのだろう。そして「文」（文飾）は、その多少によって「麗」になったり、「浮」になったりし、おなじく「質」（内容）も、加減のしかたによって「典」になったり、「野」になったりするのだと、かみくだいて説明している。蕭統は、こうした「文」（文飾）と「質」（内容）のほどよい調和（彬彬）こそ、理想の文学だとみなしているのだろう。

この文質彬彬の主張、蕭統は、他人にもよくかたっていたようである。というのは、おなじようなことを、劉孝綽が「昭明太子集序」のなかでもかたっているからだ。すなわち、孝綽は、自分の優秀な教え子というべき蕭統の詩文に対し、つぎのように評しているのである。

典雅にして粗野でなく、深遠にして放縦でなく、華麗にして淫靡におちず、簡潔にして舌たらずでない――こうであってはじめて、善美をそなえた文学といえましょう。そうした詩文が、この太子さまの文集にあつまっております。

能使典而不野、遠而不放、
「麗而不淫、独擅衆美、斯文在斯。
「約而不俭、

ここでは、文質彬彬の語こそ使用していないものの、「典雅にして粗野でなく」「華麗にして淫靡におちず」な

どと、右の「答書」とおなじ趣旨のことをかたっている（前出）。この「昭明太子集序」は、「答書」とおなじ普通三年（五二二）、蕭統二十二歳のときにつづられたものだ。

つまり、この『論語』を利用した「文学は文質彬彬であるべし」という文学的主張は、蕭統みずからも書翰でかたり、他人（劉孝綽）も彼の集序でつかっているのである。すると、この時期の蕭統は、しばしばこうした主張をしていたのだろう（蕭統は、十八歳のときの「答玄圃園講頌啓令」でも、弟の蕭綱の文を「辞は典にして文は艶あり、既に温にして且つ雅なり」とのべ、似たような表現で称賛している）。

この蕭統書翰と劉孝綽集序における主張の一致は、偶然ではないはずだ。どちらかがどちらかに、影響をあたえたものとかんがえねばならない。すると年齢からいっても（劉孝綽が二十歳も年上）、立場からみても（劉孝綽は蕭統の老師格である）、とうぜん劉孝綽が、蕭統に影響をあたえたとみるべきだろう。

つまりこの文学観の一致は、蕭統が劉孝綽の文学観をうけいれ、完全に自分のものとしていたことをしめすものだ。これは、よくいえばそれだけ蕭統がすなおで、優秀だったといえようが、わるくいえば自分の考えがなく、他人の色にそまりやすかった（老師を批判できない）ともみなしうる。蕭統は、聡明だったし、気くばりもできたが、文学的には、すなおすぎ、他人の影響力をうけやすいタイプだったといえるかもしれない。

ところで、私が問題にしたいのは、この文質彬彬なる考えは、〈蕭統の文学観〉といえるほど、独自な主張なのだろうかということである。というのは、この文質彬彬なる語、『論語』に由来することばなので、べつに蕭統の販売特許ではなかったからだ。じっさい、蕭統以前にもいろんなひとが、文学批評の場でつかっている。その意味で、蕭統独自の考えとはいいにくく、むしろだれでも口にしそうな、平凡なものではないかとおもうのである。

この「文質彬彬」の用例を捜求して、その意義を考察してくれた論文がある。それが、王運熙「中国文学批評史上的文質論」（『文学知識』一九八五―九）である。以下、この論文を参照しながら、［文学批評方面の］用例をみわたし、真に蕭統独自の文学観といえるかどうかを吟味してみよう。

この文質彬彬なる語、もともと人物批評のことばなので、ひとを評する場面で使用することがおおかった。そうしたなか、蕭統のように文学批評に転用したケースとしては、後漢の班彪「史記論」中の、

司馬遷は、『史記』で事がらの道理を的確にかたり、雄弁だが華麗すぎず、質素だが粗野ではなく、「文質彬彬」のよさを兼備している。良史の才だったといってよかろう。

善述序事理、弁而不華、質而不野、文質相称。蓋良史之才也。

が、はやいものだろう。これは司馬遷の『史記』を論じた一節である。班彪は『史記』を評して、「弁にして華ならず、質にして野ならず、文質相称（あいかな）えり」とのべ、司馬遷のことを「蓋（けだ）し良史の才なり」とたたえているのである。

六朝の時期になると、この文質彬彬の語は、著名な文学論のなかに、しばしば批評用語として出現している。おもだったものをあげれば、つぎのとおりである。

○［陸機文賦］徳望たかき古人の功業を［たたえた詩文を］詠じ、先人の高潔な人格を［たたえた詩文を］口ずさむ。また文学の宝庫をさまよい、文藻の「彬彬」さをめでたのしむ。かくして［詩嚢がふくらんでくるや］、ひとは書物をなげすてて手に筆をとり、胸中の想いを文辞にのせようとするのだ。

詠世徳之駿烈、誦先人之清芬。遊文章之林府、嘉麗藻之彬彬。慨投篇而援筆、聊宣之乎斯文。

○［沈約宋書謝霊運伝論］建安となり、曹氏が魏をおこすや、三祖（武帝、文帝、明帝）と陳思王（曹植）

らは、ともにすばらしい文藻をつづった。こうして詩文は、情趣で文辞をおりなし、「文」で「質」をかざるようになったのだ。

至于建安、曹氏基命、三祖陳王、咸蓄盛藻。甫乃以情緯文、以文被質。

○［文心雕龍通変］浅薄な文学を改革しようとすれば、経書にかえらねばならぬ。「質」と「文」との相関を調和させ、典雅さと平俗さをととのえれば、文学の変化について論じられよう。

矯訛翻浅、還宗経誥。斯斟酌乎質文之間、而隠括乎雅俗之際、可与言通変矣。

○［詩品曹植の条］曹植の詩は、源流は『詩』国風からきている。生命力は奇抜にして高邁、また詩藻は華麗である。感情は典雅さと怨みをそなえ、スタイルは「文」と「質」とを兼備している。

其源出於国風。骨気奇高、詞彩華茂。情兼雅怨、体被文質。

○［詩品序］ついで、この龍や鳳というべき天才の後をおっかけて、副車にのりこんだ小詩人は、百人ほどもいたろうか。かくして「彬彬」たる建安の文学活動は、おおいに展開したのだった。

次有攀龍託鳳、自致於属車者、蓋将百計。彬彬之盛、大備於時矣。

○［蕭綱与湘東王書］陽春のごとき篇は高雅すぎて唱和されず、妙なる歌声は絶妙すぎて見向きもされない。そして、細部の美を検討せず、「文」と「質」の調和も無視するので、できた作は［傑作をかこうとする］意気ごみにそむき、名手に恥じるような篇ばかりというしまつ。

陽春高而不和、妙声絶而不尋。竟不精討錙銖、覈量文質、有異巧心、終愧妍手。

○［蕭繹内典碑銘集林序］艶麗であっても華麗すぎない、質朴であっても粗野でない。博学だがうるさくはなく、簡潔だが粗末ではない。「文」でありつつ「質」もあり、簡約でありつつ潤いにもとんでいる。そし

て事がらは意図に応じてならび、道理は発言に応じてふかまってゆく――こうであってこそ、精華といえるわけであり、批判しようがなくなるのである。

能使艶而不華、質而不野。博而不繁、省而不率。文而有質、約而能潤。事隨意転、理逐言深。所謂菁華、無以閒也。

これらの用例、個々によってニュアンスがことなるが、おおむね「文」は文飾［の華麗さ］、「質」は内容［の質朴さ］、そして「彬彬」は［文質の］ほどよい調和、と解してよさそうだ。

このように六朝では、文質彬彬の語は、文学批評において、だれもがふつうに使用することばなのである。蕭統の兄弟である蕭綱や蕭繹まで、この語をつかっているし、蕭繹の「内典碑銘集林序」にいたっては、「艶而不華、質而不野」という叙しかたまで、兄の蕭統「答書」とよく似ているのだ。

じっさい、この文質彬彬ということば、「文飾と内容とが、ほどよく調和したものがいいなあ」ということだから、だれもがかんがえそうだし、だれもがいいそうだ。だから蕭統だけでなく、右の劉勰や沈約、鍾嶸なども、たぶんおなじようにかんがえていたのだろう。このことは、これと逆の、「文飾と内容とが調和しないものがいい」「文飾（または内容）だけが大事で、内容（または文飾）などどうでもよい」という主張など、ありえないことを想起すればよい。

これを要するに、蕭統は［自身の詩文がそうであったが］、文学に対する考えかたも、常識的であり、良識的なものだったのである。だから、だれでもいいそうな、よくいえば中庸な、わるくいえば平凡な考え（それも、老師劉孝綽の受けうり）しかもっていなかったのだろう。

もうひとつ、蕭統の文学観をかんがえるときに重要な、［よしとする文学の］許容範囲のひろさについてもふ

れておこう。それは、この「文質彬彬」中の「彬彬」ということばの、意味内容のあいまいさと関係するものである。

この語、「［文と質とが］ほどよく調和する」の意であることは前述した。では、その「ほどよく調和する」というのは、どうした状況をさし、どうした詩文をいうのだろうか。これは、ひとによって、かなり内実がちがってくるだろうし、蕭統にたずねても、明確な回答はかえってこないのではないか。

私見によれば、「ほどよい」という感覚は、基本的には、文と質とが五対五である状況をさすのだろう。だが感覚というものは、微妙にゆらぎ、うつろうものだ。みる角度や状況によって、あるいはそのときの気分によって、六対四でも七対三でも、場合によっては八対二でも、「ほどよい」となるのではないか。つまり実態としては、「文と質がほどよく調和する　→　ほどよいと感じられればよい　→　片方が皆無でなければよい」となって、「ほどよい」の許容範囲はひろくなりがちだったろうとおもわれる。

これを要するに、「文質彬彬」が、蕭統の基底にあった文学観だったのはまちがいない。だがそれは、あまりに常識的で平凡、だれでもいいそうなことばだった。そしてそのうえ、実体もぼんやりとしていて、許容範囲のひろいものだったのである。

九　風教を助くる有り

さて、蕭統の「文質彬彬」の文学観についてのべてきた。ただ、それはあくまで、基底にあったものにすぎない。蕭統は、この文質彬彬をかたる以外にも、さらに毛色のかわった［ようにみえる］発言をおこなっている。

それが、蕭統の文学観をわかりにくくしているのである。では蕭統は、どんな毛色のかわった主張をしているのか。この章では、「陶淵明集序」をとりあげ、そこでの発言に注目してみよう。

この集序で、蕭統はどんな主張をしているのか。

第一に注目したいのは、［文質彬彬ではなく］風教の大切さを強調していることである。蕭繹は、陶淵明の詩文がすきだったようで、彼の文集を編纂し、その文集の序もかいた。その序「陶淵明集序」において、蕭統はつぎのようにかたっているのだ。

私は淵明の詩文をこのみ、手ばなすことができぬ。淵明の徳望ぶりを想起しては、生時をおなじくしないのをざんねんにおもう。そこで彼の詩文を捜求して、あらまし分類してみた。

白璧中のきずというべきは、「閑情賦」一篇である。この作は、揚雄のいう「誘惑が百で、諷諫は一だけ」というしろもので、諷諫の意がみとめられぬ。どうして筆をとる価値があったろうか。おしい、こんな作はなくてもよかった。あわせて淵明の伝記をざっとつづり、目録中にいれておいた。

私はいつもおもう。淵明の詩文をよんだ者は、貪欲な心がなくなり、卑俗な気もちもきえさるだろう。欲ばりも清廉な心をもち、臆病な者も勇気がでるだろう。ただ仁義をおこない、爵禄もいらないとおもうだけではないのだ。されば、ひとは［淵明の詩文をよみさえすれば］泰山や華山にのぼったり、［老子のように］僻遠の地へ隠遁したりする必要もなくなるだろう。つまり淵明の詩文は、風教にも役だつのだ。

余愛嗜其文、不能釈手。尚想其徳、恨不同時。故更加捜求、粗為区目。白璧微瑕者、惟在閑情一賦。楊雄所謂勧百而諷一者、卒無諷諫。何必揺其筆端。惜哉、亡是可也。并粗点定其伝、編之于録。常謂有能読淵

明之文者、
┌馳競之情遣、┌貪夫可以廉、豈止┌仁義可蹈、不労復┌傍游太華、此亦有助於風教爾。
└鄙吝之意祛、└懦夫可以立。└爵禄可辞。└遠求柱史。

ここで蕭統は、淵明の詩文には諷諫の意があり、風教に役だつからこのむのだ、と明言している。淵明の詩文をよめば、ひとは「欲ばりも清廉な心をもち、臆病な者も勇気がでるだろう」。だから淵明の詩文はすばらしい、というわけである。そうしたなか、唯一の例外が「閑情賦」であり、諷諫の意がみとめられぬから不可だ。こんなものはつくらぬほうがよかった、という。

風教にせよ、諷諫にせよ、儒教ふうの伝統的な考えかた（以下、風教）である。これによって蕭統は、人びとを感化する詩文をよしとする、儒教ふう文学観も有していたことがわかる。北宋の蘇軾は、この「閑情賦」批評にかみついて、「子どもが無理して文学を解釈しようとしたものだ」（小児強作解事者）といって、蕭統を罵倒した（『東坡志林』題文選）。だが、蕭統の「閑情賦」批判は、彼なりの風教重視の基準に依拠したものであり、これはこれで筋のとおった批評だというべきだろう。蕭統は「七契」の文章でも、「洛水をのぞめば君子の好逑があらわれた」とつづるぐらいだったから、たしかにふるめかしい伝統主義者だったのだろう。

この「淵明集序」中の風教発言と、さきの文質彬彬の主張とは、いっけんことなっているようにみえる。しかし、それは「そうみえる」というだけであって、ふるめかしい儒教ふう文学観という点では、両者とも共通しており、べつに対立しあっているわけではない。

このふたつのうち、蕭統の基底にあったのは、まえにもいったように文質彬彬のほうだろう。これは儒教の経典（論語）に由来するもので、「文飾と内容とが、ほどよく調和したものがいいなあ」という文学観だった。そして私見によれば、このうえにのっかかっているのが、風教重視の考えだろう。これも儒教の経典（詩経大序）

に由来するもので、「為政者は徳をもって人びとを〈風する〉、つまり感化すべし」という主張である。両者とも、君子の行動に関連したものであり、おおきくは儒教ふう文学観としてみなしてよいものである。

このように、文質彬彬と風教とは、ともに儒教ふう文学を理想とするもので、前者はそのありかた（文と質とが調和する）に注目し、後者はその効能（人びとを感化する）をかたったものなのだ。つまり、文質彬彬をいうにせよ風教をかたるにせよ、要するに蕭統は、伝統的な儒教ふう文学をよしとしていたのである。その意味で、このふたつは、おなじ儒教ふう文学観を、ことなった視点から、ことなったふうにのべたものにすぎず、たがいに矛盾したり、対立しあったりしているわけではない。蕭統にいわせれば、文質彬彬たる詩文だったら、風教にも役だつはずなのだろう。

つづいて、二番目に注目したいのは、儒教ふう文学観をもつ蕭統が、なぜこんなに陶淵明にあこがれたのか、ということである。蕭統は右に引用した集序で、「私は淵明の詩文をこのみ、手ばなすことができぬ。淵明の徳望ぶりを想起しては、生時をおなじくしないのをざんねんにおもう」と、淵明へのあこがれを情熱的にかたっている。この陶淵明は現在とはちがって、当時は詩人や文人でなく、隠者として多少しられている程度だった。そうした淵明やその文学を、ときの皇太子たる蕭統が、なぜこんなに気にいったのだろうか。

これは推測しやすいことだ。おそらく、［太子としての］窮屈な生活への反動だったろうとおもわれる。それは、つぎのような事情である。

蕭統はもともと、「性として山水を愛す」と称されるほど、山水がすきだった。『南史』本伝から、その前後もあわせて紹介すれば、

蕭統はうまれつき、山水がだいすきで、玄圃園に池をほり築山をつくった。さらに亭館もたてて、廷臣や名

流と、そこであそんだ。舟を池にうかべてあそんだとき、番禺侯の蕭軌がさかんに、ここで女楽をやらせたら、たのしいぞ、といいたてた。すると蕭統はなにもいわず、左思の「招隠詩」の「どうして楽が必要あろうか。山水に清音があるではないか」の一節を詠じたのである。蕭軌は恥じて、女楽のことをいわなくなった。

とある。このように蕭統は、「うまれつき、山水がだいすき」であり、舟あそびのさいちゅうでも、とっさに左思「招隠詩」の「何ぞ必ずしも絲と竹ならんや、山水に清音有り」という一節を口ずさむほどだった。女楽の絲竹より、山水の清音のほうがすきだったのである。

しかし彼は皇太子である。二歳で太子となった蕭統は、ずっと東宮のなかでそだてられ、劉孝綽をはじめとする老師たちから、熱心に学問や詩文をまなんだ。そして元服後は、武帝によって、おおくの政務をまかされたのだった。そうした蕭統について、建康をとおくはなれ、どこか地方にでかけた、という記録はのこっていない（荊州にいったことがあるという説もあるが、とらない。曹旭・田鴻毛『蕭綱評伝』八十一頁）。そのため、彼が山水にふれるといえば、建康の郊外へ散策にでかけるか、東宮内の玄圃園で舟あそびするぐらいだったのだろう。弟の蕭綱や蕭繹が、諸侯王となって地方にでかけ、あらあらしい田野や山河を跋渉したのとは、雲泥のちがいだったのである。

そうだったとすれば、太子としての窮屈な生活とそれへの反動によって、陶淵明にあこがれたという事情は、じゅうぶんありえることだろう。蕭統にとっては、自由にいきる陶淵明が、理想の人物にうつったのにちがいない。隠棲するひと自体は、この淵明以外にもたくさんいたし、また蕭統のころにもいた。だがこの淵明は、田野にかくれただけでなく、その脱俗した心境を詩文につづり、かたっている。「帰去来辞」「五柳先生伝」「桃花源

記」、そして「飲酒」詩のかずかず。東宮のなかで鬱屈した蕭統は、日々これらの詩文をなめるようによみ、いとおしんでいたのだろう。

ただ誤解してならないのは、かく淵明の詩文をこのんでいたといって、蕭統が道家思想に共鳴し、隠遁を実践しようと念じていたわけではない、ということだ。聡明な蕭統のことである。自分は太子であり、隠逸などできるはずがないとしっていたはずだ。

かく自覚すればこそ、蕭統は道家ふうの隠遁でなく、儒家ふうの明哲保身の生きかたを念じたのだった。「陶淵明集序」をもういちどよんでみると、つぎのような一節がある。

○徳の至りは、道をこえぬことにあり、自己をたもつ要点は、身をまもることにつきる。だから道をこえねば、身は安泰だし、逆に道をこえると、身はあやうい。百年の寿命をいき、一代の生涯をすごしたとて、白駒がすきまをかけさり、旅館にかりずまいしたようなものにすぎない。されば、自然とともにうつろい、中和の道にしたがって自由にいきるのが、いちばん。どうしてくよくよ憂いごとにしずみ、俗世の仕事に汲々としようか。

「含徳之至、莫踰於道、故「道存而身安、「処百齢之内、「倏忽比之白駒、
「親己之切、無重於身。「道亡而身害。「居一世之中、「寄寓謂之逆旅。
宜乎「与大塊而盈虚、豈能「戚戚労於憂畏、
「隨中和而任放。「汲汲役于人間。

○斉女の歌唱や趙女の舞踊などの楽しみ、八つの珍味や九つの鼎の美食、［豪華な］四頭だて馬車やつらねた騎馬での遊び、美服や宝玉を身にまとう高貴さ、これらはたのしいものではあるが、憂いもつきまとう。

なんと禍福のはかりがたく、悲喜の継起しやすいことか。それゆえ知者や賢人は高位にいても、薄氷をふむよりなお慎重にふるまうが、愚夫や欲ばりは贅沢をきそうこと、海水が滔々と穴におちゆくごときだ。

斉謳趙舞之娯、結駟連騎之遊、楽則楽矣、憂則隨之。
八珍九鼎之食、侈袂執圭之貴、
何倚伏之難量、智者賢人居之、甚履薄氷。
亦慶弔之相及。愚夫貪士競此、若泄尾閭。

ここで蕭統は、慎重な処世をすべきだとかたっている。ひとは「道をこえぬこと」「身をまもること」に専念し、「自然とともにうつろい、中和の道にしたがって気ままにいきるのが、いちばん」だ。なぜなら、この世は「禍福のはかりがたく、悲喜の継起しやすい」ものであるからだ。だから、ひとは「薄氷をふむよりなお慎重にふるまう」べきであるぞ――こうした生きかたを、淵明はみごとに実践した。自分もそれにならいたい、と蕭統はいっているのだろう。

こうした部分をよむと、蕭統は、山水にはあこがれても、道家ふうの隠逸や登仙には、けっしてあこがれていないことに気づく。彼にとって大切なことは、隠者や逸民になることではなかったし、ましてや神仙になったり、仙薬を手にいれたりすることでもなかった。この世俗において、道をこえず、身をまもり、慎重にふるまっていきてゆく。そうした儒教ふう明哲保身の生きかたをこそ、蕭統は希求していたのである。

つづいて、この集序で三番目に注目したいのは、あざやかな文学批評ぶりだ。蕭統は、風教を重視したり、明哲保身を主張したりするなど、ふるめかしい儒教的道徳に従順だったが、いっぽうで、淵明詩における酒解釈においては、じつにみごとな分析をおこなっている。

陶淵明の詩にはどの篇にも酒がでてくる、とふしぎがる者がいる。私が推測するに、彼は酒がすきだったのでなく、酒に託しておのが事迹をかたっているのだ。

淵明の文学は平凡でなく、文彩は精妙である。文意は起伏にとみつつ明瞭で、他の作からぬきんでている。文章の抑揚も明快で、これにならびたつ作とてない。あたかも白波に横たわってながれ、青雲をぬけて飛翔するかのよう。時事をかたれば、すぐそれとわかり、想いを叙せば、曠達な心がうかがえる。

そのうえ、志はおとろえず、道にやすんじ節操をまもっている。鍬を手にするを恥とおもわず、貧窮にも屈しない。賢明にして志あつく、道とともに盛衰するひとでなければ、だれがこうした生活ができようか。

有疑陶淵明之詩、篇篇有酒。吾観其意不在酒、亦寄為跡焉。其
- 文章不群、跌蕩昭章、独超衆類
- 詞彩精抜。

抑揚爽朗、莫之与京。
- 横素波而傍流、
- 干青雲而直上。
- 語時事則指而可想、
- 論懐抱則曠而且真。

加以
- 貞志不休、
- 安道苦節。
- 不以躬耕為恥、自非大賢篤志、与道汚隆、孰能如此乎。
- 不以無財為病、

ここにおける淵明の詩文への批評は、現在でも通用するのではあるまいか。とくに淵明詩における飲酒の意義を、「酒がすきだったのでなく、酒に託しておのが事迹をかたっているのだ」と喝破したのは、たいへんすばらしい。それ以外でも、「淵明の文学は平凡でなく、文彩は精妙である」「文意は起伏にとみつつ明瞭で、他の作からぬきんでている」「文章の抑揚も明快で、これにならびたつ作とてない」などのことばは、なかなかするどい批評眼をおもわせるものだ。

この集序における蕭統の文学批評は、具体的な指摘をしつつ、明快に是非をかたったものである。そのためかじゅうらい、賛否の意見がまきおこりがちだった（さきにみた蘇軾のことばなど）。

ただ、蕭統批評の是非を云々するまえに、当時の集序では、称賛のことばが叙されるのみで、まともな文学批評（詩文への褒貶）などは、ほとんどおこなわれていなかったことを想起すべきだろう。そうしたなかにあって、蕭統は、さきほどの「閑情賦」批判をふくめ、是々非々の立場で淵明の詩文を真摯に論じているのである。こうした真摯な批評態度は、従前の集序にはなかったものであり、やはり意義をみとめられてしかるべきだろう。

ところで、この集序中での文学批評には、もうひとつおおきな特徴がある。それは、「明をみて暗をみない」ということだ。つまり蕭統は、淵明やその詩文の長所は情熱的に賛美するが、その短所には目をつぶって言及しない傾向があるのである。

たとえば、陶淵明の人がらや詩文をかんがえてみよう。現代においても、陶淵明の人となりや詩文には、批判的なものがないではない。岡村繁『陶淵明―世俗と超俗―』（日本放送出版協会　一九七四）などは、その代表的なものである。岡村同書は、高潔な隠者イメージがつよい陶淵明が、じっさいはそうではなかったことを、冷静に考察し、そして指摘したものだ。同書によると、淵明の性格やその詩文には、わがまま、独善的、利己主義、小心、強がり等々の、あしき傾向が多々みられという（こうした見かたは、おそらく淵明生存時にも存していたことだろう）。

だが蕭統は、そうした淵明の暗の部分には言及しない（右にみた「閑情賦」への批判も、私淑すればこその痛言であり、広義の「明」ふう発言だというべきだろう。拙著『六朝文評価の研究』三七二頁を参照）。真に気づかなかったのか、気づいてはいてもしらぬふりをしたのか、そのあたりのことは、わからない。だが、こうした

暗に目をつぶり、明の部分にしか言及しようとしないのが、蕭統の持ちまえだったのである。

同種のことが、淵明の場合だけでなく、現実の世界でも発生していた。それは、彼の老師のひとり、劉孝綽が問題をおこしたときのことだ。「二三　気くばり名人」でもふれたが、劉孝綽は、日ごろの言動によって到洽から怨みをかい、廷尉卿の官をクビになってしまった。そのとき孝綽は、いかにも彼らしくふるまった。恐縮し、反省するどころか、猛烈な反撃をこころみたのである。

すなわち孝綽は、弟の劉孝儀と劉孝威に手紙をおくって、このたびの到洽の行いが不公平であることをうったえ、彼を軽蔑したような言辞をかきつらねた。そして、おなじ内容の文をもう一通つづって、なんと東宮の蕭統にもおくりつけたのだった。自分の東宮での教え子（蕭統）に、助力をたのもうとしたのだろう。このとき蕭統はどうしたか。彼は孝綽からの手紙をうけとるや、「命じて之を焚かしめ、開視せざるなり」だったという。つまり蕭統は手紙の封をひらこうとせず、配下に命じてやかせてしまったのだった。

この行為、いかにも蕭統らしいではないか。彼はおそらく、孝綽書翰の内容が予想できたのだろう。つまり、到洽の行為を難じ、自分を復権させてほしいと懇請したもの。こうおもった蕭統は、それをよもうともせず、配下にやかせてしまったのだ。老師たる孝綽を弁護するでもない、また批判するでもない。ただ老師の醜悪な言動を、みたくなかったのである（明哲保身の生きかたの実践でもあったろう）。

これは、おのが老師の出処に対しても、彼の「明をみて暗をみない」のやりかたを実践したものだとおもわれる。このように蕭統は、現実の世界においても、文学批評の場とどうよう、明の面のみをみて、暗つまりいやな面は、みようとしなかったし、またしりたくもなかったのである。

いっぽう、蕭統は明をみつけて、それをほめたたえるのは、だいすきだったし、また熱心だった。

たとえば、蕭統は東宮で教えをこうむった老師たちが死んだとき、よく哀悼の書翰文をかいた。そうしたとき、つねに老師たちの美質をほめあげていた。たとえば、「陸倕どのは忠貞の道を実践し、氷や玉のような廉潔さを有していた。詩文は風雅頌の正道を体し、学問は諸子を兼修していた。その高潔にして卓越した精神は、真率そのものだった」、「明山賓どのは儒学や古典をきわめ、淳良にして誠実、修養をかさね正道を実践する姿勢は、生涯かわることがなかった。もし孔子さまとお会いしても、きっとその堂に案内されたことだろう」など。

おなじく、蕭統はしばしば書翰文を介して、弟たちと詩文をやりとりしていた。そうしたときでも、きまって弟の詩をほめあげていた。「おまえ（蕭綱）はもともと天賦の才があるうえ、詩がすきなんだな。自分の長所をわすれず、さらに日々進歩している」「今回のおまえ（蕭繹）の手紙の文などは、ことにすばらしい。古風な趣をそなえ、古籍をまなんでいるから、おかげで成果があがって、すごくよいできになっているよ」など（以上、「三　気くばり名人」を参照）。

このように蕭統は、老師の哀悼書翰や弟との書翰交換では、きまって相手をよくたたえていた。しかもそれは、とおりいっぺんの褒めことばをならべるのでない。いちいち、そのひとやその詩文にふさわしい褒めことばをつかって、真摯に相手を称賛しようとしている。

そうした事例を、もうひとつあげてみよう。彼は十八歳のとき、弟の蕭綱から「玄圃園講頌」をおくられ、その行文に感心した。そこで「答玄圃園講頌啓令」をつづって、弟の文章をほめたたえたのである。そのとき蕭統は、弟の頌文中の「賓従無声、芳香動気、七弁懸流、双因俱啓」句をとりあげて、「弥（いよ）いよ法席の致（おもむき）有り」と称賛し、また「日映金雲、風揺銀草」句に目をとめて、「殊（こと）に物色の美を得たり」と褒めことばを呈したのだった。

かく、文中の秀句をさがしだし、その美点をたたえるような批評は、いいかげんな読みかたでは、できるもの

ではない。蕭統は、弟の頌文の一字一句を真剣によんで、そのすぐれた箇所をみつけだし、そして「ここはすばらしいぞ」と、ほめてやっているのである。

こうした事例は、些細なことかもしれない。しかし、一事が万事ということもある。私は、こうした、弟の文章をほめるという一事も、「明をみて暗をみない」淵明批評の志向と、おなじ根っこからでてきたものではないかとかんがえるのである。

十　沈思翰藻

さて、蕭統の文学観として、基底にあった文質彬彬の発想、そしてそのうえにのっかかっている、風教重視の考えかたについてのべてきた。ただ蕭統の文学に対する発言は、それだけではなかった。もうひとつ、大事な主張をわすれてはならない。それは「文選序」中における発言である。

蕭統は周知のように、『文選』という詩文集を編纂したが、そのとき、その序文としてこの「文選序」をかいた。そのなかで、蕭統はつぎのような発言をしている。

史書のなかの讚と論は辞藻をあつめ、序と述は文飾をまじえたものだ。それらの文章たるや、内容はふかい思索から出発し、表現は華麗な美文に帰着している。されば、［詩賦などの］文学作品とならべて、これらの文章も『文選』に採録してよかろう。

若其「讚論之綜緝辞采、」「事出於沈思、故与夫篇什、雑而集之。」「序述之錯比文華、」「義帰乎翰藻。」

この一節は、『文選』中にどんな作をとり、どんな作をとらぬかについて、かたった部分である。このすこしまえで、蕭統はいう。経書の諸子、遊説家の弁論、そして史書の類は、採録しない。それらは、「立意」や「褒貶是非」（議論やよしあしを褒貶する）を目的としたものであり、「能文」（文辞をかざる）を重視していないからだ――。蕭統はこうかたったあと、「ただし例外がある」といって、そのあとにつづけたのが、右の引用なのである。

ここで蕭統は、史書中の讃、論、序、述などのジャンルは、内容はふかい思索（沈思）から出発し、表現は華麗な美文（翰藻）に帰着している。さればこれらの文章は、『文選』に採録してもよかろう、とかたっているのである。

この部分は、厳密にいえば、讃や論など［の史書の一部分］を採録する理由を、説明したものにすぎない。だが、前段の趣旨もかんがえあわせれば、蕭統は、「沈思」「翰藻」兼備の詩文を、自分の『文選』のなかに採録したといっていることになろう。すると、この「沈思」「翰藻」の兼備こそ、『文選』の採録規準だったといってもよいことになる。その意味で、右の引用部分は、研究者のあいだで、とくに重視されてきたものなのである。

では、この「沈思」「翰藻」重視の考えは、基底にあったとおぼしき文質彬彬、すなわち「文飾と内容とが、ほどよく調和したものがいいなあ」の考えかたと、どうかかわるのだろうか。

結論をさきにいえば、私は、沈思翰藻と文質彬彬とは異名同実だとおもう。すなわち、「沈思」（ふかい思索、の意）は、文質彬彬の「質」（内容）に相当し、「翰藻」（華麗な美文、の意）は、文質彬彬の「文」（文飾）とおなじ意味だろうとかんがえる。つまり蕭統は、弟（蕭繹）への書翰では、常識的で平凡な「文」「質」の語をつかったのだが、この『文選』の序文では、ちょっと気どった言いかたをしたほうがよいとおもった。なにしろ書

翰とちがって、ひろく世にでまわる［ことが予想される］詩文集の序文なのだ。ここは、きちんとかみしもを着て、格調たかい物いいをせねばならない。そこで彼は、「文→翰藻」「質→沈思」といいかえた――と推測しているのである。

こういうと、すぐ反論が予想される。たとえば、「文＝翰藻」「質＝沈思」とみなすのは、おおざっぱすぎる。そもそも「文」と「翰藻」、「質」と「沈思」とは、内包する意味がちがっているではないか――というような。しかり。そういわれれば、そのとおりである。前者「文＝翰藻」は、まだかさなる部分があるかもしれないが、後者「質＝沈思」はかなりずれているところがありそうだ。

だが、そうとはいえ、これらは、蕭統という同一の人物から、文学論の一環として、発せられたことばなのである。そうだとすれば、これらのことばのあいだに、関連や継承関係をみとめることは、それほど的はずれなことではないだろう。

そうした見地からみると、私は、蕭統の文学観は、やはり「文飾（＝華麗な美文）と内容（＝ふかい思索）とが、ほどよく調和したものがいいなあ」という、やや平凡なものだったろうとかんがえる。そうした考えを、弟への書翰では文質彬彬といい、「文選序」では沈思翰藻とかたったのではないか、とおもうのである。

ところで、この「文選序」は、蕭統の文学観をかたったというより、『文選』編纂に関する基本方針が、説明されているという点でこそ、重視されねばならない。蕭統は、文学の歴史をどのように認識し、いかなるジャンルを重視したのか。どのような動機で詩文集の編纂をこころざし、いかなる規準で作品を選録したのか――それらの大事な事がらが、この「文選序」のなかで、彼自身によってかたられているのである。

そもそも、同じ詩文集であっても、別集の場合は、その編纂はおおく、そのひとへの鑽仰の念から出発してい

る。いきおい、採録規準はあまくなるし、その序文も、当該人物をほめたたえることにかたむきやすい。

『文選』に採録される任昉「王文憲集序」がその典型である。その集序では、「私は王倹（あざなは文憲）どのに大恩をたまわった。士は知己に感ずるもの、どうしてその恩義をわすれられよう」のごとき、故人への感謝のことばがみえている。そのためだろう、一篇全体が、王倹の集序というより、称賛いっぺんとうの頌徳碑のごとき内容になっているのだ（その例外が、蕭統の「陶淵明集序」だった。前出）。

ところが、『文選』の場合は選集である。とうぜん、なんらかの規準にしたがって、採録作品をセレクトせねばならない。そのため蕭統は序文で、編者の文学観や編纂方針などをかたり、どうした規準で作品をえらんだのかを説明している。そんなこと、選集であればあたりまえではないか、とおもわれるかもしれない。ただ、これ以前には、選集の序文がのこっていないので、真にあたりまえなのかどうかは、よくわからない。

私見によれば、当時はほかにも選集があり、その序文もかかれていた。だが、それらの選集序は、もっと簡略だったり、粗雑だったりしたものだった。だから、淘汰の波にさらわれて史上からきえてゆき、けっきょく「文選序」だけがのこった――ということではないかとおもう。『文選』本体がのこったので、ついでにその序文も残存したというのでなく、私は、蕭統のつづった「文選序」も、その充実した内容ゆえ、のこるべくしてのこったのだとかんがえるのだ。そうかんがえれば、蕭統「文選序」は、当時の諸集の序とくらべても、［内容も、その行文も］出色のできだったのではあるまいか。

この「文選序」、かつては「劉孝綽の代作ではないか」と疑念をもたれたこともあった。だが現在では、孝綽代作説を主張するひとは、あまりいないようだ。私も、この「文選序」は、蕭統の自作だとしてよいとかんがえている（拙著『六朝文評価の研究』第七章を参照）。そこで以下、蕭統がつづった「文選序」を吟味してゆきな

がら、その意義や問題点についてかんがえてみたいとおもう。

まずは、「文選序」の概略をみておこう。以下、「文選序」を六つの段にわけて、その要旨をぬきだしてゆく。そしてその各段に、適宜私見をくわえてゆくことにしよう。

［第一段］文学の発生と発展

太古は、質素で民草は淳朴であり、文学は発生していなかった。伏羲氏のころから、文字がおこり、書籍が発生してきたのである。そまつな［乗物の］椎輪（ついりん）は、華麗な［乗物の］大輅（たいろ）の先祖であるが、後代の大輅には、過去の質朴さは残存していない。このように事物は時勢に応じてかわってゆくのであり、文学もその例外ではないのだ。

この第一段は、文学の発生とその発展を論じたものである。太古は、文学はなかったが、時代がくだるにしたがって、文字がおこり、書籍が発生してきたとのべており、いわば文学の進歩史観をかたっている。そまつな乗物の椎輪から、華麗な乗物の大輅への変化は、進歩史観のたとえとして、じつに巧妙なものである。

こうした文学の進歩史観、あたりまえのことではないか、とおもうかもしれない。だが、過去の中国では、太古の時代こそ、聖人がおさめた理想的な時代であり、その後しだいに世相は下降をつづけていった、とされることがおおい。その点、この「文選序」が、太古を文学未開の時代だったと断じるのは、めずらしいこととせねばならない。

［第二段］賦騒ジャンルの発展

文学の変遷を論じてみよう。「詩大序」にいう詩の六義の一に、賦があった。だが、いまは古代とはちがって、ジャンル名となっている。この賦のジャンルでは、まず荀況と宋玉が出現し、賈誼と司馬相如がひきつ

いだ。これ以後、賦の流れは、都邑、狩猟、紀事、詠物、魚虫、禽獣を叙したものなど、たいへん多様になってきた。いっぽう、屈原は楚王への諫言がうけいれられず、湘江の南へ放逐された。その鬱々たる思いをのべることから、騒のジャンルが発生した。

この第二段では、右の進歩史観のうえにたって、まず賦騒ジャンルの発展の経緯が叙されている。ここでも、『詩』にいう詩の六義（りくぎ）の一だった賦が、独立して別ジャンルになったことをかたっている。これも、進歩史観にもとづく発想だろう。

また賦と騒とを、別ジャンルだとかんがえていることにも注目しよう。屈原の諸作は賦とよばれることもあるのだが、蕭統は騒だと認定し、別ジャンルだとしている。『文心雕龍』でも、賦を詮賦篇でとりあげ、騒を弁騒篇で論じていたことがおもいあわされる。

【第三段】詩ジャンルの発展

詩は、志の動きをことばに表現したものだ。「関雎（かんしょ）」「麟趾（りんし）」は、王道の基礎をただす道すじをのべ、「桑間」「濮上（ぼくじょう）」には、亡国の楽が表現されている。かくして詩の風雅の道は、燦然とかがやいた。前漢に変化が生じて、韋孟の四言詩「在鄒」や李陵の五言詩「河梁」にわかれ、さらに三言詩や九言詩など、各種の詩体が発生してきた。

この第三段は、詩のながれを叙したもの。詩は、『詩』の各篇からはじまるとするのは定石どおりだが、やはり進歩史観にしたがって、韋孟の四言詩「在鄒」や李陵の五言詩「河梁」、さらに三言詩や九言詩など、各種の詩体が発生してきたとかたっている。

【第四段】他ジャンルの発展

頌は徳業を称揚しようとして、箴や戒はひとの欠点をおぎない矯正しようとして、それぞれ出現した。その他、さまざまな用途に応じて、おおくのジャンルがうまれてきた。たとえば論、銘、誄、讃などの文章、詔・誥・教・令の流れ、表・奏・牋・記の諸作、書・誓・符・檄の作品、弔・祭・悲・哀の文体、答客や指事の作や三言・八字の文、さらに篇・辞・引・序や碑・碣・誌・状など。これらの諸ジャンルは、たとえば塤と笙が耳にここちよく、黼と黻が目をたのしませるようなもの。人びとはこれらによっておのが想いを、表現するようになったのである。

この第四段は、［詩賦以外の］その他のジャンルについての解説である。頌ジャンルをトップにもってきたのは、やはり『詩』の六義のひとつだからだろう。

この段では、末尾の「たとえれば塤と笙が耳にここちよく、黼と黻が目をたのしませるようなもの」の部分に注意せねばならない。蕭統は、「耳にここちよく」「目をたのしませる」ものが文学である、とかたっているのだ。これはいわば、文学の娯楽性重視をかたったものといえ、注目すべき主張だといえよう。

とはいえ、この娯楽性重視の発言も、文質彬彬（文飾と内容とが、ほどよく調和したものがいいなあ）の文学観はもとより、風教（為政者が徳をもって人びとを感化する）や沈思翰藻（ふかい思索と華麗な美文）の主張と、矛盾するものではない。

さきにものべたが、蕭統の基底にあった文質彬彬の主張は、実体としてはかなりあいまいで、ひろい許容範囲をもつものだった。蕭統からすれば、文質彬彬であり、沈思翰藻でもある詩文だったら、風教に役だつことはもちろん、耳にここちよく、目をたのしませることもできるはずなのだろう。それゆえ、これらの諸発言は、重点の置きかたや言いかたがちがうだけで、べつに矛盾したり対立したりするものではないとせねばならない。そう

だとすれば、現代の我われも、かかる蕭統の意をくんで、表面的なちがいにまどわされず、大局的観点から理解してゆくべきだろう。

［第五段］編纂の動機

私は監国撫軍のあいま、余暇がおおかったので、毎日おおくの詩文によみふけった。だが、周漢から現在にいたるまで千年、その間に出現した佳篇が、書帙のなかにみちあふれている。蕪雑な作をとりのぞき、秀逸な作をあつめねば、いくら努力しても、その大要に通じることはむつかしい。

この第五段は、『文選』の編纂動機をかたったものだ。簡単にいえば、「私は詩文が好きだが、量がおおくてよみきれない。だから精選した選集をつくりたい」というものだ。蕭統がなぜ『文選』をつくったのか、いろんな議論があるが、もともとの編纂動機は、こうした個人的なものだったのである。ところが結果的には、個人用どころか、後世の知識人がみなよみふける、文学史上もっとも人気のたかい選集になったのだった。

［第六段］作品の選録規準

儒教の経典類は完璧なもので、これらの書に取捨の手をくわえることはできぬ。諸子百家の書は、思想をのべるが、文飾には意をもちいていない。また賢人の善言や忠臣の諫言、策士の言説、弁論家の口上なども、実体としては文学とはことなる。また事実を記述した史書や年代記の類も、文学の仲間とはいいがたい。だから以上のものは、『文選』には採録しない。ところが史書中の讃、論、序、述は、内容はふかい思索から出発し、表現は華麗な美文に帰着している。されば、詩賦とならべて採録することにした。こうして、周から梁までの名篇を三十巻にまとめて、『文選』と名づけたのである。

この第六段は、『文選』中にどうした作を採録し、どうした作をとらぬかをかたったものである。簡単にいえ

ば、経書、思想の書、弁論、史書類はとらず、詩文のみを採録する。ただ例外として、史書中の讃、論、序、述は沈思と翰藻を兼備するので、詩文とともに採録する――というものだ。つまり直接的な言いかたではないものの、蕭統は、沈思と翰藻を兼備した詩文を『文選』にとり、そうでないものは採録しなかった、とのべているのである。

以上、ここまで「文選序」の概略をみわたしてきた。文学の進歩史観、ジャンルの発展、娯楽性の重視など、蕭統の文学観を明示する諸発言がなされ、さらに編纂動機や作品の選録規準（沈思翰藻）も説明されていた。序文としては周到な内容だといってよい。『文選』は、こうした方針にもとづいて編纂されたのだった。

この序文中の発言と現存の『文選』とをくらべてみると、その方針が反映したとおもわれる箇所が、いくつかある。たとえば、近代重視の作品選録やジャンルの配列のしかたなどだ。前者を説明すれば、蕭統は［第一段］で文学の進歩史観をかたっていたが、たしかに、『文選』には斉梁の諸作、すなわち［蕭統からみれば］近現代の詩文がたくさん採録されている。西晋以降、あるいは建安以降を近代とかんがえれば、量は格段におおくなるだろう。

私見によれば、蕭統は、梁朝の皇太子という、特殊な立場にあった。それゆえ、現今の［父帝が現出せしめた］梁朝は、過去のどの時代よりも盛時なのだと、無意識にかんがえていたろうとおもわれる。進歩史観にもとづく近現代の作の多数採録は、そうしたこととも関係しているのだろう。

だが、そのいっぽうで、序文中の発言と現実の『文選』とがくいちがっているという指摘も、しばしばなされてきた。たとえば、序文で戒や誥のジャンルに言及するが、本体には採録していないし、序文で答客といいながら、本体では設論というジャンル名を採用していることなど。そうしたなか、おおきな問題になったのが、具体

的な作品選録をめぐる種々の疑問である。

さきにもみたように、蕭統は、沈思と翰藻の兼備という規準をかたっていた。しかし、採録された作品Aは、真に沈思翰藻兼備の規準にかなうのか、作品Aをとり作品Bをとらなかったのは、後者に沈思翰藻が皆無（もしくは希薄）だと判定したからなのか、そもそも沈思と翰藻の兼備を、どうやって判定したのか――などとかんがえたとき、序文でのおおざっぱな説明だけでは、とうてい納得できそうにない。じっさい、個々の作品の採不採をきめる場において、合理的かつ客観的に、沈思や翰藻の有無を判定したり、その多寡を計量したりすることは、現実にはなかなか困難だといわねばならないだろう。

これを要するに、「文選序」でいう沈思翰藻の兼備なるものは、いわば基本方針のようなものにすぎず、現実の選録の場では、よくいえば臨機応変に、わるくいえばおおざっぱに、採録の可否を決定していたのだろう。そしてその採不採の最終的な決定権は、もちろん蕭統にあったのだろうが、そのさい、周辺の助言や推薦も有効だったはずだ。くわえて、『文選』編纂の終盤、蕭統が母の喪に服していたときは、周辺の者によって、恣意的な選録がおこなわれることも、ないではなかったろう。

ところで、序文での発言もふくめ、『文選』編纂の場で留意せねばならぬことは、選録のさいにおこりやすい、意識無意識の偏向である。『文選』にかぎらぬが、ひとがひとの詩文を評価する場合、基本方針があったとしても、選録者のこのみや斟酌によって、ある種のかたよりが生じてくるものだ。選録者が、神のごとく公平に、そして機械のごとく正確に、採不採を決定したなどというのは、幻想にしかすぎない。神でもなく、機械でもなく、ひとがひとの詩文をえらぶ以上は、こうした偏向がでてくるのは、とうぜんのこととせねばならないだろう。

そこで、私が気がついた範囲で、編纂上ありえたであろう偏向を、いくつか指摘してみよう。

第一に、判断のゆれがあったろう。

沈思と翰藻を兼備するといっても、両者の有無やその兼ねあいは、数字で明確にできるようなものではない。じっさいには、文質彬彬の場合とどうよう、かなりあいまいなものだ。ある作が沈思と翰藻を兼備しているのかいないのか、そしてその兼備の度あいは、両者どれぐらいの割合なのか（五対五なのか、六対四なのかなど）などは、主観によって左右されやすいだろう。

すると、ただでさえ「寛和にして衆を容れる」性格の蕭統のことだ。周辺、たとえば劉孝綽のつよい押しがあったなら、すぐ沈思翰藻の兼備ありと判定してしまっただろう。その結果、両々兼備した作の許容範囲は、ややもすれば、ゆるく、ひろくなっていったのではないか。

たとえば、淵明「閑情賦」は諷諫が皆無、したがって沈思がゼロだから、採録はしない。だが、漢武帝「賢良詔」や諸葛亮「出師表」などは、経世や諷諫の意を有するので沈思の作としてよい。翰藻のほうはあやしいが、でも皆無ではなさそうだから、まあ採録してもよかろう。宋玉「高唐賦」や曹植「洛神賦」は、翰藻の点は問題ないし、また諷諫も皆無とは断言できないので、これらも入選としてさしつかえあるまい――などということになったろう。

ただ、私は、これはわるいことではなかったとおもう。そうした、ゆるく、ひろいほうへの判断のゆれは、結果的に、幅ひろく名篇をあつめるという、好結果をもたらしたとおもうからだ。現在からみれば、『文選』は、定評ある古今の名篇を、満遍なく採録している。もし、厳格に沈思翰藻の兼備という方針にこだわっていたなら、選からもれた作が、けっこうおおかったろうとおもわれる。蕭統の［ゆるく、ひろいほうへの］判断のゆれや、「寛和にして衆を容れる」性格があればこそ、幅ひろく名篇をあつめられたのだろう。

第二に、選録者のこのみによって左右されることもあったろう。

「文選序」で蕭統は、「私は監国撫軍のあいま、余暇がおおかったので、毎日おおくの詩文によみふけった」という。ここでいう「よみふけった」詩文は、でたらめに手にとったものではあるまい。やはり意識無意識に、自分のこのみにしたがって手にとったはずだ。そして、そのこのみの作のなかに、たぶん陶淵明や曹丕の詩文があったのだろう。

ところで、曹丕の詩文に注目したなら、九篇の作が『文選』にとられている。この九篇という量が、おおいとすべきなのか、すくないとすべきなのかは、わからない。だが、もうすこし視野をひろげて、彼の周辺にいた弟の曹植や建安七子たちまでかぞえれば、たいへんおおくの詩文が採録されていることに気づく。これは、おそらく偶然ではなく、蕭統の「[曹丕とその周辺の]建安文学が好き」という嗜好があったからだろう。

そうした眼でみれば、とくに採録数がおおい文人として、ほかにも、潘岳、陸機、謝霊運、顔延之、謝朓、任昉、沈約などがあげられる。彼らは、文学史上で屈指の文人たちだから（というより、『文選』に採録されたことによって、屈指の存在となったというべきなのだが）、おおく採録されてとうぜんかもしれない。だが、こうした人びとの作の採録においても、純粋に沈思翰藻の方針だけによったのではなく、蕭統[やその周辺]のこのみが介在した可能性はじゅうぶんありえるだろう。彼らの文学的なこのみを調査してゆけば、なんらかの関係がみえてくるかもしれない。

第三に、選録者が各種の人間関係を考慮して、斟酌をすることもあったろう。

定評ある古典しか採録しないならいざしらず、近時の作までとる選集となると、判断のぶれやこのみだけでなく、べつも問題も生じやすい。それは、選録者の恩師や先輩すじの作には、規準があまくなる（あるいは逆に、

恩師や先輩すじのライバルの作には、規準がからくなる）ということだ。『文選』でいえば、陸倕の「石闕銘」「新刻漏銘」などが、そのケースだろう。

陸倕はわかいころは、竟陵八友のひとりとして、蕭統の父君ともしたしかった人物である。そのためか東宮にもつかえ、『文選』の編纂にも参画したろうとおもわれる。ところが、編纂に参加した老師たちの作は、彼の二篇の銘以外は『文選』に採録されていない。『文選』は、在世中の人物の作は採録しない方針をとっていたからだ。そうしたなか、陸倕の作だけが採録されているのは、おそらく彼が普通七年（五二六）、『文選』が完成するまえに没したからだろう。

では、陸倕の諸作のうち、なぜ「石闕銘」「新刻漏銘」の二篇が採録されたのだろうか。たんに沈思翰藻を兼備した名篇だった（たしかに、整然とした美文でつづられている）ためなのか。あるいは、この二篇以外は沈思翰藻でないと、判定されたからなのだろうか。

私見によれば、こうしたところで、人間関係による斟酌が介在したのだろう。すなわち、この二篇の銘は、蕭統の父君だった武帝の治世ぶりを、美的行文によって称賛した内容なのである。そうした内容が、この二篇の採録に、微妙に関係したのではないかと、私はかんがえる。つまりこの二篇は、陸倕が蕭統の老師だった、父帝をたたえる内容だった――この二つの事がら（ともに選録者と作者との人間関係）が斟酌されて、『文選』に採録されたのではないかとおもわれるのだ。

特定の人物が、他人の詩文を選択して、選集をつくるとなると、どうしてもこの種の斟酌が生じてきやすい。これは人情であり、ある程度はしかたないことだ。いや、旧時の中国では、そうしたことは、むしろこのましいこととおもわれていたかもしれない。

そのためだろう、『文選』にかぎらず、それ以後にあまれた選集においても、「なぜこの作がとられ、あの作がとられなかったのか」と、疑問におもわれるケースはすくなくない。しかし、神でもなく、機械でもなく、ひとが、ひとの詩文をえらぶのだ。そうであれば、こうした斟酌による偏向がでてくるのは、とうぜんのこととせねばならない。それゆえ、選録者と、個々の作品作者との人間関係を、慎重に調査してゆけば、おそらく、なんらかの斟酌の可能性がみえてくることだろう。

清水凱夫氏は、『新文選学――文選の新研究』（研文出版　一九九九）において、こうした人間関係による斟酌によって、相当数の作品採録がなされた、と主張されている（ただし氏は、実質的に劉孝綽が『文選』を編纂したとかんがえておられるので、蕭統でなく、劉孝綽をめぐる人間関係である）。こうした氏の着眼、そしてその議論は、ひじょうにするどく、魅力的なものだと私はおもう。蕭統［やその周辺］の人間関係を精査してゆけば、ほかにも、いくつか同種のことがみつかってくることだろう。

ただ中国の学界では、概してこうした研究にはつめたく、あくまで、沈思翰藻の規準と合致するかどうかを、問題にする傾向がつよいようだ。そのため、これまでも中国の研究者と清水氏とのあいだで、なんどか論争がおこなわれてきた。中国の研究者たちは、選録者（蕭統）が、神のごとく公平に、そして機械のごとく正確に、沈思翰藻の作をえらんだ、とかんがえているのだろうか。私は、人間くさい清水氏の推論のほうに、左袒（さたん）せんとする者である。

十一　『文選』の編纂

以上の「文選序」への検討をふまえて、いよいよ本丸の『文選』編纂への考察にうつることにしよう。蕭統が文学史上でなしとげた業績のなかで、もっとも意義あるとされるものが、この『文選』の編纂である。この章とつぎの章では、『文選』編纂の経緯についてかんがえてみたい。

この『文選』編纂については、近時、ほんとうに蕭統ひとりの編なのか、劉孝綽ら側近の協力はあったのか、あったとすれば、どの程度の協力だったのか、どのようにして編纂され、いつ完成したのか――など、さまざまな疑問がなげかけられてきた。日中のおおくの研究者が、この難題にとりくんでこられたが、なおこれという結論はでていないようだ。

それは、やはり決定的な資料がないからだろう。蕭統自身が「だれそれの協力をうけながら（あるいは、自分ひとりで）、こういうふうに詩文を選録し、編纂していった。そして何年に『文選』を完成させた」と、詳細に説明してくれておれば、なんの疑問もおこらなかったはずだ。

しかしそんな資料は、存在しない。だから、私もふくめた研究者は、矛盾し齟齬しあう関連資料のなかから、自分がよしとするものをとりあげ（逆にいえば、よしとしない資料を否定して）、そして資料と資料とのあいだを推測でうめつつ、おのが議論をくみたててゆかざるをえない。そのさい、どの資料をよしとし、どのように推測するかによって、判断や結論が微妙にことなってこざるをえなかったのである。

かくいう私も、決定的な新資料をみつけているわけではない。それゆえ『文選』編纂の詳細に関して、明確なことはいえないのだが、だからといって、蕭統の評伝をこころざした本稿が、この問題をさけてとおるわけには

いかない。なんといっても、『文選』の編纂は、蕭統の人生のハイライトなのだ。

ただ、そうした決定的資料がない状況下、自分がよしとする資料をとりあげ、おのが推測をまじえて叙していったとしても、おのずから歯切れがわるくならざるをえない。しょせんこうだと断定できないのだから、「……だろう」「……かもしれない」「……だとおもわれる」のような記述がおおくなりやすいのである。しかとした根拠がない推測や想像のうえにたって、おのが仮説や類推をかさねてゆこうとすれば、おのずから論述は、まわりくどく、明快でなくなってしまうのだ。

それだったら、いっそのこと、論文ふうのスタイルでなく、当時の人物にかたってもらう形式のほうが、よいのではないか、とおもいたった。『文選』編纂の中心にいた人物Aが、その編纂のようすをかたってくれた、という形式なら、「……だろう」を多用しなくてもよい。さらに、そのA自身が推測をかたってゆく、という設定をとれば、私自身の仮説や想像も、自由に展開してゆけるだろう。

かくかんがえたとき、Aの候補にあがったのが、冒頭で紹介した王筠である。

この王筠は、蕭統七歳のときに東宮にはいり、以後、断続的に蕭統につかえてきた、側近中の側近だ。彼は、老師のひとりとして、蕭統から敬意をはらわれていたし、その蕭統が死んだときは、武帝の命によってその哀策文もつづっている（「一　王筠の哀策文」も参照）。この人物なら、『文選』の編集にも参画したはずだし、蕭統や劉孝綽との距離もちかくて、編纂の現場をかたってもらうのに、まことにふさわしい。そこで、架空の人物Aではなく、この王筠そのひとにかたってもらうことにした。

ただ、王筠にかたってもらうにせよ、絵空事をしゃべってくれては、まったく意味がない。ついては、私なりに『文選』編纂に関する諸資料（原典）を読解し、あわせて先学の研究書や論文の類にもせいぜい目をとおした。

そしてそのうえで、自分のよしとする資料を骨格とし、また先学のご意見もとりこんで、妥当だとおもわれた事がらを、王筠の口からかたってもらうことにした。

厳密さを期するのなら、王筠の語りのうち、Aの部分はaの資料に依拠した事実［と目されるもの］、Bの箇所はbの資料に由来する推測、Cの叙述は先学cのご意見の踏襲、Dのあたりはまったくの想像――などとわかるように、いちいち注釈を附すべきだろう。じっさい、当初はそうしていたのだが、あまりにも煩雑で、よみにくくなってしまった。ついては、それらの注釈類は、すべてカットした。

したがって、王筠がかたってくれる事がらには、論拠のあるものもあるし、ないものもある。要するに、私が了解した『文選』編纂の現場を、仮説や想像もまじえつつ、王筠の口からかたってもらったということである。そのつもりでお読みいただきたい。

ところで、王筠に『文選』編纂の状況をかたってもらうにあたって、あらかじめ前提としたことが、いくつかある。それは、

(1)劉孝綽らの協力をうけながら、『文選』を編纂した。

(2)積極的に編纂に関与したが、母への服喪によって最終段階では協力者に委任した。

(3)大通二年（蕭統二十八歳、五二八）に『文選』編纂を完了させた。

(4)「文選序」を自分でかき、率直に編纂方針をかたった。

などだ（主語はすべて蕭統）。これは、私が先学の諸論文をよみ、妥当なところかなとおもったので、前提にもってきたのである。

ただ、この前提じたいがまちがっている、といわれるかもしれない。それゆえ、この前提が妥当だとする論拠

を、提示しておくべきだろう。ただ、論拠をしめしたとしても、決定的な資料ではないのだから、けっきょくは、この前提がただしいとは断定できない。しょせん、「自分はこうおもう」というにとどまり、正邪の決着をつけることはできないのだ。そういうわけで、「こうだったはず」「これでまちがいない」とは断ぜられぬのだが、「とりあえず」「かりに」ということで、右の四点を前提とした。ご了承いただきたい。

以下、『文選』編纂とその周辺について、王筠にかたってもらうことにする。なお、かたった時期は(3)のすこしまえ、すなわち大通二年（五二八）の『文選』完成の直前のころとする。また人名は、あざなはつかわず、本名で統一した。

ぬっと劉孝綽が部屋にはいってきた。

あいさつの一言もない。同僚の自分たちが在室するのも気づかぬかのように、いちもくさんに編纂室の奥にある自分の机にむかう。

いつものことだが、こんな男といっしょに『文選』を編纂せねばならぬことに、王筠は、そっとため息をついた。ふと目のまえをみると、年老いた殷芸も、皺だらけの顔をすこししかめている。そうか、じいさんも自分とおなじなのか。そういえば、殷じいはこのまえ、孝綽のやつから、こっぴどく恥をかかされたからな。

王筠は、十日ほどまえのことをおもいだした。

殷じいがつれてきたわかい写字生が、曹丕書翰文の字句を筆写しそこなったんだ。たしか、太子さまご鍾愛の「与朝歌令呉質書」だったな。その写字生、一か所、字句を誤倒してしもうたんだ。孝綽のやつ、そんなちいさなことには、やけに目ざとい男だ。すぐみつけおった。

殷芸どの。貴殿の推薦があったから写字生に採用したのに、いったいどうなっておるのかな。こんな書き損じをしてくれるようでは、どうにも使いものにならん。貴殿のお弟子には、この程度の者しかおらんのですか。太子さまが熱心にとりくんでこられた『文選』が、せっかく完成間ぢかとなっているのに、こんなことで味噌をつけては、もうしわけないとはおもわぬのかな。そもそも貴殿は……

しつこかったな、あのときは。殷じいは最近、あまり体調がよくなさそうで、仕事もてきぱきとすすめられなくなった。だから、あれはきっと、弟子の写字生の書き損じにつけこんで、殷じいの老耄ぶりをからかったんだろう。それにしても、奥に小部屋がいくつもあるのだから、たかだか写字生に関する小言など、そこでいえばすむことじゃないか。それなのに、みなにきこえるように、わざとこのひろい編纂室で声高にいいたてて。性わるの孝綽のやりそうなことだ。

殷じいはもう五十八の高齢だ。しかたがないではないか。自分がつれてきた写字生のことで、あんまりしつこく厭味をいわれたので、殷じい、あれからいっそう老衰ぶりがひどくなったような気がする。だいじょうぶだろうか。以前はけっこうしゃんとしていたんだが、このところ、よくまちがいをするし、だいいち、なにか全体にしなびてきたような感じがする。あとで、ちょっと声でもかけてみよう。

そうそう、気の毒といえば、書き損じをしたあの写字生は、どうしたんだろうか。この二三日、あまり顔をみかけぬが。あのとき、自分のせいで師が厭味をいわれたんで、すっかりしょげていたが、自分のほうからやめたのかもしれんな。気のよわそうな若者だったからなあ。

いま王筠がいる部屋は、彼らが編纂室とよんでいる大部屋である。編纂室というのはもちろん、『文選』を編纂する部屋という意味だ。東宮の玄圃園のなかに設置されたこの編纂室、入り口からみて右手の壁には、天井ま

で書棚をつくりつけて、採録予定の作［の写し］が一作ごとに束になっておいてある。清書用の紙やら墨やらも、棚の上にならんでいる。左手の壁にも書棚がつくりつけてあるが、こちらは清書がおわった紙束が、やはり一作ごとに束になっている。こっちは、それほどおおくはない。清書は、まだこれからなのだ。

この編纂室は、もとはけっこうひろい。二十人そこいらが、議論しても、書きものをしても、じゅうぶんゆとりがあるほどだ。以前は、東宮の三万巻ちかい蔵書のなかから、採録候補作をのせた書物をとりよせ、何人かで比較し、吟味していたが、そのときでも、せまいとは感じなかった。ところが、『文選』編纂の大詰めとなったいまでは、すっかりせまく感じられる。

なにしろ、いろいろ悶着はあったものの、なんとか採録予定の作がかたまり、あとは清書するだけにこぎつけたからだ。清書となると、人手が必要になる。わしら編纂担当の者が、自分の弟子や知りあいの若者をつれてきて、それに従事させているが、もうちょっと時間がかかりそうだ。この部屋だけではせまいので、臨時に別室でも、写字生を動員して清書させている。なにしろ、字をうつすのだけは達者だが、詩や文をろくにつくったことがない手合いもまじっているので、質問がようきてたいへんだ。なかには、かってに篆書体でかいたりする者もいる。こうした連中を監督するのも、ひと苦労だ。

それにしても、この『文選』もようやく完成間ぢかになった。あとは、太子さまがかかれる予定の序文だけ。ここまでくるには、ずいぶんながかったな。

このわしときたら、母うえの喪に服したはいいが、度をすぎた節制がたたって、五年ほど、ねたりおきたりの日々だった。ほんと、なさけないことだった。なんとか体調が回復して、また出仕できるようになったのは、三年ほどまえの普通六年（五二五）にすぎん。それでも、復帰できたおかげで、太子さまご執心の『文選』の編纂

にまにあうことができた。

王筠はあらためて、そっと周囲をみまわしてみた。とおくに、むつかしそうな顔をして、なにか書類をにらんでいる劉孝綽がみえた。目のまえの殷じいは、ぼおーと正面をみつめている。いや、あれは、たぶん、なにもみておらぬのだろう。ぼんやりと、昔のことを、おもいだすともなく、おもいだしているだけ。夢うつつ、というやつだろうな。

殷じい、歳をとったな。むかしは太子さまの侍読をつとめていたが、あのころの殷じいは、えらくたのしそうだった。まあ、無理もない。一をきいて十をしるような、聡明で、しかも心のおやさしい太子さま。あの太子さまのお相手をつとめておったんだからな。でも、そんな昔のことばかりおもいだし、昼間からぼんやりしているようでは、殷じいよ、そろそろ東宮のお務めも、おわりにしたほうがいいかもしれんな。

そういえば、わしが『文選』編纂のことをはじめて耳にしたのも、この殷じいの口からだった。それは、いつのころだったか。たしか、あれは……。

殷芸のほうけたような顔をみているうちに、王筠はいつのまにか、『文選』編纂がはじまったころのことを、想起しはじめた。こうして王筠もまた、白昼夢のなかにはいっていったのである。

……あれはいつだったか。『文選』の編纂が、はじまったのは。

たしか、いまから六年まえ、普通三年（五二二。蕭統二十二歳）のころだったらしい。らしいというのは、さきにもいったように、母うえの服喪やなにやらで、わしはしばらく病にふせっておったんで、そのへんの事情はようしらんのだ。

わしが病がいえて、官界に復帰したあと、殷じいからきいたんだが、そのころ太子さまは、えらくはりきっておられたそうな。というのも、ちょうどそのころ、太子さまは劉孝綽に、ご自分の文集を編纂させたばかりだったらしい。

これを耳にしたのは、わしが病がおもくて、床にふせっていたときだった。あのとき、わしは風のうわさで、そのことを耳にして、がっくりきてしもうたもんだ。よりによって、太子さまの文集を、あの孝綽に編纂させるとは。わしが元気だったら、きっと孝綽でなく、わしのほうが、と歯がみしたことだよ。でも、まあ、わしが元気だったとしても、やはり孝綽が指名されたことだろう。じっさい、あのころもいまも、孝綽のやつは切れ者だし、太子さまや天子さまからも、受けがいいからなあ。

『文選』を編集することになったのも、そのころらしい。なんでも、そのころ太子さまの『詩苑英華』と『正序』が完成したのが、きっかけだったというひともいたなあ。

この『詩苑英華』は五言詩の名篇をよりすぐった選集で、『正序』のほうは文章作品をえらんだ選集だった。さらにそのころは、天子さま（武帝）が編纂を命ぜられた『歴代賦』も完成しておったから、宮中では、詩と文と、そして賦の選集がそろっていたわけだ。だから、こんどは、それらを土台にして、賦・詩・文をあわせた総合的な選集をつくろうとされたんだろう。それだったら、なんといっても、いちからつくるのとはちがって、かなりラクだ。その総合的な選集を文選と名づけたのは、たぶん太子さまだろうが、わしも病床にいながら、なかなかよい名づけだとおもったもんだ。

この『文選』の編纂は、太子さまがえらくご熱心だったそうな。ふつう、おえらいかたの名で編纂された選集は、たいてい実質は配下の者どもがやったものなんだが、太子さまは、そうしたことはおきらいだった。もちろ

ん東宮の連中もお手伝いしたんじゃが、けっして、「まかせた。よきにはからえ」ではなかった。太子さまは、ご自身が詩文をおすきだったこともあって、他人でなく、自分の眼で名篇をえらばねば気がすまんかったのだろう。

これはもう、太子さまのご性分だとしかいいようがない。じっさい、さきだつ『詩苑英華』のときでも、ちかぢか数十年の五言詩の名篇を、太子さまご自身がお選びになったそうな。数十年の五言詩といっても、たいへんな量がある。それを自分でえらんでゆくのは、たいへんなことだ。おそらく、以前からいくつかできていた選集を参照しながら、お選びになったんだろうが、それでも、えらく時間をおかけになったようだ。太子さまのご熱心さには、ほんとうに頭がさがるよ。

その『詩苑英華』、弟ぎみの湘東王（蕭繹）さまも、わざわざお手紙をかかれて、ぜひみせてほしいと所望されたそうな。太子さまのお選びになったものだと、ほんと、人気の度がちがう。

それほどご評判の『詩苑英華』だったのに、太子さまは、あまり満足されなかったようだ。というのも、まだじゅうぶん推敲できぬうちに、「太子さまがお選びになった選集」ということで、あっというまに世間にでまわってしまったからしい。太子さまには、それが、きっと不本意だったのだろう。

もっとも、あのかたは、孝綽に編纂させたご自分の文集でさえ、たぶんご謙遜だろうが、つまらん詩文ばかりだとおっしゃっておる。そして、自分のはだめだが、いっしょに編入した臣下たちの詩はできがいいよ、とおっしゃったそうな。太子さまの文集には、臣下たちと唱和した詩を、そのままぜんぶ編入しているので、たぶん臣下の者に花をもたせようとされたんだろう。

あいかわらずのご謙遜だが、これは、ほどほどにしたほうがいいと、わしはおもうんだ。そうでないと、殷鈞

や張緬などおとなしい連中はまだいいが、あの孝綽のやつが図にのって、自分の詩が太子さまからほめられた、などといいふらしかねん。あの孝綽、自分をうりだすのはうまいからな。

ところが、順調にすすんでいた『文選』編纂作業は、普通五年（五二四）に北伐戦争が発生したため、いったん中断してしまったらしい。戦争の余波で、都の建康、米の値段が騰貴してしまったからだ。おやさしい太子さまは、詩文集の編纂どころではないと、お思いになられたのだろう。編纂作業をほおりっぱなしにして、自分の衣食を質素にしたり、困窮した人びとに食料や衣服をおあたえになられたりして、さかんに民草を救恤するお仕事にはげまれたそうな。

それが一段落ついて、『文選』編纂を再開したのが、普通六年（五二五）ごろだ。ちょうどそのころだった。このわしが、病がいえて官界にもどり、太子中庶子として東宮に復帰できたのは。そのとき、わしはもう四十四になっていた。

でもうれしかったなあ。ひさしぶりに東宮にもどり、太子さまのおそばに復帰できたときは。太子さまは、もともとふくよかなご体格だったが、以前よりもっと貫祿がつき、もっとたくましくなっておられた。そして、このわしの手をとって、「王先生、よくお帰りくださった」といって、涙ぐんでくれた。こんなおやさしい態度、これをごく自然に、ごくふつうにおとりになれるのが、太子さまのすばらしいところだ。「自分は皇太子だから」といって、お高くとまることは、ぜったいにない。太子さまはほんとうに、このわしを先生だとおもってくださっていたんだろう。

天にものぼる思いとは、このことだ。ああ、わしの優秀な教え子。いや、太子さまか。でも、やはり教え子は教え子だ。このすばらしい教え子のためなら、なんでもするぞと、あらためておもったものだ。だからそれ以後、

わしはすっかりまいあがり、しゃかりきになって『文選』の選詩や選文にはげんだものだった。じっさい、よい詩文をみわけることについては、わしも多少のおぼえがあったからな。

あのころは、東宮に王規や殷芸、王錫、張緬らがいたし、太子さまもよく編纂室にお出ましになって、ほんとうにたのしかった。太子さまがお越しになると、なにか部屋のなかが急にあかるくなり、華やいできたような、そんな気がしたもんだ。他の老師連中も、なにかうきうきとして、さあがんばるぞ、という感じだった。なにしろ、ご親切で、善意のかたまりのようなおかただったからな。

ときどきは、玄圃園のなかで清雅な宴遊も、ひらいてくださった。太子さま以下、同僚とともに月下、清風がふくなか、広大な庭園のなかを散策していったな。そして花鳥風月をめでながら、わきおこった感興を、そのままさっと詩句にしていったものだ。わしも何度かご相伴させていただき、腰折れを何篇かつくったよ。太子さまも、そうしたときは、すっかりくつろいで、いろんなことをかたっておられた。こうした清雅な宴遊をはじめたのは、魏の曹丕だったんだよ。いつかのとき、太子さまは、わしにそうお教えくださった。なるほどそうだったのかと、おもったもんだ。

とくにたのしかったのは、いろんな文学談義がかわせたことだ。太子さまもよくおしゃべりになったし、わしらも意見をのべた。あのころの東宮は、ほんとに自由にものがいえたものだった。

当初、『文選』に、どんなジャンルを採録するか、新古のどちらの作に重点をおくか、建安の詩文がおおすぎないかなど、よく議論したらしい。だが、わしが復帰したときは、もうだいたいの方針はきまっていて、当落線上の作の取捨が問題になっていた。わしは近時の作を優先すべきだと主張し、それがとおった。だから結果的に、沈約どのや任昉どのなど、最近の大御所の作が、たくさんはいったな。つぎにおおいのが、建安期の詩文だ。建

安のころはたしかによい詩文がおおいんで、たくさんいれたのはよかった。でも正直いって、つまらんちっぽけな書翰文までいれたのは、わしはあまりよくなかったとおもう。

また殷じいによると、以前は、どんな作風を重視するか、どんな規準にするかについても、よく議論したらしい。はじめごろは、文質ということばが、よく話題にのぼっていたという。おかげで、文質彬彬というのが、『文選』採録の規準であるみたいに、みんなおもいこんでいたそうな。

でもなぜか、わしが復帰したころは、太子さまはこのことば、あまりお使いにならなかった。そのかわり、沈思とか翰藻とかハイカラな感じのことばを、しばしば口にされるようになっていた。たぶん、文質とおなじような意味なんだろうけどな。なにしろ、文質彬彬ということばは、『論語』が典拠ということもあって、かたぐるしいし、つかいふるされたような印象があった。それに対し、沈思や翰藻などの語は、なにか新鮮で、きらびやかな感じがしたもんだ。

この沈思と翰藻の二語、魏の卞蘭「賛述太子賦」のなかに似たことばがあって、曹丕の詩文をほめる文脈のなかでつかっている。だから、そこからもってきたんじゃないかと、わしはにらんでいる。さきに劉孝綽がかいた「昭明太子集序」でも、この卞蘭の賦を引用しておったし。たぶん卞蘭の賦が、曹丕をたたえた作であるのと、関係があるんだろう。なにしろ太子さまは、ふだんから魏の曹丕を尊敬し、自分もああいうふうになりたいと、口癖のようにおっしゃっていたからなあ。

でも、こうした文学談義の場では、太子さまは自分をおさえて、よく妥協されていた。

太子さまは、ほんとうは陶淵明とかいう、えらく地味な文人がお好きだったことを、わしはよくしっている。太子さまにとって、曹丕は、こうありたい、こんなふうに文雅をたのしみたいというお手本だったが、淵明のほ

うは、さしずめ、ひそかなやすらぎというか、精神安定剤みたいなものだったんだろう。淵明の詩文をよむと、心があらわれるようだと、よくおっしゃっていたし。たしかに淵明の詩文は、いっぷうかわっていて、清廉な感じをもっているからな。

ただ、太子さまは、『文選』にこれをとれ、とはおっしゃらなかった。だから、わしは、そうした太子さまの意をくんで、しらぬふりをして淵明の作を推薦したんだよ。その結果、淵明の作が『文選』に何篇かはいったのは、まあ、よかったとおもう。

概していえば、この東宮には、かざった詩文がすきな連中がおおいかった。そのためか、古典や地味なものがおすきだった太子さまも、いま流行の、対偶や典故を多用した美文の作を、お読みになられるようになった。そういうふうに、よく周辺の意見をききいれるところは、太子さまの美点でもある。そうした事情で、こんどの『文選』にも、けっきょく飾りのおおい作がおおくなってしまった。

でも、まあ、それもわるくはない。なんといっても、秦漢のふるいのや、淵明のような、飾りがすくなく、地味な作ばかりあつめても、あまりおもしろくないからな。すこしは、いまふうだったり、やわらかいものも、あっていいとおもうんだ。そうでないと、せっかく選集をつくっても、いまの連中は、なかなか手にとってくれぬからな。

そういえば、おもいだした。ずっと以前、太子さまは、「七契」という、やわらかい文をかかれたことがあった。「七」というジャンルは、漢の枚乗「七発」よりこのかた、たのしくて、ちょっと色っぽいところもある作ときまっている。その七の文を、あの太子さまがかかれたというんで、わしはちょっと意外におもって、すぐ手にとってよんでみた。

すると、そのなかで、きれいな洛水の女神がでてくる場面があった。あの太子さまが、どんな妖艶な美女をおかきになったのかとおもって、つぎの葉をめくってみた。すると、なんとまあ、君子の好逑がでてきたじゃないか。これには、びっくりしたよ。さすがは、まじめな太子さまだ。高貴なおかたというものは、ああした場面であっても、礼というものをお忘れにならないんだな、と感じいったものだった。

十二　『文選』完成前夜

ただ、『文選』編纂の作業、たのしいことばかりではなかった。ちょっとこまったことも、あったな。いちばんこまったのは、人間関係のほうだ。

というのは、太子さまの東宮には、わしや殷じい以外にも、けっこううるさ型の老師たちがそろっていた。みな、詩文や学問に一家言のある連中ばかりだから、なかなかひきさがらない。文学談義だけでなく、些細なこと、そう、たとえば発言の順番や宴会の席の配置ぐあい、そんなことでさえ、たがいにはりあっていた。文人相軽といったのは魏の曹丕だったが、東宮の連中も、まったくそのとおりだった。

じっさい、かくいうわしだって、ちょっとはりあったこともあった。妙なことだが、東宮の編纂室や宴席の場などでは、ちょっとでも自分がさがると、まけたような気分になってしまう。わしもわかいころは、名門王氏のなかで「王に王筠と王泰あり」といわれた男。いわば門閥の栄光を背おっているわけで、どうしても、そこらへんの連中にはまけられん、という気分になってしまうんだな。

わしのみるところ、東宮のなかでいちばんの問題児は、やはり孝綽のやつだろう。あいつは、太子さまの文集

を編纂したのはおれだといって、いつもいばりくさっておった。自分は一段上の場所にいる、とおもっていたのだろう。

太子さまが編纂室にお越しのときは、まだおとなしかったが、太子さまがお帰りになると、あいつ、態度を豹変させる。わがもの顔で、えらそうに指示しはじめるんだ。孝綽のやつがあまりにいばりちらすんで、他の老師たちもすっかり腹をたてた。おかげで、いつもはげしい言いあらそいになる。あいつは、詩文のことだけでなく、ひとの才能を見くだすようなことをいうから、ほんとにこまったもんだ。わしがまだ東宮に復帰するまえのころだが、どうも、到洽なんかと、はでにやりあったこともあったらしい。

ところが、わしがひさしぶりに東宮に復帰した普通六年、いれちがうようなかっこうで、あいつが失脚したんだ。おかげで、いやなやつが東宮からいなくなったんで、わしにはちょうどよかったよ。

くわしいことはようしらんが、なんでも、御史中丞になった到洽が、孝綽を弾劾したところ、それがうまくいったらしい。なんか、うごかぬ証拠があったらしくて、さすがの孝綽も弁明しきれなかったようだ。この事件は、建康じゅうで話題になった。おかげで孝綽は、せっかく手にいれた廷尉卿の地位をなくしてしもうたんだが、それをきいて、孝綽ぎらいの連中は、みな手をたたいてよろこんでいたな。まったく、あそこまで敵がおおいやつも、めずらしい。

おかげで、東宮もだいぶ平和になった。でもそのぶん、編集はとどこおることがおおくなった。孝綽がいると、編集作業がテキパキすすむんだが、それは、いつもあいつが独断でことをはこんでいたからだ。詩文集の編纂というやつは、採録作をきめる以外にも、じつにこまかな問題がおおい。当該の作を史書からとるか、文集からとるかとか、標題が原典によってちがっていて確定できないとか、採録した作の一部がよめないが、どうも元テキ

ストに誤写があるらしいとか、当該作の序文がえらくながいが、それでもすべてとるのか、バサッときって本文だけにするのか――など、編纂上のちょっとした問題は、ほんとにきりがないほどだ。

それをあいつは、太子さまには無断で、さっさと判断していたんだ。自分は太子さまから、すきなようにやってくださいと一任をうけている。だから、かまわないんだ。これがあいつの口癖だった。じっさい、太子さまはそんな編纂のこまかいことは、口をお出しにならない。そのうえ、北伐戦争の余波でいそがしくなって、編纂室にこられない時期もあったようだし。

そんなわけだったので、あいつがいなくなると、編纂の作業がとどこおることも、おおくなったわけだ。みんなで議論してきめるんだが、時間がかかってしかたがなかった。それでもわしは、衝突したりいがみあったりするよりは、はるかに気分的にラクだったよ。ただ太子さまのほうは、孝綽がいなくなって、ちょっとさみしそうだったけどね。

ところが、その後まもなく、大問題が勃発したのだった。それは、孝綽が失脚した翌年の普通七年（五二六）十一月、太子さまのご母堂、そう、丁貴嬪さまが急に体調をくずされ、ご薨去されたことだ。とうぜん太子さまは、喪に服されることになった。せっかく、編纂上のこまごましたことも解決して、『文選』の編纂が終盤にさしかかっていたころだったんだが。

わしはあのころ、『文選』のことなんかより、太子さまのご健康のほうが心配だった。あの太子さまは、みなもしってのとおり、たいへん親孝行なかただ。ご母堂薨去によるご心労のあまり、すごくお痩せになられたらしい。もちろん喪に服されていて、お姿をあらわさぬわけだから、くわしいことはわからないんだが、うわさでは、すごくお痩せになったうえ、病気がちになられたらしい。あの父帝さまも、太子さまの体調をご心配なされるほ

どだったという。なにしろ、ほとんど食事もとられぬほどだったそうな。

そんなこんなで、太子さまは編纂室にお越しにならなくなった。なにしろ、いっときは『文選』編集どころか、お起きになるのもむつかしかったそうだ。その後、すこしは食事もとれ、体力ももどってきた、ときいた。それで、わしもすこしは安心したんだが、それでも普通八年のあいだは、太子さま、この編纂室にお姿をお見せになることはなかった。なんといっても服喪中の身ともなると、そうおもてだっては、この部屋にやってこられんからな。

そういうわけで、『文選』の編纂は、わしらだけですすめてゆくことになった。太子さまからご伝言があって、自分がいなくても、これまでの方針どおりに編纂をすすめるように、というご指令があったからだ。喪中でも、太子さま、『文選』のことを気にかけていらっしゃることがよくわかったので、わしらはその意をくんで、編纂をつづけたもんだ。

たしかに、もうだいたいの方針はきまっていたので、太子さまがこられなくても、わしらだけで編纂をすすめることができた。どうしても太子さまのご意見をうかがいたいときだけ、他人に気づかれぬよう、そっと使者に手紙をもってゆかせて、ご意向をうかがうこともできた。もっとも、太子さまはあまり明確な指示はお出しにならず、わたしたちにまかせると返答されるのがつねだった。これは、我われを信頼されているのか、指示をだす気力もおありにならないのか、そのへんのところはよくわからない。

ところが、なんの因果か、この時期、不幸なことがあいついでおこった。それは、我われの東宮の同僚が、つぎつぎと死んでいったことだ。普通七年（五二六）に陸倕（五十七歳）どの、そして普通八年（途中で大通に改元。五二七）には明山賓（八十五歳）、到洽（五十一歳）、張率（五十三歳）のかたがたが、あいついで逝去され

たのだった。

太子さまご自身、ご母堂の薨去で力をおおとしになっているのに、それにくわえての、この無情なしうち。天命はいったいどうなっているのかと、このわしも、うらみたくなったよ。これらの諸氏にはたいへんお世話になってきたんで、わしもがっくりきたんじゃが、太子さまもきっと、自分の羽翼をもがれたようなお気もちだったに相違ない。

陸倕どのがお亡くなりになったときは、太子さまのご指示があって、陸どのの「銘」二篇を『文選』にいれることにした。以前からの取りきめで、生存者の詩文は、『文選』にはとらぬことになっていた。だから、陸どのの詩文も採録されぬはずだったが、皮肉なことに死んだおかげで、採録できるようになったわけだ。だがそうとはいえ、陸どのの「石闕銘」「新漏刻銘」の二篇は、たしかに名文だ。『文選』にいれるだけの価値は、じゅうぶんあるとおもう。

ところで、太子さまは、明どのらが死んだとき、よわった身体にむちうって、彼らをいたんだお手紙を、ゆかりのかたがたにあてて、かかれたそうだ。そのうちの殷じいあての手紙は、じいから直接みせてもろうたし、蕭綱どのへのお手紙も、後日に写しをよませてもらったんだが、両方とも、すばらしいお手紙だった。わしは、太子さまの恩情と悲しみがあふれた行文に、おもわず、手がふるえ、涙がでてきてとまらなかった。人の死をいたむ哀悼の書翰は、こうかけばよいのかと、あらためてお教えいただいたような気がしたものだ。

魏の曹丕も、かつて流行病で周辺の部下が死んだとき、哀悼の情にみちた「与呉質書」をかいたものだが、今回の太子さまのご書翰も、それにまけずおとらずの名文だといってよいとおもう。その曹丕書翰はもちろん『文選』にはいっているが、わしはできれば、その太子さまのご書翰も、『文選』のなかに採録したいとおもったほ

どだったよ。

そうしたつらい一年があけ、今年が、大通二年（五二八）というわけだ。年頭のころ、中心的に『文選』編纂に従事していたのは、殷じいと陸襄、王規、殷鈞、張緬、そしてわし王筠あたりだった。かつては陸倕や張率らにも手つだってもらっていたが、今や則ち亡し、となってしまった。太子さまは、ようやく喪がおわった。いちどだけ、とおくからチラッとお見かけしたが、やはりお痩せになられていた。正式の喪はいちおうおわったが、あの孝行な太子さまのことだ、まだ心喪に服されているのだろう。年があけても、この編纂室にはまだ一度もお越しになっておられない。

ところが、そうしたところへ、あの劉孝綽がもどってきたんだな。どうやら、太子さまが裏でいろいろ運動してくれたおかげで、官界に復帰できたらしい。すでに昨年にゆるされて、荊州にいた蕭繹さまのもとにお仕えしていたという。そして今年になって、この東宮へ太子僕として、もどってきたということのようだ。

だが、せっかくもどってこれたのに、あいつは、不機嫌そうな顔をして、なにもいわぬ。そもそも復帰のあいさつも、なにもなかった。ある日とつぜん、この編纂室にやってきて、おれの机はどれか、といった。それだけだった。いかにも、あいつらしい。傲岸不遜な孝綽のことだから、前回、親不孝で罰せられた［ときいた］ことだって、なにほどのこととともおもっておらぬのだろう。さらにいまは、孝綽を失脚させた到洽のほうが、もう死んでしまっている。きっと孝綽は、ざまあみろ、このおれさまをうったえたりするから、天罰があたったんだろう、ぐらいにおもっているにちがいない。

ほんとうにいやなやつ。だが、あやつが東宮にかえってきてから、編纂業務がどんどんすすみだしたのは、事実である。これは、みとめざるをえん。この孝綽、二年半ほどのブランクがあったはずだが、すぐ自分がおらぬ

あいだの作業ぶりを確認して、つぎへつぎへと編纂をすすめだした。我われが雁首そろえ、どうしたものやらと思案するような事がらも、あいつは、にくらしいほど、さっさと決断して作業をすすめてゆく。

これには、わしらも唖然とするほどだった。太子さまからも、「劉［孝綽］先生のご指示にしたがってください」と連絡があったことだし、こうなったら、もうあやつの指示にしたがうしかない。なんといっても、この孝綽、まちがいなく能力はあるんだし、太子さまから信頼されているからなあ。

こうして、『文選』の完成は、いよいよ間ぢかとなった。いまも、劉孝綽や陸襄、王規らが、大勢のわかい写字生を指揮しながら、最終段階の清書にいそしんでいる。

おもえば、ながい歳月だった。今年は大通二年（五二八。蕭統二十八歳）、太子さまが『文選』編纂をお始めになられたのが普通三年（五二二。蕭統二十二歳）。すると、あしかけ七年かかったことになる。この間、東宮メンバーの入れかえや中断など、いろんなことがあった。このわしも、母うえのご逝去による服喪や病臥など、東宮をしばらくはなれたこともあったしな。それでも多少は、太子さまのお手伝いをすることができ、ほぼ完成というところまでこぎつけられたのは、しあわせなことだった。

いつもおもうんだが、太子さまは、どうしてこの詩文集を編纂される気になったんだろうか。「監撫はけっこうヒマなんだ」とか、「詩文がすきだから」とか、いつかおっしゃっていたが、それだけではあるまい。最近は、いろんな高貴なおかたが、選集や総集をつくっておられるから、選集づくりじたいは、それほどめずらしくはない。でもそれらはたいがい、ご自分でなく、友人や配下の者に命じているだけ。太子さまのように、ほんとうにご自身で、選詩や選文をなさったかたはめずらしい。

わしが推測しているのは、これも、あの魏の曹丕を模されたのではないか、ということだ。太子さまが曹丕を

尊敬し、自分もああなりたいと念じていたのは、みなしっているとおりだ。なかでも太子さまは、あの南皮のあそびがお気にいりだった。臣下たちとともに月下、清風にふかれながら、庭園のなかに散策する。そして興がおこれば詩をつくりあう、あのあそびだ。そうした清雅なあそびを叙したのが、曹丕の「与呉質書」と「与朝歌令呉質書」だった。だから太子さまは、この二書翰が大のお気にいりだったよ。おそらくなんどもなんども、暗記できるほど、お読みになったのではないかとおもう。

そのだいすきだった「与呉質書」のなかに、

徐幹だけは文と質とを兼備し（原文「懐文抱質」）、恬淡として寡欲な人がらで、隠遁の志をもっています。

彬彬たる君子（原文「彬彬君子者」）といえましょう。彼は『中論』二十余篇をつづり、一家の言を完成させました。その文章や内容たるや典雅そのもので、後世につたわることでしょう。この人物こそ、不朽の名声をたもつのです。

という一節がある。ここに、文質彬彬という語がでてきている。これは、建安七子のひとり徐幹の人がらを叙したものだ。わしは、この一節こそ、太子さまが文質彬彬をご主張される、きっかけになったのではないかとおもう。

さらに、そのおなじ「与呉質書」のなかに、つぎのような一節もある。これが、太子さまの『文選』編纂と関係があるんじゃないかと、わしは推測しているんだ。

自分の寿命は百年もあるはずであり、貴殿らとともに、長生きできるとおもっておりました。それなのにこの数年のあいだに、仲間がほぼ全滅してしまうとは、おもいもしませんでした。このことを筆にすると、心がいたみます。このごろ、彼らの遺文をあつめて一集にしましたが、その姓名をみれば、みな鬼籍のひとに

なっております。かつての宴遊を想起すれば、まぶたにうかんでくるのに、その彼らは、もう死んで土塊になっているのです。もういうべきことばもありません。

この部分は、悪疫が流行して、徐幹、陳琳、応瑒、劉楨らが、いっきに死んだとのべ、かなしんでいる場面だ。ここの劉楨らは、建安七子たちのメンバーであり、曹丕が清雅なあそびをともにした臣下たちだろう。曹丕は、彼らの死をいたんでいるのだが、その結果として、「彼らの遺文をあつめて一集にしました」といっているのに注目してほしい。ここでいう「遺文をあつめて一集にし」たという行為、これが、太子さまの詩文集づくりの、とおい動機になったのではないか、とわしはおもうのだ。

というのは、太子さま以前に、同種の例があるからだ。それは、宋の謝霊運の事例である。霊運もおそらく、曹丕のこの書翰のこの一節に、ピンときたのだろう。そして「擬魏太子鄴中集詩」なる模擬詩をつくっている。それは魏太子、つまり曹丕の『鄴中集』に模してつくった連作の模擬詩だ。この『鄴中集』なるもの、おそらくこれが、曹丕が七子の「遺文をあつめて一集にし」たものなのだろう。

この『鄴中集』、佚したようで、いまはみることができん。だから、謝霊運がほんとうに、この『鄴中集』をみたかどうかはわからんし、ひょっとすると、これも仮構で、じっさいはみてないのかもしれぬ。だが、そんなことは、まあ、どうでもいい。そんなことより、ときの皇太子が臣下たちと文雅をともにし、そして友情あふれる詩文集として結実する――これが、謝霊運に魅力的だと感じられたこと、そっちのほうが、もっと大事なことだろう。わしは、曹丕の例にくわえて、この謝霊運の事例も、太子さまのお心にひびいたんではないかとおもう。じっさい、この曹丕「与呉質書」や謝霊運「擬魏太子鄴中集詩」も、『文選』のなかにきちんと採録されているからな。

そういうわけで、太子さまは、曹丕が臣下の「遺文をあつめて一集にし」た事例（鄴中集）にヒントをえたのではないかと、わしはおもう。そして自分も、自分用のお気にいりの選集をつくってみたい、とお思いになられたのだろう。そしてお作りになられたのが、まずは五言詩の選集『詩苑英華』だったわけだ。そしてそれがさらに発展して、けっきょく『文選』を編纂することになったのではないかと、わしはにらんでいるんだが、どうだろうかな。

さて、この『文選』、あとは、太子さまがいつ序をかいてくださるかだ。本体はもう清書がすすんでいるんだから、あとは序さえできれば、完成したも同然となる。太子さまがその気になれば、序文などさっとかきあげられるはず。問題なのは、かくだけの気力体力が回復しているかどうかだ。

きましたぁ。

うわずった、しかしつよい叫び声が、いきなり、王筠の耳朶をうった。おかげで王筠は、ハッと白昼夢からさめた。……うーん、夢か。いや、この叫び声は夢じゃない。文箱を両手にささげもった若者が、大声でさけびながら、編纂室おくの孝綽のほうへむかっている。きました、きたんです、序文が。たっ、太子さまから――。

周辺から、どよめきがおきた。

そうか、ついに序文がとどいたのか。いま、若者が両手でささげもつ文箱、そのなかに、太子さまの序文がはいっているのだろう。ああ、できた。序文ができたんだ。これで『文選』は完成できる。王筠も、おもわずたちあがった。

十三　とつぜんの死

以上、『文選』編纂とその周辺のことについて、私の推測を王筠の語りという形式で叙してみた。

かくして『文選』は完成した。ときは、大通二年（五二八）のある日のこと、としておこう。ところがその完成後、蕭統には、わずか三年の命しかのこされていなかったのである。中大通三年（五三一）の春三月、彼は事故によって大怪我をし、それがもとで翌四月に世をさってしまったからだ。享年三十一。

この最後の章では、その蕭統の死についてかたらねばならない。

『文選』が完成した翌年（大通三年、中大通元年　五二九）、二十九歳の蕭統は、「宴闌思旧」という詩をつくった。これは、この年に殷じいこと殷芸が死んだときに（五十九歳）、つくったものとおもわれる。標題にあるとおり、このとき蕭統は、なにかの宴席にでていたのだろう。そして宴たけなわとなるや、彼はふと、いまは亡き四人の臣下、すなわち明山賓、到洽、陸倕、殷芸をおもいだした。この四人はかつての日、東宮につかえ、太子と苦楽をともにした連中だ。そのありし日を回想して、この詩をつくったのだろう。

孝若信儒雅　明山賓どのは　まことに儒雅なおかた
稽古文敦淳　古典をまなばれ　温厚にしてなごやかだった
茂沿実俊朗　到洽どのは　じつに闊達なおかた
文義縦横陳　詩文においては　自在な腕前をもっていた
佐公持方介　陸倕どのは　方直さを有するおかた
才学罕為鄰　学問においては　ならぶ者がなかった

灌蔬実温雅　殷芸どのは、まことに温雅なおかた
摛藻毎清新　文藻をつらねては　いつも清新だった
余非狎異者　私はみしらぬ者と　なかよくはできぬ
惟旧且懐仁　ただ旧友をおもい　仁者をしたうだけだ
綢繆似河曲　彼らとの親密ぶりは　曹丕の河曲の清遊に似ており
契闊等漳濱　彼らとの交誼たるや　曹丕の漳濱のあそびとおなじだ
如何離災尽　ところが災難にあって　お四がたはお亡くなりになられ
眇漠同埃塵　はるかとおくにゆき　みな塵と化してしまった
一起応劉念　応瑒や劉楨のごとき彼らを　おもいだせば
泫泫欲沾巾　涙がとめどなくながれ　手拭いがぬれてくるのだ

注目したいのは、末尾の六句である。この六句、例によって曹丕の影響がつよい。「河曲」と「漳濱」は、曹丕が文学の士と清遊をたのしんだ地名（曹丕の「与朝歌令呉質書」に用例あり）である。また「如何離災尽」以下の四句は、曹丕「与呉質書」の「昔年疾疫ありて、親故多く其の災いに離(あ)えり。徐［幹］陳［琳］応［瑒］劉［楨］俱(とも)に死せり」をふまえている。したがって「応劉」は、曹丕につかえた応瑒と劉楨をいうのだが、ここでは明山賓らをさすのだろう。つまりこの「宴蘭思旧詩」は、「与呉質書」や「与朝歌令呉質書」の典故を介しながら、曹丕が建安七子の死をかなしんだように、蕭統も、文雅をともにした老師たちの死をいたんでいるのである。

この詩での蕭統は、あまり前向きな姿勢ではない。もっぱら亡き臣下を回想するだけで、「涙がとめどなくな

がれ　手拭いがぬれてくるのだ」（泫泫欲沾巾）とおわっているからだ。この時期、『文選』は完成したものの、母の丁貴嬪が薨去し、臣下もつぎつぎ死んでいった。だから蕭統、あまり元気がなかったのだろうか。

じつは、この詩をつくった前後、蕭統にはもうひとつ、気のおもい事態が発生していた（あるいは、発生しようとしていた）。母を埋葬する墓の購入をめぐって、蠟鵝（ろうが）を埋設したこと（以後、蠟鵝事件）が発覚し、敬慕する父帝とのあいだに、亀裂がはいってしまったのである。あろうことか、このうえなく孝心あつかった蕭統が、父帝から不実をうたがわれていたのだ。その意味で、この時期、蕭統には、前向きになりようのない、鬱屈した日々がつづいていたのだった。

蠟鵝事件の経緯を、『南史』蕭統伝によって紹介すれば、つぎのようなものである。

ことは三年まえ、普通七年（五二六）、母の丁貴嬪が薨去したときにさかのぼる。母が死んだあと、蕭統はよい墓地をさがさせた。そして適地をみつけ、草刈りをさせようとしていた。ところがそのとき、ある商人が、宦官の兪三副に賄賂をおくって、べつの土地をうりこもうとたくらんだのである。そこで三副は、武帝にもうしあげた。「天子さまへの運気のよさという点では、太子が入手した土地は、今回のあらたな候補地よりおとりまするぞ」と。武帝は年をとって、運気を気にしていたので、その［三副が推薦する］あらたな土地を購入するよう命じた。

ところが丁貴嬪の葬儀がおわると、墓占いが得意なある道士が、蕭統にいった。「この墓地は、長男に運気がよくありません。ただ調伏をしたならば、寿命をのばせるでしょう」。ここの「長男」を、蕭統は自分のことだと解したのだろう。そこで彼は、蠟鵝などの類をつくって、母のそばの長男用の土地へ埋設したのだった。

そうしたとき、宮中に鮑邈之と魏雅という宦官がいた。当初、二人とも蕭統より寵愛されていた。ところが、

のちに鮑邈之は魏雅よりも、うとんじられるようになった。そこで彼は武帝に、「魏雅は、太子さまのために巫術をおこないました」と密告したのである。武帝がひそかに墓地をほらせてみると、はたして蠟鵝の類がみつかった。武帝はおどろき、じっくり捜査させようとしたが、徐勉がかたく禁じた。そこで武帝は、墓占いの道士を誅しただけで、事をおさめた。

この事件によって、蕭統は死にいたるまで、ずっと慙愧の念を感じるようになった。さらにこの影響で、蕭統の息子は皇太子にたてられなかったのである。

以上が、蠟鵝事件の概略である。

この『南史』の記述、蕭統が武帝から信頼をなくしてゆく過程を、さりげなくしめしてくれている。たとえば、三副が武帝に、「太子購入の墓地は、武帝に運気がよくない」とのべているが、そのことばが、父帝の信頼をうしなう発端となった。このことばによって、武帝の胸に、「蕭統は、わしによからぬ土地を、故意に購入したのではないか」という疑念が、生じたのだろう。

さらに鮑邈之の訴えによって、蕭統の蠟鵝埋設が露顕した記述がつづく。これによって武帝の疑念は、よりつよいものになったのだった。武帝はこのとき六十代なかば。当時としては、たいへんな長命だ。おそらく、こうおもったのではないか。太子は、なかなか死なぬわしを、巫術をつかってころそうとしているのではないか。わしが死ねば、蕭統はすぐ践祚できるわけだし――と。こうみてくると、この墓地購入と蠟鵝発覚の記述は、武帝が疑心暗鬼にかられてゆく心の動きをも、たくまずして示唆しているかのようだ。

それにしてもこの『南史』の記述、奇妙、かつふしぎな事件である。あやしい動きをするのは、宦官の兪三副、墓占いの道士、そしてやはり宦官の鮑邈之の三人だ。彼ら三人は、気脈を通じてこんなことをしたのか、蕭統は

なぜ軽々に道士のことばを信じて、蠟鵝をうめたのか、武帝はほんとうに蕭統の陰謀を信じたのか――これらのことは、まったくわからない。

これらの事件の奥には、当時はやっていた風水や巫術、さらに賄賂や宦官どうしのいさかいなど、さまざまなものが介在していたことは、まちがいない。現存する資料では明確にはわからぬが、当時の宮廷の奥ぶかくには、この種のあやしき迷信がはびこり、また陰謀がうごめいていたのだろう。おそらく蕭統は、そうした迷信や陰謀にひっかかって、足をすくわれてしまったのだとおもわれる。

ただ、右の記述がただしいとすれば、道士にそそのかされたとはいえ、蕭統が、蠟鵝を墓地にうめたのはまちがいなさそうだ。旧時では、かく異物を埋設する行為は、たいへん危険なことだった。運気をよくするどころか、ひとをころそうとする巫術だったからだ。前漢の戾太子による巫蠱の禍など、ふるくからたいへんおそれられていたことなのである。

とすれば、いかに弁解したにせよ、蠟鵝をうめた行為は、疑念をもたれてもしかたがないものだったと、いわねばならない。この蕭統の行為、「〈長男（自分）に運気がよくない〉といわれたから、蠟鵝をうめました」と弁解したとしても、信じる者はおおくはなかったろう。むしろ、「父帝をなきものにして、自分が……」と企図した、とおもうほうがふつうだろう。そうだったとすれば、戾太子の轍をふまずにすんだのは（戾太子は無実だったが、父の漢武帝にうたがわれて殺害された）、蕭統にとっては僥倖だったといわねばなるまい。おそらく蕭綱の日ごろの篤実さが、疑念をうすめたのだろうが、武帝の寛仁さによってすくわれた側面もあったのだろう。

その意味で、蕭統の行為はあさはかであった。蕭統は、九重のおく、東宮のなかで、大切にそだてられてきた日嗣（ひつぎ）の御子（みこ）だ。いくら聡明にして気くばりもできたとはいえ、海千山千の宦官や道士からみれば、世事にうとく、

だましやすいボンボンにすぎなかったのだろうか。

この蠟鵝事件は、大通三年（中大通元年、五二九）、蕭統二十九歳のときにおこったと、兪紹初『昭明太子集校注』三一七頁は指摘する。右の「宴闌思旧詩」をつくったのとおなじ年である。私が、『文選』の完成をこの前年としたのは、この事件との相関もかんがえたからだ。もし完成せぬうちにこの事件がおこっておれば、蕭統は『文選』を編纂するどころではなくなるだろうから、完成はずっとおくれるはず。しかしそうすれば、すこしおそすぎる――とかんがえたのである。

このいまわしい事件は、『南史』だけにあって、『梁書』にはかかれていない。そのため、この『南史』の記述をうたがうひとも、すくなくなかった。たとえば明の張溥は、蕭統の集に附した題辞のなかで、つぎのようにかたっている。

『南史』の本伝によると、「蠟鵝を埋設して［父の武帝から］疑念をもたれた」や「舟からおちて病床にふせった」（後述――福井）などとあるが、世間の人びとはそれらの真実性をうたがった。そこで昭明を論じる者は、［そんな記述を記載せぬ］姚思廉『梁書』が信頼できるとしたのである。（『漢魏六朝百三家集題辞』中の「梁昭明集」）

だが、蕭統の死後、太子の地位は彼の息子へとはつたわらず、弟の蕭綱のほうへいってしまったのは、うごかしようのない歴史の事実である。とすれば、蕭統の死後、太子の地位を兄系から弟系にかえるだけの、なんらかの落ち度が生前の蕭統にあったものと想像されよう。そうであれば、右の奇妙な話も、あながち否定できにくいのではないかとおもう。

しかし、叙述がさきにすすみすぎた。蕭統の死後にふれるまえに、この蠟鵝事件のあと、事態はどのように推

移したのか、そして蕭統はいかなる事情で死去したのかをのべておこう。『梁書』『南史』の記事によれば、事態はつぎのようにすすんだ。

まず、蠟鵝事件の翌年（中大通二年、五三〇）、呉興郡ではしばしば水害がおこって、収穫が不足した。そこで、ある者が、おおきな水路をほって、水を浙江のほうにながすべきだと主張した。かくして中大通二年春、武帝は詔をくだし、呉、呉興、信義の三郡の男子を徴発して、これにあたらせようとした。すると蕭統は、この挙の功すくなきことをうったえて、反対したのである。これに対し、武帝は「優詔もて以て喩す」という対応をしたのだった。

この記事、とくにどうということはないが、ひとつだけ注目したいことがある。それは、『南史』がこの蕭統の政治上の提案を、「太子上疏して曰く」として引用しているということである。これは奇妙な書きかただ。「上疏」ということばは、臣下が奏文をたてまつるときに使用する語であり、太子のときにつかうものではない。だいいち蕭統はこれまで、いちども「上疏」などしたことはなかった（蕭統には、これ以外に「上疏」なる文章はない）。必要があれば、宮廷でじかに武帝にもうしあげれば、それですんでいたからである。

とすれば、ここで『南史』が「上疏」ということばをつかったのは、このとき、蕭統はなんらかの事情で、武帝と直接に話ができなかったことをしめしている。監国撫軍の任をはたすべき太子が、廷臣とおなじ立場におかれてしまっているのだ。こうしたことも、このとき武帝と蕭統とのあいだに、なんらかの懸隔が生じていたことを、暗示するものではないかとおもわれる。

そして、いよいよ蕭統最後の年、中大通三年（五三一）をむかえる。この年の三月、蕭統はおもわぬ水難事故にあった。これが彼の死につながったのである。これも『南史』の記事で紹介しよう。

蕭統は、玄圃園の後池であそんでいた。飾りつきの舟にのって、蓮をつんでいたのである。ところが、宮女が舟をゆらしたので、蕭統は池のなかにおち、おぼれてしまった。やがてすくいだされたのだが、そのさいに、太股を傷つけてしまったのだった（原文では「動股」とある。「股を動かす」の意は判然としないが、ただ太股を傷つけたのでなく、骨折等をともなう深刻な怪我だったのだろう）。

だが蕭統は、父の武帝に心配をかけまいとして、この事故のことを他言無用とし、病気だと報告させた。武帝から、具合をたずねる勅がくるたびに、自身で心配ない旨の返事をかいたのだった。いよいよ病があつくなり、周囲の者が帝に報告しようとした。だが蕭統はそれをゆるさず、「どうして父帝さまに、こんなに具合がわるくなったと、お知らせできようか」といい、嗚咽するばかりだった。

そして四月乙巳（四月六日）、にわかに病状が悪化し、危篤となった。いそいで武帝にお知らせしたが、武帝が枕元に到着したときは、もう薨去していたのである。

以上である。こうして、あっけなく蕭統は逝去したのだった。このあと、武帝は遺体のそばで哭し、蕭統に昭明というおくり名をおくった。そして王筠に哀策の文をつくるよう命じた。こうして事がらは、「一　王筠の哀策文」の冒頭へかえってゆくのである。

ところで、蕭統の死因となった水難事故の記述をよむと、奇妙な印象にとらわれる。蕭統はさきにものべたが、舟あそびをしていたとき、ひとから女楽をすすめられても、「山水に清音有り」といって、ことわった人物である。東宮にはいって二十年あまりたっても、歌妓や楽士をそばにおかなかった。逝去するまえ、父帝が女妓一部をあたえたが、蕭統はあまりこのまなかった――とも、史書にはしるす。それほど蕭統は、妓女や音楽の類をきらっていたのである。

ところが、そうした蕭統が、なぜか宮女とともに舟あそびに興じていて、死にいたる事故にあったのだった。右では宮女と訳したが、原文は「姫人」であり、やはり歌妓や女妓の類であろう。蕭統、この種の女性や音楽には関心がなかったはずなのに、まことにふしぎなことだ。たんに気分転換をしていただけなのか。それとも、もっとふかい事情でもあったのだろうか。

ここでおもいあわされるのが、このあとにつづく『南史』の記述である。この水難事故にあったとき、蕭統は異常なまでに、父帝に自分の事故を秘匿しようとしていた。この事故を他言無用とし、ただ病気とのみ報告させ、ほんとうの病状をしらせなかったのである。『南史』はそれを、父帝に心配をかけまいとしたためだった、と説明している。

しかし、ほんとうだろうか。そんなことより、むしろこんなこと（宮女との舟あそび）で重傷をおったことを恥とし、それを秘匿しようとしたのではあるまいか。ただ、かりにそうした意図だったとしても、たかだか宮女との舟あそびにすぎぬ。それを蕭統はなぜこれほど恥とし、かたく秘匿せねばならなかったのか。宮女をかばおうとしたのだろうか。それとも、もっとべつの理由があったのだろうか。

いずれにせよ、この蕭統の死は、彼らしくない、奇妙でふしぎな死にかたであった。そのため、単純な事故だったのかもしれないが、いろいろな憶測や想像をよびやすい。まじめだった蕭統、宮女との舟あそび、とつぜんの事故、そして極端な秘匿ぶり――これらの事がらに、蠟鵝事件による父子の亀裂も関連づければ、いろんな想像ができなくもない。現代の我われでさえ奇妙に感じるのだから、当時の人びとや後代の史家が、不審な思いをいだいたのはとうぜんだろう。

だが、けっきょく当時、だれも真実をあきらかにできなかったし、そして現在にいたるも、わからぬまであ

る。『南史』もこれ以上のことは、なにも記述していない。蕭統の奇妙な死をおおうヴェールは、「蠟鵝事件のときとどうよう」これからもはがされることはないだろう。

もっとも、ヴェールでおおわれているのは、末期のころのことだけであり、蕭統そのひとの生きかたや性格は、まったく明瞭そのものである。彼は、まちがいなく善意と気くばりのひとであり、詩文や学問をこのんだ好青年であった。

彼は、文学の士をまねいて詩文を唱和したが、さらに東宮に、三万巻もの書物をあつめたという。天監四年（五〇五）に編纂された『文徳正御四部及術数書目録』では二万三千百六巻、梁中期の阮孝緒による『七録』では、四万四千五百二十六巻が著録されるだけだった。そうしたなかでの三万巻というのは、たいへんな量であることが推測できよう。

蕭統の死が、おおやけにされるや、朝野の人びとは、その死におどろき、なげいた。都の男女は、宮門付近をはしりまわり、泣き声が道辺にとどろいたという。こうした人びとの哀悼ぶりは、いくぶんかは誇張があるかもしれないが、蕭統の徳望が当時において、いかにたかかったかをしめすものだろう。

さらに蕭統は至孝の性格で、よく父母にお仕えした。

まえにものべたが、宮中の父帝に伺候するさいは、蕭統はそのたびに、五更よりまえに城門があくのをまっていた。東宮の内室でくつろいでいるときでさえ、起坐のたびに、西南にむき、台城のほうに顔をむけていた。もし前日に宮中に一泊して、父帝にお目にかかる場合は、きちんとすわったまま、朝をまっていたという。

また彼は、母の丁貴嬪にもよくお仕えした。そのため、貴嬪が薨去したときは、哭礼するたびに卒倒するほどだった。悲しみのあまり、蕭統は腰まわりが半分以下になるほど、やせてしまったという。そのあまりの哀悼ぶ

りをみて、父帝はひどく心配し、喪礼にたえられぬほど哀悼するのは、不孝とおなじ。しっかり食事をとるように、といいつけるほどだった。

これほど好学で、心やさしく、また親おもいであったにもかかわらず、蕭統の死後、その長子の蕭歓は、太子の地位を継承できなかったのである。武帝は後継の皇太子に、蕭統の子の蕭歓でなく、三弟の蕭綱をたてたのだった。当初、武帝は蕭歓をたてるか、蕭綱にするか、そうとうまよったようだ。だが、けっきょくは蕭綱をえらんだのだった。

その理由は、年少の太子では天下経営をまかせられぬため、そしてもうひとつは、蕭統にふくむところがあったため、と『南史』はいう。ここでいうふくむところとは、もちろん蠟鵝事件をさすのだろう。蕭統は巫術をつかって、この自分をのろいころそうとしたのではないか。そうした疑念や不信の情が、なお武帝の心の底にわだかまっていたのである。

後世の人びと、たとえば『南史』をつづった史官は、蕭統伝末尾の「論に曰く」において、

ひどいものだ、阿諛追従の害毒ぶりは。……昭明太子のあれほどの親切ぶり、武帝のあれほどの慈愛ぶりをもってしても、告げ口がひろがってくれば、太子は死ぬまでおのが潔白さを証明することが、できなかったのである。

とかたっている。ここの「告げ口」（原文は「謗言」）とは、蠟鵝事件における鮑邈之の密告をさすのだろう。これをきっかけに、墓地から蠟鵝がみつかり、蕭統が道士にそそのかされて、それを埋設したこと（じっさいは、埋設を命じたのだろう）が露見したのだった。その蠟鵝埋設に対し、蕭統はけっきょく死にいたるまで、おのが潔白さを証明することができなかったのである。

こうした蕭統の晩年や死にかたを一見すれば、気の毒であるし、運のない一生だったな、とおもわれるかもしれない。

しかし、かならずしも、そうとはいえないのではないか。というのは、彼の周辺、たとえば父帝の最期はどうであったのか。つぎの太子に指名され、さらに帝位にものぼった三弟の蕭綱が、けっきょくどのような死にかたをしたのか。さらにその下の弟たちが、いかに憎悪しあい、いかに殺戮しあったか――を想起すれば、蕭統の死にかたは、まだましだったというべきだろう。

父の武帝、あの皇帝菩薩と称された仁君は、北方から闖入してきた荒武者侯景によって、宮中で餓死させられたのだった。また三弟の蕭綱は、かいらいの天子にはなったものの（簡文帝）、けっきょく侯景にころされてしまった。いっぽう、七弟の蕭繹は侯景を征伐して、一時は梁朝の復活に成功した。しかしすぐ、親族との抗争や積怨があだとなって、親族と西魏との連合軍によって殺害されてしまったのである。

かくみてくると、蕭統は、水難事故が原因で死んだといっても、まだ、おだやかな死にかただったというべきだろう。宮女に舟をゆすられて水中に落下したというのは、すこし外聞がわるいけれども、しかしそれとても、罪にとわれたり、敵にせまられたりしての惨死ではない。

また蕭統は、享年三十一とみじかかった。しかし、その三十一年のあいだ、彼は、よき臣下にめぐまれ、文雅な日々を満喫し、民衆からしたわれたのである。天寿こそみじかかったが、むしろ充実した生涯だった、といえるのではあるまいか。

さらに蕭統は、死んだあとも、称揚の声でつつまれた。愚か者とか裏切り者とか指弾されることなく、朝野の人びとから、生前の徳望をたたえられ、はやい薨去をおしまれた。そして後代、文人としては高評価をうけられ

なかったものの、『文選』の編者として、名を竹帛にたれることができたのである。仏教ふうな因果の道理をかんがえれば、彼はじゅうぶんよき応報をうけたというべきだろう。

賛にいう。蕭統さん、あなたの令名は、あなたが尊敬する父帝とならんで、とおくまでなりひびいています。あなたが、善意と気くばりのひとだったことも、史書等にきちんと記録されています。またあなたが編纂した『文選』は、おおくのひとによまれてきましたし、これからもよまれつづけることでしょう。あなたの善意、あなたの努力は、じゅうぶんむくわれたのです。なんと、しあわせなことではないでしょうか。どうか、やすらかにお眠りください。

蕭統略年譜

【五〇一（中興1）1歳】襄陽にうまれる。
【五〇二（天監1）2歳】皇太子となる。父の蕭衍、梁朝をひらく。
【五〇八（天監7）8歳】蔡氏と結婚する。
【五一二（天監11）12歳】裁判に関心をもち、寛刑をくだす。
【五一五（天監14）15歳】冠礼。武帝の政務を補佐する。「答晋安王書」「七契」。
【五一八（天監17）18歳】蕭綱に「答玄圃園講頌啓令」をおくり、その頌をたたえる。
【五二〇（普通1）20歳】世俗が奢侈になったので、率先して衣食を質素にする。王筠が母の死によって服喪し、ひきつづき病臥する。
【五二一（普通2）21歳】「示徐州弟詩」をつくって、蕭綱におくる。
【五二二（普通3）22歳】劉孝綽に「昭明太子集」を編纂させる。『詩苑英華』もこれ以前に完成。「答湘東王求文集及詩苑英華書」。このころ、『文選』編纂を開始したか。
【五二四（普通5）24歳】北伐戦争のため米価騰貴し、民衆の救恤に尽力する。『文選』編纂は一時中断か。
【五二五（普通6）25歳】この前後、王規、殷芸、王錫、張緬らが東宮にあり。王筠、病いえて復帰。劉孝綽が到洽に弾劾されて廷尉卿を失職する。
【五二六（普通7）26歳】陸倕が死ぬ。到洽を難じた劉孝綽の書翰をやく。11月、母の丁貴嬪死し、喪に服する。
【五二七（大通1）27歳】明山賓、張率、到洽らが死ぬ。「与晋安王綱令」「与殷芸令」。
【五二八（大通2）28歳】劉孝綽が『文選』編纂に復帰するか。『文選』、この年に完成か。

【五二九（中大通1）29歳】殷芸死ぬ。蠟鵝事件で武帝の不興をかう。「宴闌思旧詩」。
【五三〇（中大通2）30歳】呉興郡の灌漑工事の中止を上疏する。
【五三一（中大通3）31歳】張緬死ぬ。「与張纘書」。3月、水難事故。4月、蕭統死ぬ。5月、埋葬。7月、三弟の蕭綱が皇太子となる。

＊右の略年譜は、ほぼ兪紹初『昭明太子集校注』の「蕭統年譜」（二七一～三二四頁）に依拠して作成した。ただ、拙稿の内容に対応するよう、一部、些少の改変（『文選』完成年など）をほどこした。

参考文献

著書
○森三樹三郎『梁の武帝』（平楽寺書店　一九五六）
○吉川忠夫『侯景の乱始末記』（中公新書　一九七四）
○森野繁夫『六朝詩の研究』（第一学習社　一九七六）
○熊永謙『魏晋南北朝駢文選注』（貴州人民出版社　一九八六）
○興膳宏『中国の文学理論』（筑摩書房　一九八八）
○屈守元『文選導読』（巴蜀書社　一九九三）
○小尾郊一『真実と虚構―六朝文学』（汲古書院　一九九四）
○清水凱夫『新文選学――文選の新研究』（研文出版　一九九九）
○岡村繁『文選の研究』（岩波書店　一九九九）

○『六朝詩人伝』（大修館書店　二〇〇〇）
○傅剛『昭明文選研究』（中国社会科学出版社　二〇〇〇）
○曹道衡・傅剛『蕭統評伝』（南京大学出版社　二〇〇一）
○兪紹初『昭明太子集校注』（中州古籍出版社　二〇〇一）
○呉光興『蕭綱蕭繹年譜』（社会科学文献出版社　二〇〇六）
○興膳宏『中国文学理論の展開』（清文堂　二〇〇八）
○胡大雷『文選編纂研究』（広西師範大学出版社　二〇〇九）
○黄大宏『王筠集校注』（中華書局　二〇一三）
○陳延嘉・王大恒・孫浩宇『蕭統評伝』（上海古籍出版社　二〇一八）
＊右のうちでは、兪紹初『昭明太子集校注』がとくに有用だった。個々の詩文の解釈や制作年代はもちろん、事迹や交遊関係の推定も、ほとんどこれに依拠した。まれに異論があって、したがわなかったことはあるものの、本稿は、この書がなければ、かくことができなかったといってよい。あつく御礼もうしあげる。

論文
○船津富彦「昭明太子の文学意識―その根底によこたわるもの―」（「中国中世文学研究」第五号　一九六六）
○古田敬一「文選編纂の人と時」（『小尾博士退休記念　中国文学論集』第一学習社　一九七六）
○佐藤義寛「昭明太子蕭統と仏教」（「西山学報」第四〇号　一九九二）
○佐伯雅宣「梁代の侍宴詩について」（「日本中国学会報」第五四集　二〇〇二）
○張進徳「殷芸簡論」（「河南社会科学」二〇〇二―五）
○宋志民「論七体的形成和演進」（「湖南大学学報」二〇〇二―五）

○郭建勛「七体的形成発展及其文体特徴」（「北京大学学報」二〇〇七―五）
○兪紹初「南皮之游与建安詩歌創作―読文選曹丕与朝歌令呉質書」（「文学遺産」二〇〇七―五）
○王書才「従蕭統和劉孝綽等人対文選作品的接受看文選的編者問題」（「楚雄師範学院学報」二〇〇九―一）
○顔慶余「鄴中集小考」（「古典文学知識」二〇〇九―五）
○岡部毅史「梁簡文帝立太子前夜―南朝皇太子の歴史的位置に関する一考察―」（「史学雑誌」一一八―一　二〇〇九）
○郭津沢「文選編者問題研究述評」（「山西師大学報」二〇一四）
○許雲和「従鄴中集到擬魏太子鄴中集」（「文学遺産」二〇一八―六）

＊わかいころから、『文選』や昭明太子関連の論文はたくさんよんできた。恩恵をうけてきた論文をいちいちあげてゆけば、きりがない。ここでは、本稿の記述に関連したもののみをあげておいた。

関連する拙稿

○『六朝文体論』第一三章（汲古書院　二〇一四）
○『六朝文評価の研究』第七章（汲古書院　二〇一七）
○『六朝書翰文の研究』第二・七章（汲古書院　二〇二〇）
○「六朝の文学用語に関する一考察―沈思翰藻をめぐって―」（「中京大学文学部紀要」第五一―一　二〇一六）